

東北大学埋蔵文化財調査年報 10

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
1998

東北大学埋蔵文化財調査年報 10

**東北大学埋蔵文化財調査研究センター
1998**

序

近年、江戸時代の考古学に対する関心が高まっている。本年2月から仙台市博物館において開催中の「発掘された仙台城」と題する企画展は、平成9年から仙台市教育委員会が実施してきた本丸石垣修復工事のための調査の成果を公開するとともに、昭和58年の三の丸跡の調査成果、昭和58年から15年間、東北大学によって発掘されてきた二の丸跡の調査成果が公開されたものである。三の丸では伊達政宗の別荘、茶室跡と推定される建物跡出土の茶器が並べられ、二の丸では陶磁器、装身具、漆器、生活器材など、藩主周辺における公・私的生活の様子を知ることのできる重要な資料が多数展示された。ことに二の丸跡出土の南蛮人宣教師を写実的に表した志野織部水滴は、江戸初期の国際的な雰囲気をうかがうことのできる貴重な資料であり、注目をあびている。こうした出土陶磁器類は、仙台城の歴史を考えていく基礎資料として重要な位置を占めるものである。

本センターでは、このような仙台城二の丸での公的儀式や、藩主周辺の日常生活で用いられた遺物のうち、出土量の最も多い陶磁器について、その製品がどこでどのように生産され、どのようなルートで流通し、二の丸でどのように消費されたのかを解明することを、センター全体での主要な関連研究の一つとしている。そのため、仙台城出土陶磁器の広域調査を、冬季の整理作業の合間にわずかな時間を確保して、組織的に進めてきた。江戸時代中期以降、二の丸で盛んに用いられる大堀相馬焼など、相馬地方の近世陶器窯の状況について、基礎的な踏査研究を計画、実施した。本報告では、その成果の一端をまとめ、掲載した。今後も引き続き、東北地方での関連陶磁器窯について調査研究を進め、仙台城出土資料の検討に役立てたい。

また、本センターは、旧石器時代から平安時代まで様々な時代の遺跡が分布する青葉山キャンパスを踏査し、遺物の分布状況、洪積世火山灰の堆積、残存状況を観察し、遺跡の分布状況の把握につとめた。本資料は、今後、踏査を繰り返し、より精度の高い資料に整える必要はあるが、青葉山キャンパスの埋蔵文化財に対処するうえで重要な手掛かりとなるものと考える。

本年報を作成するにあたり、相馬市教育委員会をはじめ、多くの方に暖かいご支援とご協力を頂いた。また、本報告書刊行のため、施設部をはじめ、関係各位に深いご理解と多大なご尽力を頂いた。深く感謝する次第である。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 須藤 隆

例　　言

1. 本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査委員会が1992年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2. 報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。

仙台城二の丸跡第13次調査地点 1993年3月15日～3月24日 藤沢敦・関根達人

(NM13)

青葉山地区分布調査 1992年4月1日～4月27日 山田しょう・藤沢敦

3. 調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査委員会の委嘱を受け、埋蔵文化財調査室が行った（1994年度からは埋蔵文化財調査研究センター）。

4. 本年報の編集は、須藤隆の指導のもとに、藤沢敦・関根達人・菊池佳子が担当した。

5. 本文は、I～Ⅲ章については、藤沢敦が執筆した。なお、第Ⅳ章については、調査担当者の山田しょうが作成した報告を、藤沢が一部補足し、とりまとめたものである。

英文要旨は、菊池佳子が作成し、阿子島香氏に校訂していただいた。

また、研究題として、調査研究員の関根達人による、福島県相馬地域の近世窯業生産に関する論文を掲載した。

6. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

阿子島香（東北大学文学部） 本田泰貴（東北陶磁文化館）

仙台市教育委員会・東北大学考古学研究室・宮城県図書館

7. 出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

凡 例

- 方位は、図8が磁北である以外は、真北に統一してある。
- 図1と図2は、それぞれ国土地理院作成の、2万5千分の1地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、1万分の1地形図「青葉山」を使用した。
- 川内地区的仙台城二の丸跡、および北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」(縮尺500分の1)を使用した。
- 遺物の実測図および写真の縮尺は、各々に示した。
- 挿図中のスクリーン・トーンの表現は、特に記した以外は、下記の通りである。

遺構平面図 柱痕跡:

遺構断面図 柱痕跡:

礎:

- 遺物観察表の法量の単位は、特に記載がないものは、cmである。
- 引用・参考文献は、各項目の末尾に掲載した。また、本文中で、東北大学埋蔵文化財調査年報を引用する場合は、年報1という形で略記した。

発掘調査参加者

阿部喜美 阿部友衛 伊藤千穂 歌川喜恵子 太田すゑ子 太田はるよ 菅野春枝
佐伯晴子 佐藤剛 柴田順子 新保誠吾 菅原よしの 高橋和子 成田和歌子
長谷川チエ子 三浦千秋 横山東市

整理作業参加者

青井恭子 今泉八重子 内海薰 大塚玲子 後藤真希子 古山友子 佐々木きみ子
庄司明美 白石浩子 独占史恵

東北大学埋蔵文化財調査委員会（1992年度）

委員長	学 長		西 澤 潤 一
委 員	川内地区協議会委員長	(教養部長)	波 部 治 雄
	青葉山地区協議会委員長	(工学部長)	齐 藤 正三郎
	星陵地区協議会委員長	(医学部長)	平 則 夫
	片平地区協議会委員長	(金研所長)	増 本 健
	文 学 部 教 授		波 迎 信 大
	文 学 部 教 授		羽 下 徳 彦
	文 学 部 教 授	(調査室長)	須 藤 隆
	文 学 部 助教授		今 泉 隆 雄
	工 学 部 助教授		飯 渕 康 一
	事 務 局 長		廣 田 史 郎
調査員	文 学 部 助 手	(~1992年6月)	山 田 し ゆ う
	文 学 部 助 手		藤 沢 敦
	文 学 部 助 手	(1992年7月~)	閔 根 達 人
幹 事	施 設 部 長		山 本 務
	庶 務 部 長		菊 地 洋 男
	経 理 部 長		山 田 清

東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程

(平成6年5月17日 規第56号)

(設置)

第一条 東北大学（以下「本学」という。）に、東北大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第二条 センターは、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査及び研究を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

(職員)

第三条 センターに、センター長、調査研究員及びその他の職員を置く。

- 2 センター長は、本学の専任の教授をもって充て、総長が命ずる。
- 3 センター長は、センターの業務を掌理する。
- 4 センター長の任期は、二年とし、再任を妨げない。
- 5 調査研究員は、本学の専任の教官をもって充て、総長が命ずる。
- 6 調査研究員は、センターの業務に従事する。

(運営委員会)

第四条 センターに、センターの組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(組織)

第五条 委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 東北大学施設整備委員会各地区協議会の協議員 各一名
- 二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授 若干名
- 三 発掘調査地に関連のある部局の教授又は助教授で、その都度委員長が指名するもの
- 四 施設部長

(委員長)

第六条 委員長は、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、必要があると認めるときは、委員会の同意を得て、委員以外の者を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

(専門委員会)

第七条 委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、専門委員会を置く。

2 専門委員会は、委員長及び次の各分に掲げる専門委員をもって組織する。

一 調査研究員

二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授 若干名

三 施設部企画課長

四 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

3 委員長は、センター長をもって充てる。

(委嘱)

第八条 第五条第一号から第三号までに掲げる委員並びに前条第二項第二号及び第四号に掲げる専門委員は、総長が委嘱する。

(幹事)

第九条 委員会に幹事を置き、施設部企画課長をもって充てる。

(事務)

第十条 センターの事務は、当分の間、事務局施設部において処理する。

(雑則)

第十一條 この規程に定めるものほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

附 則 (略)

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

(1998年3月現在)

委員長	センター長	(文学部 教授)	須藤 隆
	川内地区協議会	(文学部 教授)	安田 二郎
	青葉山地区協議会	(薬学部 教授)	大内 和雄
	星陵地区協議会	(医学部 教授)	大井 龍司
	片平地区協議会	(素材工学研究所 教授)	島田 昌彦
	文学部 教授		今泉 隆雄
	文学部 助教授		阿子島 香
	理学部 教授		蟹澤 聰史
	工学部 教授		飯淵 康一
	東北アジア研究センター 教授		入間田 宣夫
	施設部 長		渡邊 正雄
幹事	施設部 企画課長		渡邊 三郎

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会

(1998年3月現在)

委員長	センター長	(文学部 教授)	須藤 隆
	文学部 教授		今泉 隆雄
	文学部 助教授		阿子島 香
	理学部 教授		蟹澤 聰史
	工学部 教授		飯淵 康一
	東北アジア研究センター 教授		入間田 宣夫
	調査研究員 (文学部 助手)		藤沢 敏
	調査研究員 (文学部 助手)		関根 達人
	調査研究員 (文学部 助手)		菊池 佳子
	理学部 事務長		金田 一夫
	施設部 企画課長		渡邊 三郎

目 次

序

例言・凡例

東北大学埋蔵文化財調査委員会委員（1992年度）

東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員（1997年度）

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 1992年度調査の概要	1
1. はじめに	1
2. 埋蔵文化財調査の概要	1
(1) 川内地区の調査	1
(2) 青葉山地区の調査	9
(3) 富沢地区の調査	13
(4) 女川地区の調査	13
3. そのほかの調査室の活動	14
(1) 第3回東北大学埋蔵文化財展の開催	14
(2) 木製品の保存処理設備の設置	15
(3) そのほかの活動	15
第Ⅱ章 仙台城二の丸跡第13地点 (NM13) の調査	16
1. 調査経緯	16
(1) 川内地区の立地と歴史および1991年度までの調査	16
(2) 調査地点の位置	18
(3) 調査方法と経過	18
2. 基本層序	18
3. 検出遺構	20
(1) 1区	20
(2) 2区	22

4. 出土遺物	22
5. 考察	23
6. まとめ	28
第Ⅲ章 青葉山地区分布調査	30
1. 調査経緯	30
(1) 調査に至る経緯	30
(2) 調査の方法	31
2. 基本層序	31
3. 各地点の現況と地層	34
4. まとめ	42
引用参考文献	
英文要旨	
写真図版	
研究編	
札馬藩における近世空桑生産の展開	関根達人
	51

図 目 次

図 1 東北大大学と周辺の遺跡	2	図 15 仙台城二の丸跡	
図 2 仙台城と二の丸の位置	3	第 7 地点と第13地点の関係	25
図 3 仙台城二の丸跡・ 武家屋敷跡調査地点	5	図 16 仙台城二の丸跡	
図 4 青葉山地区調査地点	7	第13地点周辺の絵図(1)	27
図 5 仙台城二の丸跡第11地点 調査区の位置と断面図	10	図 17 仙台城二の丸跡	
図 6 仙台城二の丸跡第12地点 調査区の位置と断面図	11	第13地点周辺の絵図(2)	28
図 7 富沢地区調査地点	12	図 18 青葉山地区分布調査風景	30
図 8 女川地区と周辺の遺跡	13	図 19 仙台市域の地形区分図	32
図 9 第3回埋蔵文化財展展示風景	14	図 20 青葉山各面とテフラの関係	33
図 10 P E G 含浸没用水槽	15	図 21 青葉山Ⅲ面での地層柱状模式図	33
図 11 仙台城二の丸跡第13地点 調査区の位置	17	図 22 青葉山地区での調査地点と 露頭の位置	36
図 12 仙台城二の丸跡第7地点 第13地点層序模式図	19	図 23 青葉山地区地目図	37
図 13 仙台城二の丸跡第13地点 1区・2区 平面図・断面図	21	図 24 青葉山地区火山灰残存状況図	38
図 14 仙台城二の丸跡第13地点出土遺物	25	図 25 青葉山地区の 露頭での地層堆積状況(1)	39
		図 26 青葉山地区的 露頭での地層堆積状況(2)	40
		図 27 青葉山地区での開発行為への 対応方法区分図	41

表 目 次

表 1 1992年度調査概要表	1	表 3 仙台城二の丸跡第13地点 出土遺物観察表	24
表 2 仙台城二の丸跡第13地点 出土遺物集計表	24		

図 版 目 次

図版 1 仙台城二の丸跡第13地点 1区遺構	47	図版 3 仙台城二の丸跡第13地点 出土遺物	49
図版 2 仙台城二の丸跡第13地点 2区遺構	48		

第Ⅰ章 1992年度調査の概要

1. はじめに

東北大学には、川内・青葉山・片平・星陵・雨宮の各キャンパスに加えて、他に多くの研究施設があり、その敷地は10県にわたる広大なものとなっている。これらの各地区の構内には、多くの埋蔵文化財があり、特に川内地区は、近世の仙台城二の丸跡と武家屋敷跡にあたり、青葉山地区には旧石器時代から古代の遺跡が存在する（図1・2）。

これらの大学構内の埋蔵文化財の調査・保護を組織的に行うために、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が組織され、その実務機関として埋蔵文化財調査室が置かれた。調査委員会および調査室は、1994年度に東北大学埋蔵文化財調査研究センターへと改組され、現在に至っている。1983年度以来、調査委員会・センターは、大学構内の埋蔵文化財調査を実施するとともに、調査成果を『東北大学埋蔵文化財調査年報』1~9において報告してきた。

1992年度においても、仙台城二の丸跡などの調査が行われ、新たな資料を提供することとなった。本報告書は、これらの調査成果についてとりまとめたものである。

また本年報には、研究編として、調査研究員による研究成果を併せて掲載した。これは、仙台城出土陶器の中で、最も重要な位置を占める、相馬藩領内の近世窯業についての研究である。

2. 埋蔵文化財調査の概要

1992年度は、川内地区・青葉山地区・三神峯地区・女川地区において、本調査1件、試掘調査2件、立会調査7件、および分布調査1件の、合計11件の調査を実施した（表1）。

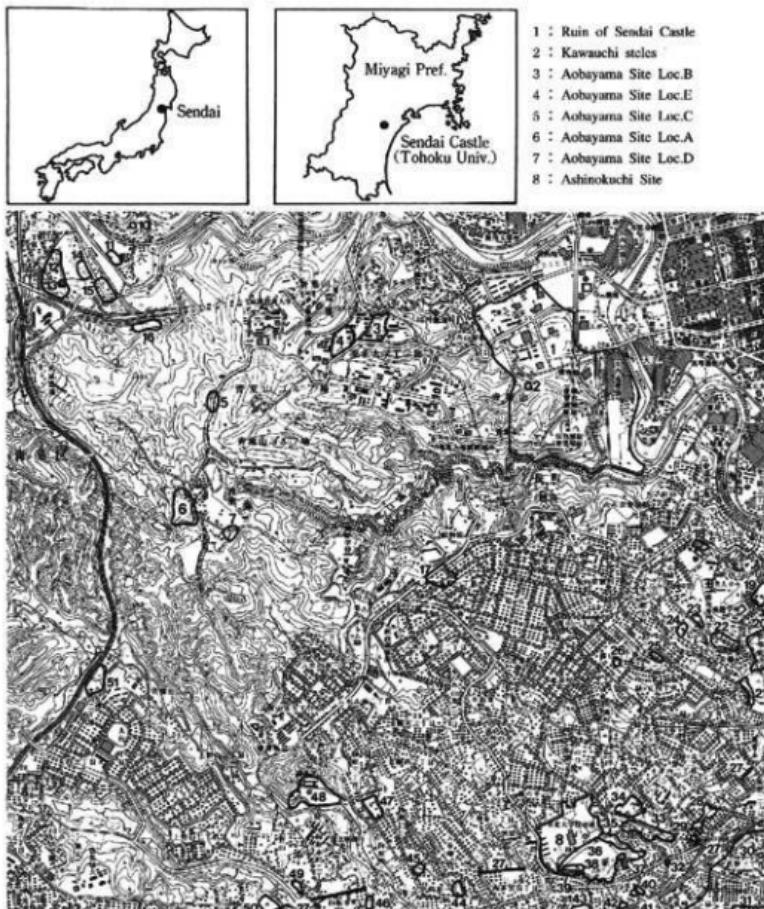
（1）川内地区的調査

川内地区では本調査1件と試掘調査2件、立会調査2件を実施した（図3）。

表1 1992年度調査概要表

Tab. 1 Excavations on the campus in the fiscal year 1992

調査の種類	調査地點(番号)	原図	調査実況	面積	時期
本 調 査	仙台城二の丸跡第13地点(NM13)	記念誠宝御器塔塗装	3/15~3/24	8m ²	近代
	仙台城二の丸跡第11地点(NM11)	植物園古跡新宮	9/14~10/29	138m ²	近代
	仙台城二の丸跡第12地点(NM12)	保健管理センタ・新宮	11/18~12/18	143m ²	近世
立 会 調 査	青葉山東北電力鉄塔地点(92-4)	東北電力鉄塔社に替え	7/30~8/24	—	—
	丁字路西側下野井地点(92-2)	軌道工事新クリーンルーム新設	8/19	—	—
	女川水系光輪町地点(92-3)	農学部附属女川水系光輪町新設	10/26	—	—
	理学部周辺発生装置地点(92-4)	理学部周辺発生装置新設	12/7~12/10	—	—
付 属 調 査	付属同書院南側地点(92-5)	給水管改修	1/1	—	—
	富沢地区玄関地点(92-6)	給水管改修	2/8~2/24	—	—
	教養部兵庫敷地場所(92-7)	白松草實屋根改修	3/4~3/9	—	—
分 布 調 査	青葉山地区		4/1~4/27	—	—



- 1 : Ruin of Sendai Castle
- 2 : Kawauchi steles
- 3 : Aobayama Site Loc.B
- 4 : Aobayama Site Loc.E
- 5 : Aobayama Site Loc.C
- 6 : Aobayama Site Loc.A
- 7 : Aobayama Site Loc.D
- 8 : Ashinokuchi Site

- 1 : 仙台城跡 2 : 川内古碑群 3 : 青葉山遺跡B地点 4 : 青葉山遺跡E地点 5 : 青葉山遺跡C地点
- 6 : 青葉山遺跡A地点 7 : 青葉山遺跡D地点 8 : 芦ノ口遺跡 9 : 片平仙台大神宮の板碑 10 : 那六太日如米の碑
- 11 : 幕岡城跡 12 : 郡六城跡 13 : 郡六護式碑 14 : 沼田遺跡 15 : 郡六倒殿跡 16 : 郡六遺跡 17 : 松ヶ岡遺跡
- 18 : 向山高美遺跡 19 : 荻ヶ丘遺跡 20 : 茂ヶ崎城跡 21 : 二ツ沢根穴墓群 22 : 荻ヶ岡B遺跡 23 : 八木山線町遺跡
- 24 : 二ツ沢遺跡 25 : 青山二丁目遺跡 26 : 青山二丁目B遺跡 27 : 砂土手(施除土手) 28 : 砂押屋敷遺跡
- 29 : 砂押古墳 30 : 富沢遺跡 31 : 泉崎浦遺跡 32 : 金堀沢古墳 33 : 上手内窓跡 34 : 土手内遺跡
- 35 : 上手内窓穴墓群 36 : 三寺墓遺跡 37 : 金山窓跡 38 : 三寺墓古墳群 39 : 富武窓跡 40 : 裏町東遺跡
- 41 : 裏町古墳 42 : 原東遺跡 43 : 原遺跡 44 : 八幡遺跡 45 : 後田遺跡 46 : 町遺跡 47 : 神瀧山遺跡
- 48 : 御堂平遺跡 49 : 上野山遺跡 50 : 北前遺跡 51 : 佐保山東遺跡

図1 東北大學と周辺の遺跡

Fig. 1 Archaeological sites and Tohoku University

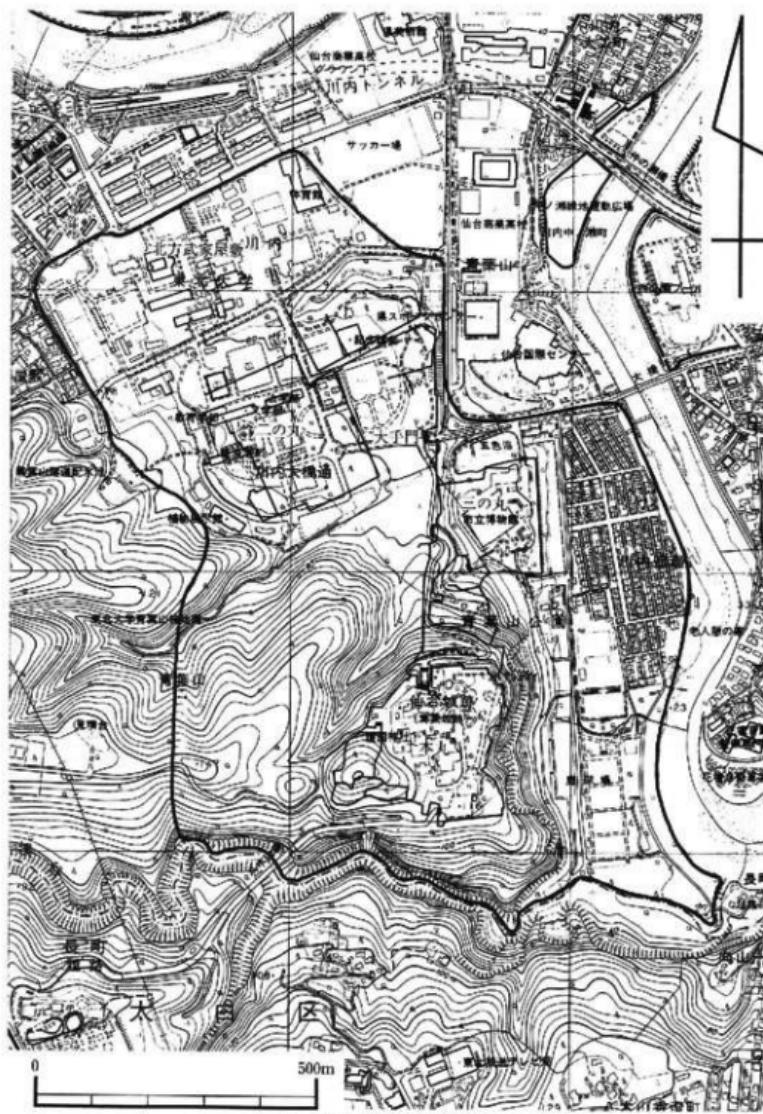


図2 仙台城と二の丸の位置

Fig. 2 Distribution of Sendai Castle

本調査を実施した仙台城二の丸跡第13地点は、記念講堂前の環境整備に伴う調査である。記念講堂前の公園となっている区域の通路には、玉砂利が敷かれていたが、この玉砂利を撤去してアスファルト舗装を施すのに伴い、雨水浸透枠を2ヶ所設置することとなった。今回の工事区域のすぐ脇で、1986年度に植樹に伴って実施した第7地点の調査においては、二の丸期の遺構面がきわめて浅いことが判明していたため、浸透枠設置箇所については、当初より本調査を行うこととした。調査は、浸透枠設置箇所に合わせて、2m×2mの調査区を2ヶ所設定して調査を行った。この調査結果については、本年報のⅡ章において報告する。舗装工事にあたっては、玉砂利除去後、基盤改良のためのすき取りを行う予定であった。しかし、浸透枠部分の調査の結果、二の丸期の遺構面まで、浅いところでは5cm程しか無く、すき取りを行うと広範囲に遺構面が破壊される恐れが強いことが判明した。そのため、基盤改良のためのすき取りは行わないよう施設部に依頼し、協議した結果、縁石の上面から2cm下がった位置に舗装面がくるように、舗装をかさ上げする変更がなされた。なお、この舗装工事の際に、立会調査を行っている。

試掘調査の一つは、仙台城二の丸跡第11地点の調査である(図5)。これは、理学部附属植物園の本館新築計画に伴う試掘調査である。附属植物園の本館と展示館は、米軍時代の建物を使用しており、これらを取り壊して、展示館の部分に新築する計画であった。この場所は、二の丸の中でも、端に近い場所であり、遺構の分布状況、遺物の出土状況を確認し、調査計画を検討するために試掘調査を行った。試掘調査が行える範囲は限られていたため、展示館の北側に3×20mのトレチ2ヶ所(1区・2区)、南側に3×3mの調査区2ヶ所(3区・4区)を設けて調査を行った。1区・2区では、整地層とその上面からビットや溝状遺構などが発見された。3区・4区では溝あるいは池状の施設が発見された。出土遺物は極めて少なく、これらの遺構の年代もはっきりとはしなかった。この植物園本館は、その後工法が変更され、基礎の掘削を浅くする措置が取られた。それでも一部削られる部分のみを、1995年度に本調査を行っている。そのため、この試掘調査については、本調査の報告の際に、あわせて報告することとする。

試掘調査のもう一件は、保健管理センター新築に伴う、仙台城二の丸跡第12地点の調査で、III教養部構内の川内北地区での調査である(図6)。今回の調査区の東側には、1986年度に調査した二の丸跡第8地点の調査区がある。第8地点の調査では、二の丸北側の堀とその北岸が検出されている(年報4)。この場所は、明治以降の盛土が深いところでは3m以上にも及ぶ所である。第8地点の調査の際には、記録的な集中豪雨に見舞われ、壁が大規模に崩壊したこともある。江戸時代の堀はわずかな範囲しか調査できておらず、堀の深さも確認できていない。今回は、安全対策を含めた本調査の計画をたてるために、堀の底の深さ、堆積土の状況を

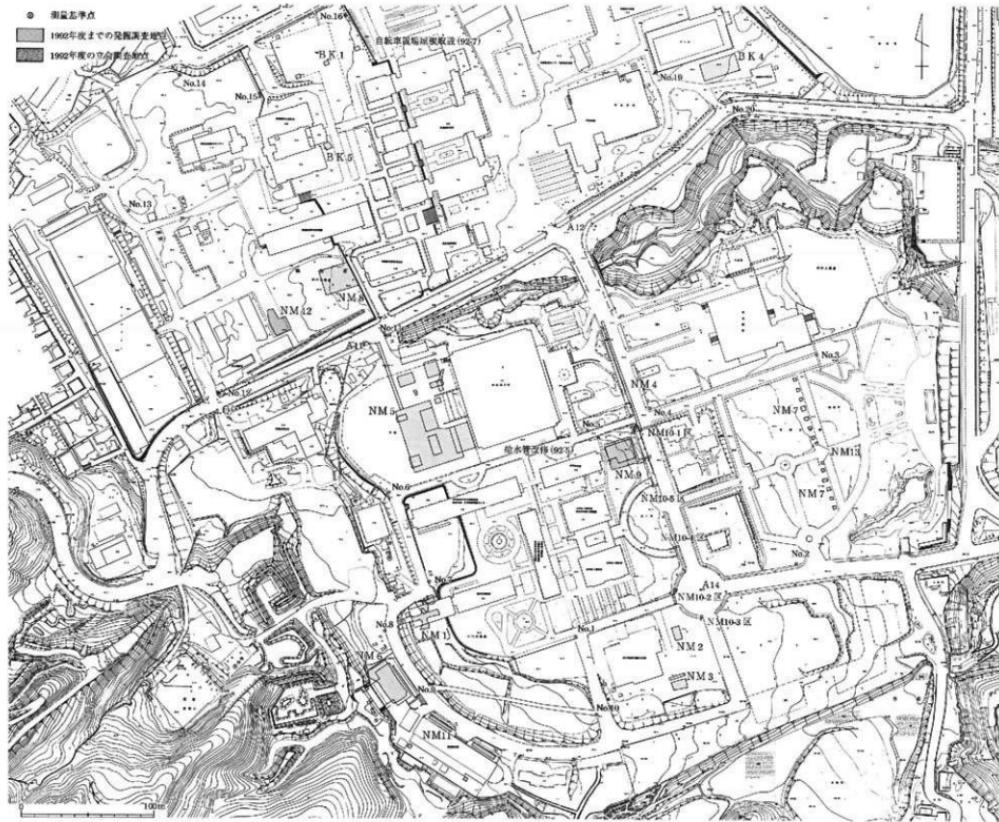


図3 仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点

Fig. 3 Location of excavations until 1992 at *Ninomaru* (NM i.e. Secondary Citadel) and *samurai* residence (BK)

- カッティング
- 発掘調査地点
- 立会調査地点

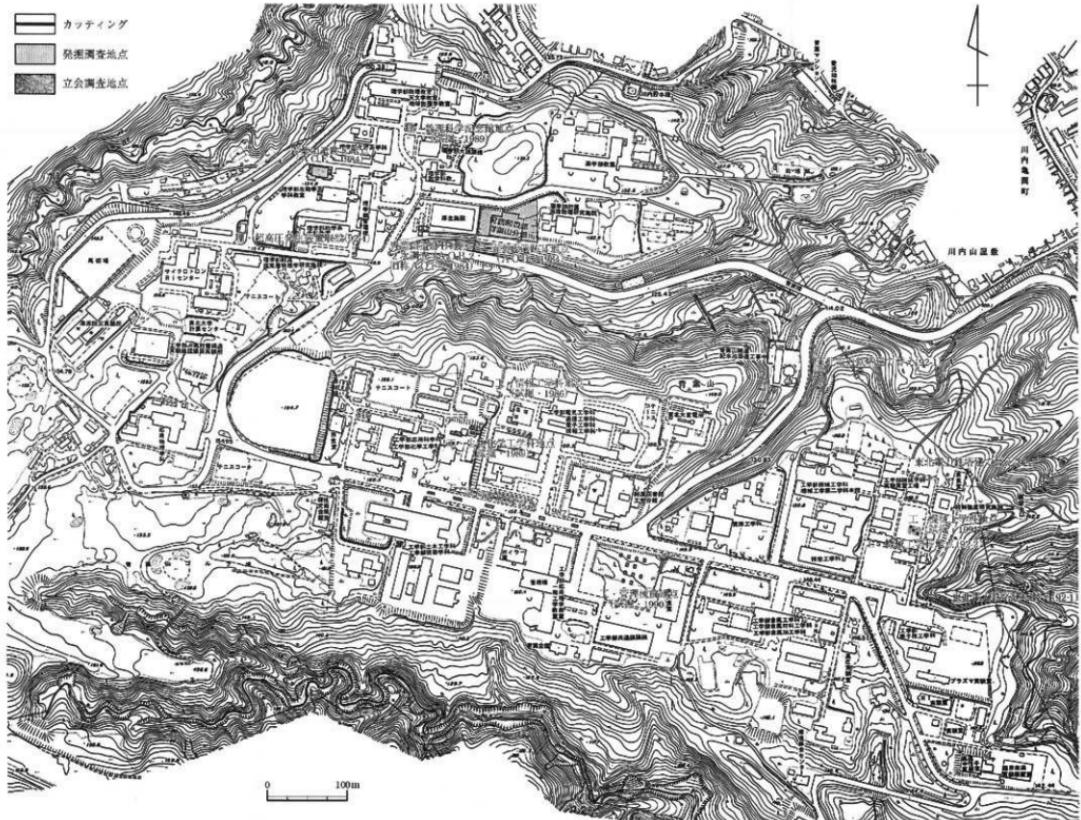


図4 青葉山地区調査地点

Fig. 4 Location of excavations at Aobayama campus

確認する目的で調査を行ったが、現有建物や使用中の排水管などで、調査を行える範囲は限られていた。第8地点と同様に、二の丸北側の堀とその北岸が検出された。調査区をあまり大きく設定できなかったため、現地表面から6mの深さまで調査を行った時点で、それ以上深く調査する事は危険と判断し調査を打ち切った。結局、堀の底の深さは確認できないまま調査を終える結果となった。本調査は、翌1993年度に実施しており、この試掘調査についても、本調査の報告の際に、あわせて報告する。

2件実施した立会調査の一つは、使用中の給水管が漏水したことによる改修工事に伴うものである。工事による掘削が、既設給水管設置時に掘削された範囲内に収まっており、遺物も出土しなかった。

もう一件は、教養部自転車置場の屋根増設に伴うものである。柱基礎の部分だけ掘削されることになったが、掘削範囲も狭く、また浅いため立会調査とした。現地表のアスファルトとその基盤の整地層の下は、ほとんどの場所ですぐに地山が露出し、江戸時代の層は残っていなかつた。この場所は、西側に大きな段差があるところで、本来は西から東へ緩やかに傾斜していた所を、明治以降に削平して平坦面を造成した結果と考えられる。

(2) 青葉山地区の調査

青葉山地区では分布調査1件、立会調査3件を実施した(図4)。

青葉山地区では、1984年度に調査を実施した3ヶ所の調査において、旧石器時代の遺構・遺物が発見された。その後青葉山地区では、周知の遺跡の範囲外であっても、Ⅲ石器時代の遺跡が存在する可能性を考慮し、学内関係機関のご理解を得ながら、試掘調査を実施してきた。しかし、1991年度までに実施した5ヶ所の試掘調査においては、遺構・遺物は発見されず、青葉山地区の遺跡の分布が、必ずしも全体に広がるものではないことが明らかになってきた。また、場所によって、火山灰層の保存状況が大きく異なることも明確になってきた。そのため、青葉山地区での遺跡の分布状況と、火山灰層の保存状態を把握し、今後の開発行為への対応方法を検討するために、青葉山地区全域での分布調査を実施することになった。この分布調査結果については、本年報のⅢ章において報告する。

東北大学の青葉山地区には、東北電力の高圧送電線が通っており、一部は工学部の特高変電所に引き込まれている。送電線を支える鉄塔は、東北電力が東北大学の土地を借りる形で建てている。この鉄塔が老朽化し、建て替えることに伴い立会調査を行った。いずれも平坦面から斜面に移行する縁の部分で、火山灰の堆積状況が良くないと予想されたため、立会調査とした。なお、この立会調査は、工事主体者が民間企業であるという性格上、仙台市教育委員会と合同で行った。

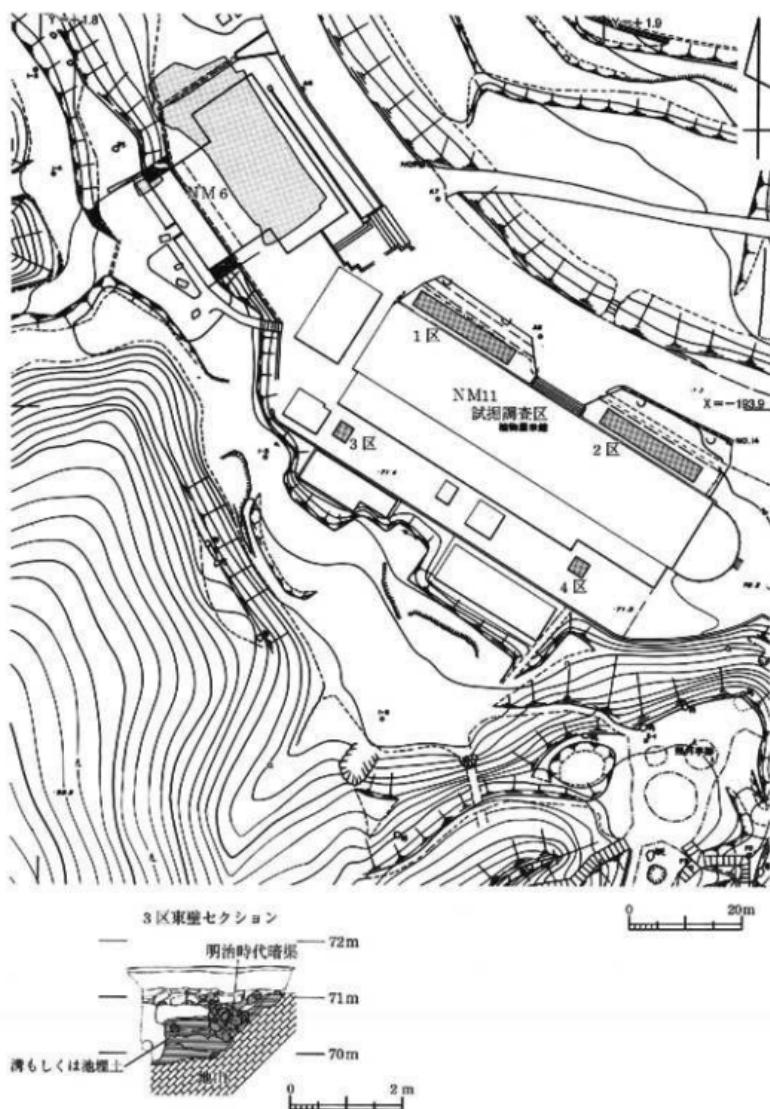


図5 仙台城二の丸跡第11地点調査区の位置と断面図

Fig. 5 Plan and cross section of test trenches at NM11

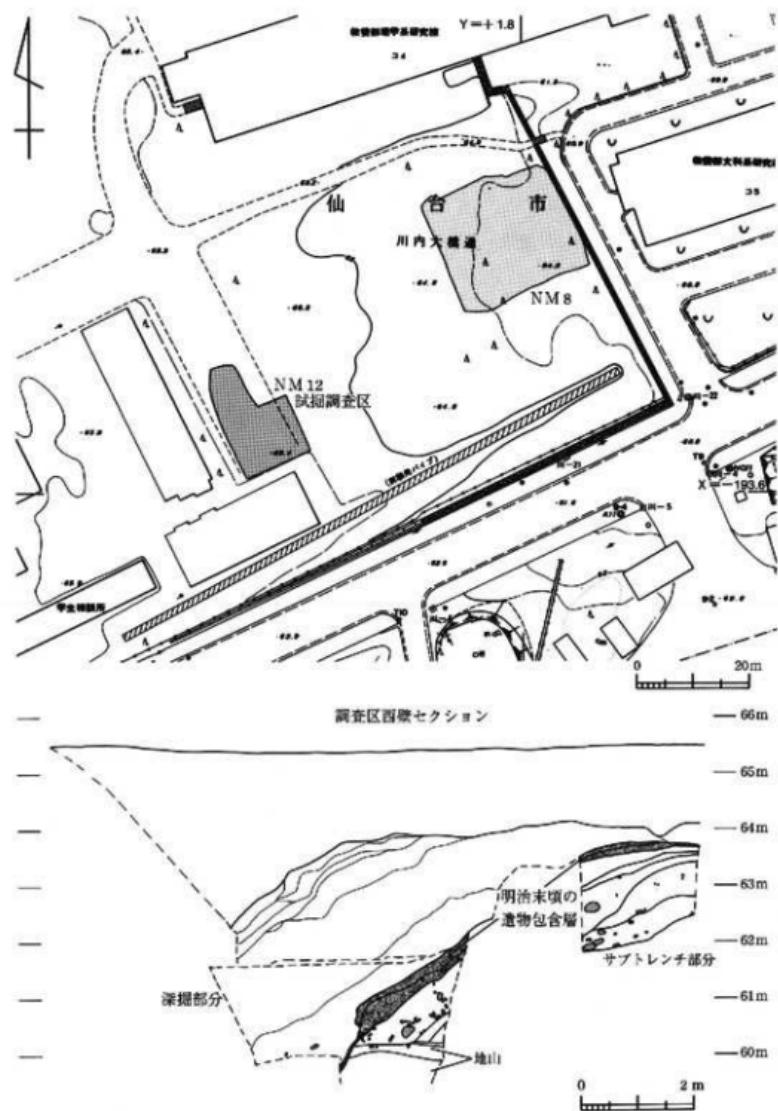


図 6 仙台城二の丸跡第12地点調査区の位置と断面図

Fig. 6 Plan and cross section of test trench at NM12

工学部航空工学科クリーンルーム新館に伴う立会調査は、昨年度に小規模な試掘調査を行った地点である。柱部分以外の基礎は盛土内におさまり、柱で破壊される部分も、火山灰の堆積状況があまり良くないことから、立会調査としたものである。

理学部超高压発生装置の設置と、そのための覆屋建設に伴う調査は、既にかなり削平を受けていると考えられる場所であったことと、建物がプレハブ建築であり掘削範囲も狭く浅いため、立会調査としたものである。

以上3件の立会調査では、遺構・遺物は発見されなかったため、それ以上の調査は行っていない。

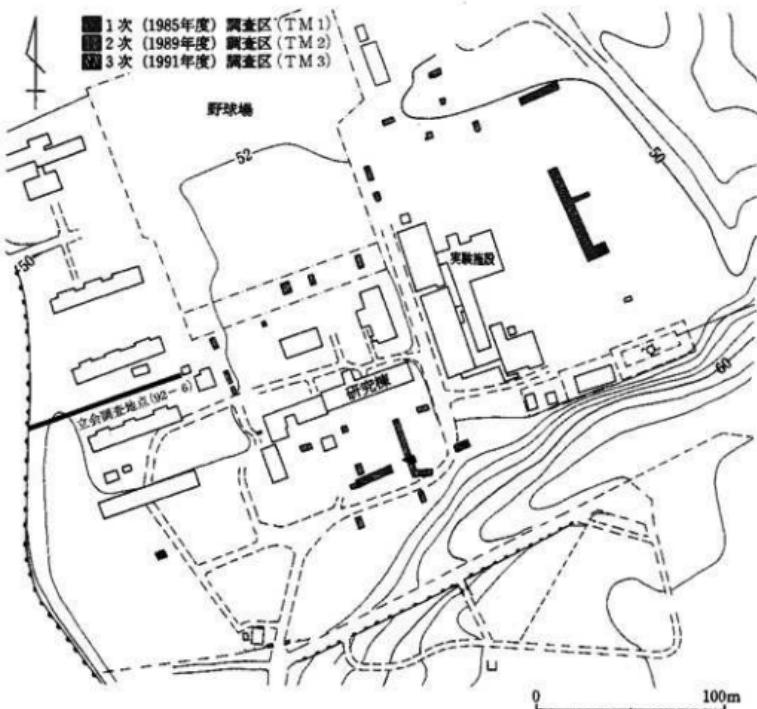


図7 富沢地区調査地点

Fig. 7 Location of excavations at Tomizawa campus (TM i.e. Tomizawa Ashinokuchi site)

(3) 富沢地区の調査

三神峯丘陵の北側にある富沢地区では、立会調査1件を実施した(図7)。富沢地区の理学部附属原子核理学研究施設の西側にある、官舎内の給水管改修に伴う調査である。芦ノ口遺跡の範囲内に入るが、掘削範囲が狭いため、立会調査とした。ほとんどの部分が官舎建設時に削平されており、もともとの表土も残っていなかった。遺構・遺物も発見されていない。

(4) 女川地区の調査

女川地区では、立会調査1件を実施した。三陸海岸南部の宮城県牡鹿郡女川町には、農学部附属水産実験所がある。今回の調査は、実験所の建て替えに伴う調査である。実験所の裏側の丘陵には、縄文時代の包含地である小乗浜B遺跡(宮城県遺跡番号73021)があり、縄文土器が採集されている(図8)。前年度に施設部から照会を受けたため、現地を踏査し、遺跡の範囲が実験所の建物の位置までは広がらない可能性が高いことを確認し、その旨を回答しておい



1 : 小乗浜B遺跡（縄文） 2 : 小乗浜A遺跡（縄文） 3 : 内山闕遺跡（縄文前～晩・古代）
4 : 宮ヶ崎遺跡（縄文中～晩・弥生・古代） 5 : 高森A遺跡（縄文前） 6 : 高森B遺跡（縄文）
7 : 崎山遺跡（縄文後）

図8 女川地区と周辺の遺跡(『宮城県遺跡地図』より)

Fig. 8 Archaeological sites and Onagawa campus

た。工事実施時に立会調査を行ったが、建築場所はほとんどが埋め立てた区域であり、遺構・遺物は発見されなかった。

3. そのほかの調査室の活動

(1) 第3回東北大学埋蔵文化財展の開催

第3回東北大学埋蔵文化財展を、9月14日から10月3日までの期間で、附属図書館の協力を得て、図書館本館のエントランス・ホールで開催した。前年度に開催した第2回の埋蔵文化財展につづき、2年連続で開催したことになる。前回の展示では、期間が2週間であったが、期間をもう少し長くとの意見が出ていたため、今回は3週間の展示期間とした。1992年度は、仙台城二の丸跡第5地点の整理作業が進んで、おおよその成果がまとまってきた段階であった。第5地点では、二の丸期では妻妾の居住域である中奥が、二の丸拡張以前の段階では、伊達政宗の長女である五郎八姫の居館西屋敷の遺構・遺物が検出されている(年報6)。そのため今回の展示は、「女たちの暮らし=五郎八姫の居館西屋敷と仙台城二の丸中奥=」と題し、第5地点の調査成果を紹介するとともに、出土遺物の中から、女性の生活に關係の深い、化粧道具などに焦点をあてて展示を構成した。

展示にあたっては、本学の薬学部薬用植物園のご協力を得て、お歯黒に使う五倍子や、整髪料に使われたサネカズラなどを提供いただき、当時の化粧方法の解説にあわせて、これらを展示する試みを行った(図9)。また第5地点では、二の丸に運び込まれた食品などに付けられた荷札木簡がまとまって出土している。それらの木簡に記載された食品で、現在は一般には知られなくなっている「こおりこんにゃく」などの実物を入手し、木簡と合わせて展示した。

前回同様、B4版・二つ折り片面カラーの解説リーフレットを作成した。リーフレットは会



図9 第3回埋蔵文化財展展示風景

Fig. 9 Third exhibition of archaeological remains from the campus

場に置き、自由に取ってもらうようになっていたが、期間中に合計544部が配布された。リーフレットを取らずに観覧された方も多かったため、実際の観覧者数は、この数を大きく上回るであろう。展示の開催にあたり、報道機関に公開したこともあり、学外から来られた方々も多かった。学外の方には、図書館への入館時に記帳をお願いしたが、211名の方が観覧された。内訳は、仙台市内157名、仙台市以外の宮城県内

48名、県外16名であった。また前回同様、今回も英文解説を作成し、50部を準備したが、全部なくなり、関心の高さがあらためて示された。

(2) 木製品の保存処理設備の設置

これまでに東北大学で調査を実施してきた仙台城二の丸跡の調査では、第5地点と第9地点において、多量の木製品や漆塗製品が出土した。第5地点出土の木簡など、特に重要な資料については、東北歴史資料館等に依頼して、保存処理を行ってきたが、大多数のものについては、水漬けのまま保管する状態が続いてきた。これらの水漬け遺物の恒久的保存処理が懸案となっていたが、外部に委託して処理を進めることは、予算上の点から難しい状態であった。そこで埋蔵文化財調査室では、ポリエチレン・グリコール(PEG)含浸による保存処理を、自前で実施することを計画し、そのための恒温水槽の設置を要求してきた。恒温水槽の設置も、予算上の問題で実現しならなかったが、埋蔵文化財調査委員会の委員長である、西澤潤一学長のご尽力によって、本学の理学部金工場において既製品を利用して製作をしていただくことになり、そのための経費も本年度に予算化された。PEGは濃度が上がると強酸性になるため、水槽にはステンレス浴槽を利用し、それに必要なヒーターや搅拌器、安全装置や蓋などを理学部金工場で製作・取り付けをしていただき、1基を製作した。また、本学の電気通信研究所で以前に使用され、現在使用されていない実験用水槽を2基譲り受け、これも必要な部分にステンレスの補強を理学部金工場で行っていただき、これに旧教養部の化学実験の授業で使用されていたヒーター・ユニットを組み込んだ(図10)。これらのPEG含浸用水槽は、1992年度から稼働させ、順次保存処理を実施している。

(3) そのほかの活動

東北歴史資料館の依頼を受けて、同館主催の資料展「やきもの」に、仙台城二の丸跡出土陶磁器20点と、二の丸跡の遺構検出状況および遺物出土状況の写真3点を貸し出した。また、同じく東北歴史資料館主催の資料展「宮城の旧石器」に、青葉山遺跡A地点・B地点・B地点第2次調査地点出土の石器52点を貸し出した。



図10 PEG含浸用水槽

Fig. 10 Constant-temperature water baths
for PEG method

第Ⅱ章 仙台城二の丸跡第13地点（NM13）の調査

1. 調査経緯

(1) 川内地区の立地と歴史および1991年度までの調査

東北大学の川内地区は、江戸時代の仙台城二の丸跡と、その北方に置かれた武家屋敷跡に相当する（図2）。仙台城は、慶長5年（1600年）、仙台藩初代藩主の伊達政宗によって、本丸の造営が開始される。川内地区の後に二の丸が造営される区域には、伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が置かれたと伝えられる。元和6年（1620年）には、この伊達宗泰の屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館「西屋敷」が造られる。

寛永15年（1638年）、二代藩主伊達忠宗は、もとの伊達宗泰の屋敷地において、二の丸の造営を始める。二の丸完成後、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどはここに移され、二代藩主以降はその居館ともなる。二の丸の北隣には、五郎八姫の「西屋敷」が存続する。

寛文元年（1661年）には五郎八姫が死去し、「西屋敷」のあった場所は「大鷦院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業場などの実務的な空間となる。さらに17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって二の丸は大改造され、もとの「西屋敷」の敷地を取り込んで拡大される。その後いく度かの災害や火災を被るが、その度に再建され、二の丸は幕末まで、事実上仙台城の中核として機能していく。

版籍奉還の明治2年（1869年）には、二の丸に勅政庁が置かれ、明治4年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府・兵部省の管轄下に移り、東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。この頃に本丸の建物群は取り壊されるが、二の丸建物群は依然として残っている。しかし、明治15年（1882年）の火災によって、二の丸建物のほとんどが焼失する。その後陸軍第二師団が置かれ、敗戦まで続くこととなるが、敗戦間際の昭和20年（1945年）7月、仙台空襲の際に大手門などわずかに残った建物も焼失してしまう。戦後は米軍の駐留地となり、昭和32年（1957年）、米軍より返還後、東北大学が移転し、現在に至るのである。

仙台城二の丸跡と武家屋敷跡である川内地区の発掘調査は、仙台市教育委員会、東北大学文学部考古学研究室によって、小規模な調査が行われたことがあるが、組織的・継続的に行われるのは、東北大学に埋蔵文化財調査委員会が設置された1983年度以降のことである。以来、委員会（1994年度からは埋蔵文化財調査研究センター）による二の丸跡の調査は、1991年度までに13地点を数える。これらの調査成果については、『東北大埋蔵文化財調査年報』1～9において報告してきたところである。特に、二の丸跡の調査成果については、年報9において、それまでの成果全体をまとめて検討しているので、参照願いたい。

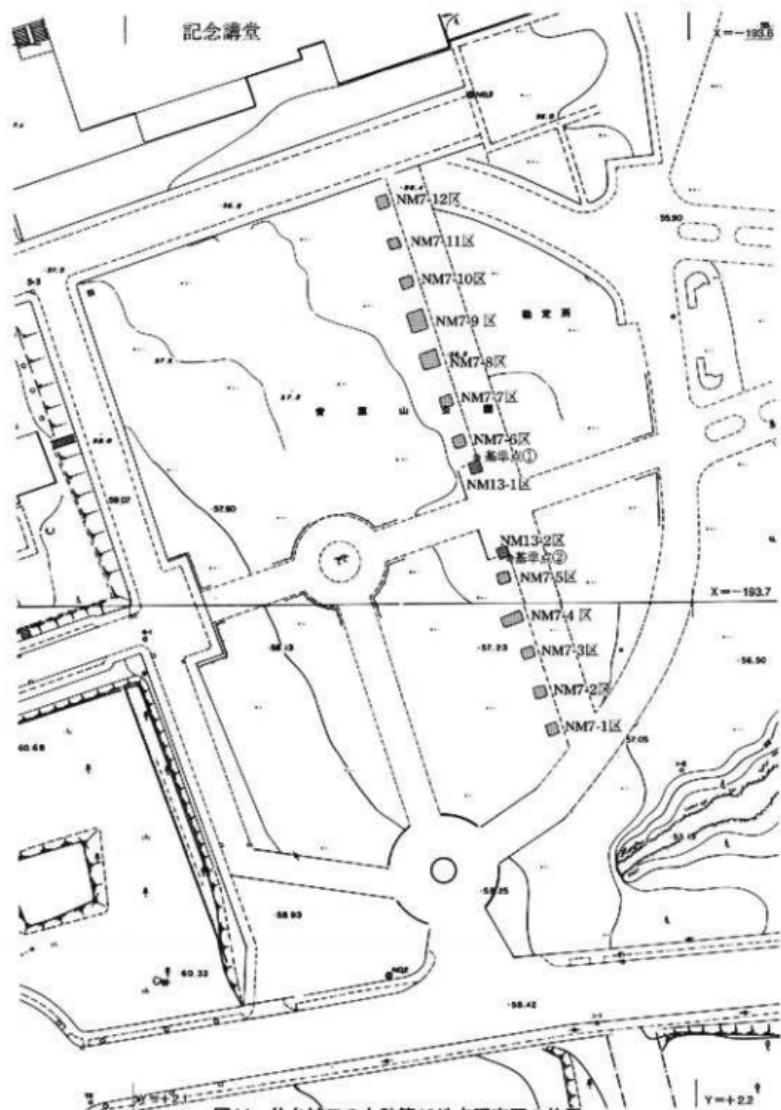


図11 仙台城二の丸跡第13地点調査区の位置

Fig. 11 Location of NM13

NM13 i.e. Location 13 of *Ninomaru* (secondary citadel of Sendai Castle)

NM7 i.e. Location 7 of *Ninomaru*

(2) 調査地点の位置

調査地点は、東北大学記念講堂の南側の、公園となっている場所である。園路が十字に交差する部分に浸透計を設置するに伴い、2ヶ所の調査区を設けた。今回の調査地点は、1986年度に、植樹に伴って調査を実施した、第7地点の5区と6区にはさまれた場所にあたる(図11)。

この場所は、狹義の二の丸の範囲からははずれ、二の丸の正門である「詰之門」の東外側にあたる。「詰之門」の東側には、「大手門」から通じる道路を兼ねた、広い空間が開いており、その東側には、「勘定所」が置かれている。この「勘定所」の西端には、「七十間御兵具蔵」と呼ばれる鍵の手に屈曲する細長い蔵が存在し、「勘定所」西端の塀の機能も兼ねていたものと推定される。今回の調査地点は、この「七十間御兵具蔵」の付近にあたる。

(3) 調査方法と経過

第7地点の調査成果から、調査区の周辺では明治以降の盛土が極めて薄いことが想定されたため、浸透計設置によって掘削される範囲について、全体を調査することとした。そのため、浸透計設置予定箇所に2m×2mの調査区を2ヶ所設定し、当初より手掘りで調査を行った。北側の調査区を1区、南側を2区と呼ぶこととした。

1区の北側と2区の南側に、任意に基準点を設定し、これを基準に実測作業を行った。基準点の国土地標値は、以下の通りである。

原点NM13-① X=-193 674.316 原点NM13-② X=-193 691.956
Y= 2 161.944 Y= 2 167.553

調査が進むとともに、2区の石組の溝と思われる1号溝に伴う石敷が、現地表面から浅い所では5cm程の所に存在することが明らかとなった。第I章においても述べたように、通路の舗装に伴い、基盤改良のため正砂利の下をすき取る計画であったが、造構面を広範囲に破壊する危険が高いため、すき取りは行わず舗装面をかさ上げする措置を取った。

2. 基本層序

基本層序は、1～5層が確認された。この内2層と3層は細分される。基本層の土層の特徴は、次の通りである。

1層 表土 上部の砂礫層と下部の黄色バミス層に分かれる

2a層 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性弱 しまり中 瓦を含む

2b層 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性弱 しまり中 瓦や小砾を多く含む 整地層?

2c層 5BG 青黒色 炭層 粘性なし しまり中 径5mm以下の砂礫を含む

3a層 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性弱 しまり強

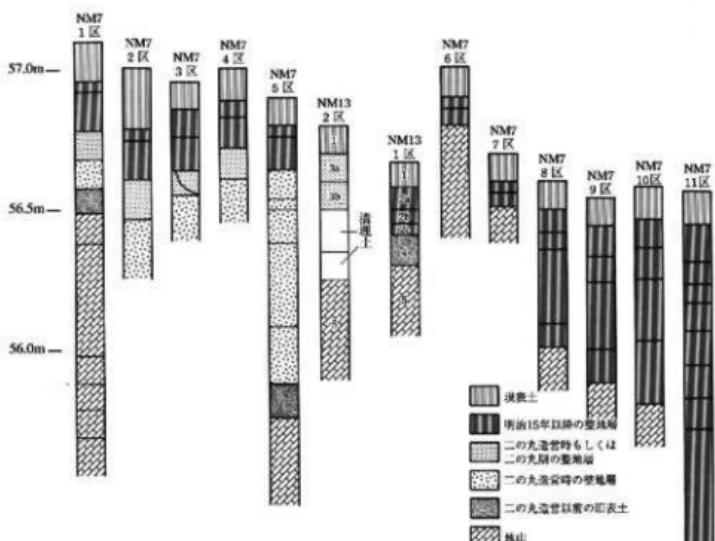


図12 仙台城二の丸跡第7地点・第13地点層序模式図

Fig. 12 Schematic profiles of NM7 and NM13

- 3b層 10YR6/6 明黄褐色 シルト 粘性弱 しまり強 小礫を含む
- 4層 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性弱 しまり中 全体に均質な層
- 5層 地山 10YR6/6 明黄褐色 粘土

斑状にぶい黄橙色部分があり、下部ほど白味が強い

調査の際に邪魔になるため、表面の玉砂利は、広い範囲で除去しており、断面等には表れてこない。その下の玉砂利直下の、道路基盤の整地層を1層とした。2a~2c層は、1区でのみ確認された。この内の2c層は、炭を主体とする層で、明治15年の二の丸を全焼した火災に伴うものと考えられる。3a・3b層は2区でのみ確認された整地層で、遺物がほとんど出土していないため確実ではないが、石組の1号溝がこの3a層上面に造られており、二の丸造成時、もしくは二の丸存続期の整地層と考えられる。4層は、1区でのみ確認された。下面の5層との境が、あまり明確でなく、漸移的であることから、二の丸造営以前の表土層と考えられる。5層は地山のローム層である。

これらの基本層序を、隣接する第7地点の調査区と対比させると、図12のような関係が考えられる。調査区ごとの変異が大きく、直接的な対比は困難な部分が多いため、大きな段階ごとで対比させたものである。

3. 検出遺構

(1) 1区(図13、図版1)

1区では、ピット4基が検出された。いずれも4層上面から掘り込まれている。これ以外には、2b層上面から掘り込まれた、ピット状の落ち込みが検出されているが、明治以降と考えられるため、擾乱として扱った。

【ピット1】

調査区南東寄りで検出された、掘立柱穴である。切り合い関係があり、新しいものをピット1a、古いものをピット1bとした。

古い方のピット1bには、柱痕跡が確認される。断面図では、途中で途切れるが、これはピット1aを避けて断面を切ったため、柱痕跡の一部のみが断面にかかったためである。このピット1bの柱痕跡と同じ位置で、ピット1aの上面でも柱痕跡が確認されている。両者の関係を十分検討できなかったが、位置関係から、同一の柱痕跡の可能性がある。その場合、ピット1aの性格が問題となる。ピット1bの柱を抜き取るために、ピット1aを掘ったが、斷念して埋め戻し、柱は地表面で切り取ったというような複雑なことを想定しなければならなくなる。あるいは、ピット1a上面で検出した柱痕跡が誤認なのかも知れない。

ピット1aは北側が深く、この部分は径40cm程のほぼ円形である。深さは65cmで、ピット1bの深さにはほぼ等しい。ピット1bは隅丸長方形で、長軸95cm、短軸60cm、深さ60cmを計る。

ピット1bの埋土から、18世紀代のものと思われる陶器の擂鉢が、1点出土している(図14-1)。

【ピット2】

調査区北東隅近くで検出されたもので、北側は調査区外へ延びる。東端がピット3と重複するが、埋土がピット3とはほとんど変わらないため、新旧関係は確認できなかった。東西70cm程度、南北40cm以上、深さ30cmで、平面形はほぼ橿円形を呈する。

【ピット3】

調査区北東隅で検出されたもので、東側は調査区外へ延びるが、南北に細長い平面形である。南北70cm以上、東西30cm以上、深さ30cmを計る。底面に凹凸があり、一定しないことから、柱穴とはならない可能性が高い。

【ピット4】

調査区南西付近で検出された、不整形のピットである。南側は調査区外へ延びるが、南北70cm以上、東西80cm以上、深さ30cmである。埋土は4層に分かれ、この内2層は焼土層である。明治15年の火災の、後かたづけに伴う可能性も考えられる。

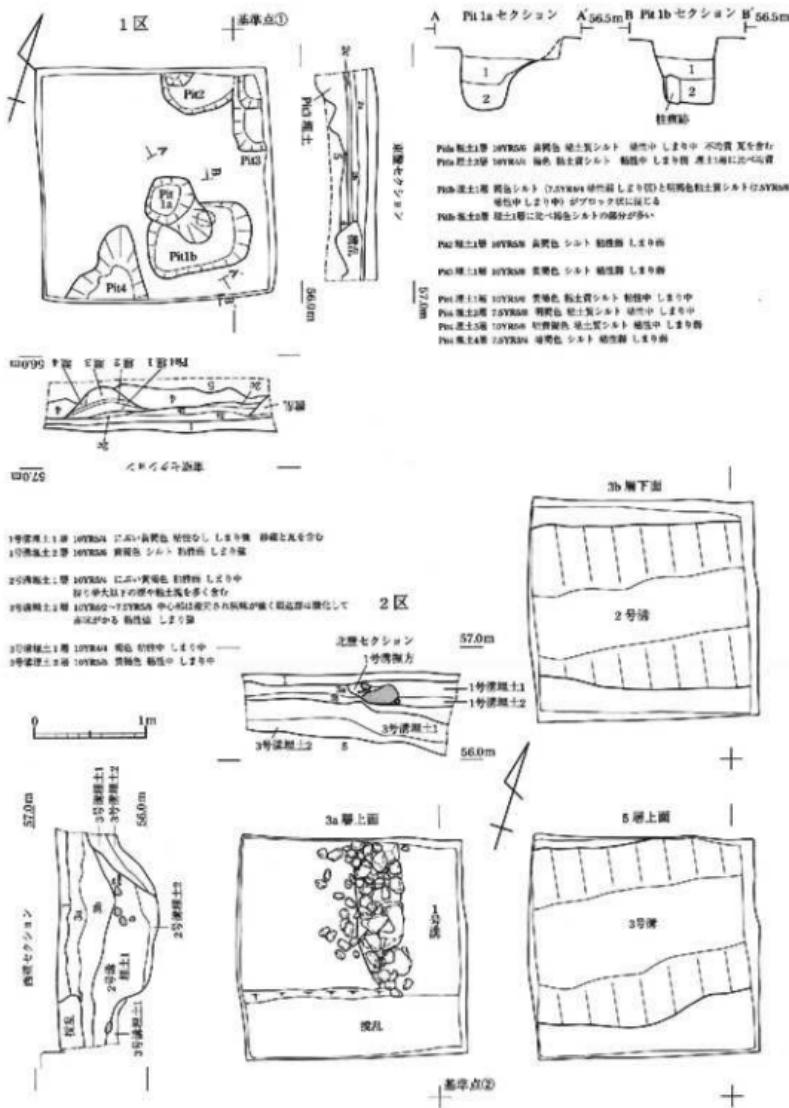


図13 仙台城二の丸跡第13地点1区・2区平面図・断面図

Fig. 13 Plans and cross sections of Grid 1 and 2 at NM13

(2) 2区(図13、図版2)

2区では、溝が3条検出されている。

【1号溝】

3a層上面から掘り込まれた、石組の溝と思われる遺構である。西側の立ち上がりを検出しだけであり、石を積んだ段差の可能性も残るが、隣接する第7地点5区の遺構面の標高との関係から、段差よりは溝の可能性を考えておきたい。その場合、東側の立ち上がりは調査区外に位置することとなる。南側は、圍路の縁石設置の際に破壊されており、検出した長さは1.4mに留まる。20~40cm程度の大きさの、やや扁平な河原石を1段並べ、これより小さな石をその上に積むとともに、隙間に詰め込んで構築している。溝の西側の3a層上面には、石組の上面から続いて、円礫が分布しており、石敷となっていたものと考えられる。幅は東側を検出していないため不明であるが、50cm以上。深さは20cmである。底面はほぼ平坦で、石などは敷かれていない。検出した長さが短いため、確実ではないが、方向はN-24度-Wである。埋土は2層に分かれるが、いずれも小礫を多量に含んでおり、埋め戻されたものである可能性を考えられる。

【2号溝】

3b層の下面で検出された溝で、1号溝とは逆に東西方向の溝である。次に述べる3号溝を掘り直したもので、3号溝とほとんど同じ場所に造られている。調査範囲が狭く、両肩はほぼ調査区一杯になっているため、3号溝の肩がさらに外側まで上がってくるかによっても異なるが、調査範囲内では、3号溝の埋土を肩としている。上幅140~150cm、下幅50cmの逆台形の断面形状を呈し、深さは60cmである。底面のレベルは、3号溝の底面にほぼ等しい。方向は、検出した長さが調査区の幅の2mだけであり、確実では無いが、N-64度-Eである。埋土は2層に分れ、底面に堆積した2層は、グライ化しており、自然堆積と思われる。1層中には、調査区西壁付近を中心に、大量の礫が含まれており、一挙に埋め戻された可能性が高い。

【3号溝】

2号溝とほぼ同じ位置で検出された溝で、地山の5層上面から掘り込まれている。上幅140cm程、下幅60cmの断面逆台形を呈し、深さは40cmである。方向は、2号溝と同じN-64度-Eである。埋土は自然堆積と思われる。

埋土1層から、小破片ではあるが、瓦質土器の擂鉢が1点出土している(図14-2)。内面のおろし目はかなり粗く、17世紀代に通る可能性がある。

4. 出土遺物(図14、表2・3、図版3)

調査区が狭いこともあり、出土遺物は少ない。しかも、1層と明治15年以降と考えられる

2a～2c層出土のものが大部分を占める。これら以外から出土した遺物は小片が多く、特徴などが判るものはほとんどない。

陶磁器や土器で、特徴が判明し図示し得たものは、1区のピット1b出土の陶器の擂鉢（図14-1）と、2区の3号溝埋土1層出土の瓦質土器の擂鉢（図14-2）だけである。

瓦は出土量が最も多い。これは、調査地点が蔵が置かれた場所であることを反映するものであろう。しかし瓦も、大部分が1層出土のものである。ある程度特徴が判明する資料を図示したが、いずれも1層出土のもので、出土層位から年代は検討し得ない。軒丸瓦は9点出土している。三引両文1点（図14-3）、九曜文3点（図14-4）で、他は周縁の部分だけの破片である。軒平瓦で文様が判明するものは3点ある。これまでの仙台城出土瓦の分類（年報9）では、図14-5は三枚笠1b+唐草1a類、7は唐草2類である。6については、三引両十唐草であるが、唐草文が巻く部分の片側に、小さな凹凸が表現されており、このような唐草文は、仙台城出土資料では初出である。図14-8は、半瓦の背面に陽刻をもつものである。これまでの出土例では、棟瓦に見られ、「宮〇〇」との形をとる。9は丸瓦であるが、玉縁の部分が段落を持たず、綏やかに細くなっているものであり、仙台城出土資料ではきわめて希なものである。

これら以外の遺物には、金属製品や煉瓦、ガラス製品などがあるが、確実に江戸時代に遡ると考えられるものはない。

5. 考察

1区の検出された4基のピットは、全て4層上面で検出されており、明治15年の火災に伴うと考えられる2c層に覆われている。この内のピット4は、焼土が埋土に入っていることから、明治15年の火災の後かたづけに伴う可能性もあるが、それ以外については、二の丸期の遺構の可能性が高い。特に、ピット1は、明確な柱痕跡が検出されており、掘立柱柱穴である。

2区では、出土遺物が無く確実ではないが、1号溝が二の丸期の遺構の可能性がある。その場合、下層で検出された2号溝と3号溝の年代が問題となる。確実に時期を決定できる遺物が出土していないが、1号溝とは方向がほぼ90度異なることから、この場所の土地利用の方法が大きく変わっていることが考えられる。次に検討するように、今回の調査地点周辺では、二の丸造営以降、一貫して「七十間御兵具蔵」が置かれており、幕末まで基本的な土地利用方法は変化していない。そのため、2号溝と3号溝は、二の丸造営以前に遡る可能性がある。この内の2号溝は、3号溝を掘り直したものであり、両者は同じ性格のものであろう。両者とも、方向はN-64度-Eであり、南北方向に直すと、北で26度西偏することになる。二の丸の造営以前には、その場所には伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が置かれていた。第9地点の調査

表2 仙台城二の丸跡第13地点出土遺物集計表
Tab. 2 Distribution of various implements at NM13

区・署・道場	施設		施設												
	午前	小男	男	施設	施設	午前	小男	施設	施設	午前	小男	施設	施設	午前	小男
	午後	午後	午後												
表揮														兎瓦1 (1.33)	
1区 墓位不明														2 (0.16)	2小男1 (0.02)
1区 1番	2	1	1	3	3	1	1	1	3	7	2	1	2	5	1 (0.10)
1区 2a番														1 (0.90)	下2番3 (2.35)
1区 2b番														1 (0.04)	被替1 不明1 ガラス4 レング1 (0.01)
1区 2c番														5 (0.22)	不明1 レング1 倒壊品1 ガラス2
1区 4番	1					1							2 (0.16)	2 (0.32)	不明6 (0.05)
1区 Pitta														1 (0.02)	
1区 Pitta														1 (0.02)	兎瓦1 (0.14)
2区 墓位不明 (無効)															不明7 (0.08)
2区 1番														3 (0.49)	45 (0.88)
2区 1号溝渠上														4 (0.04)	25 (4.75) (2.30)
2区 2号溝渠1番														4 (0.23)	4 (0.16) 4-5 (0.01) (0.02)
2区 3号溝渠1番														1 (0.36)	
台 賀	9	1	1	3	3	2	1	5	1	1	4	1	9	1 (1.40)	7 (1.00)
														2 (1.45)	153 (14.5) 66 (7.04)

表3 仙台城二の丸跡第13地点出土遺物観察表
Tab. 3 Notes on various implements at NM13

図番号	登録番号	種類・器種	出土場所	特徴等	図版番号
14-1	C-001	陶器・擂鉢	Pit1b 堆1層	鉄軸(茶褐色)、粘土や木、底地岸か?、18世紀?	3-1
14-2	C-002	瓦質土器・擂鉢	3号溝削1層		3-2
14-3	T-001	軒丸瓦	2区 1層	上引両文、瓦当復元径16.0cm、周縁幅1.6cm	3-3
14-4	T-002	軒丸瓦	2区 1層	九曜文、瓦当復元径17.2cm、周縁幅1.7cm	3-4
14-5	T-003	軒平瓦	2区 1層	三枚枕1b+唐草1a類、瓦当垂長5.7cm	3-5
14-6	T-004	軒平瓦	1区 1層	上引両+唐草、瓦当垂長4.8cm	3-6
14-7	T-005	軒平瓦	2区 1層	唐草2類	3-7
14-8	T-006	鬼瓦	Pit1b 堆1層		3-8
14-9	T-007	棟瓦?	1区 1層	凸面に陽刻「六三」	3-9
14-10	T-008	丸瓦	2区 1層	長23.8cm	3-10

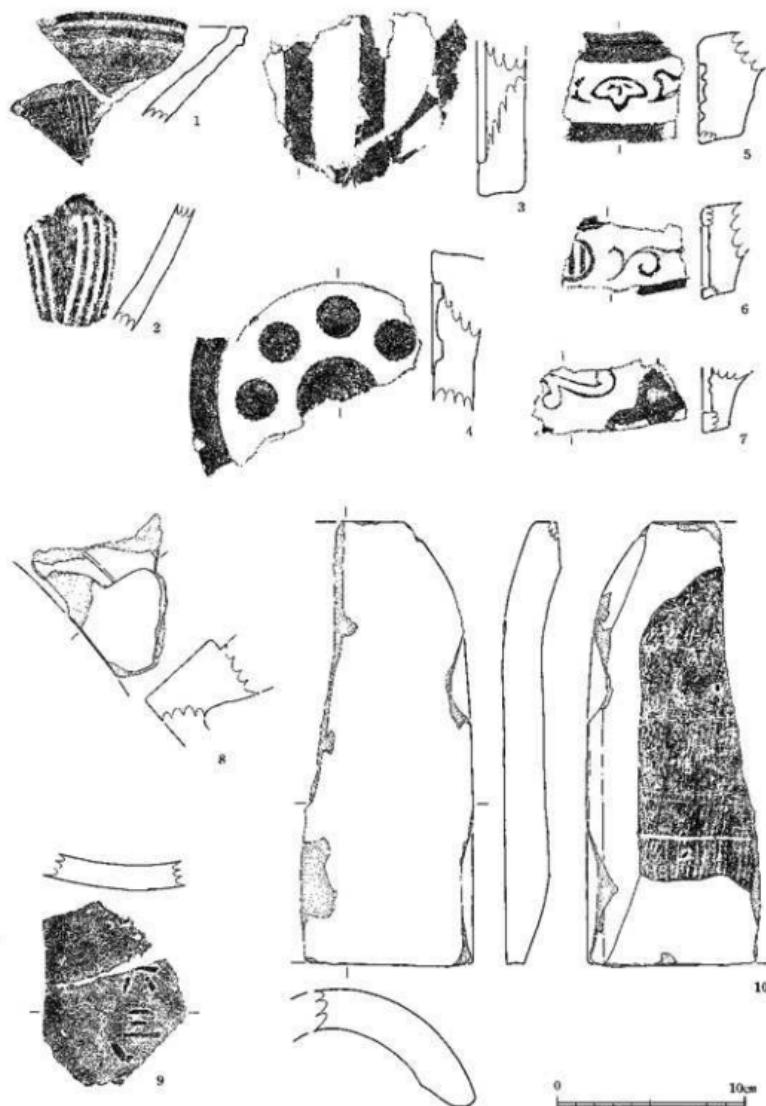


図14 仙台城二の丸跡第13地点出土遺物
Fig. 14 Various implements from NM13

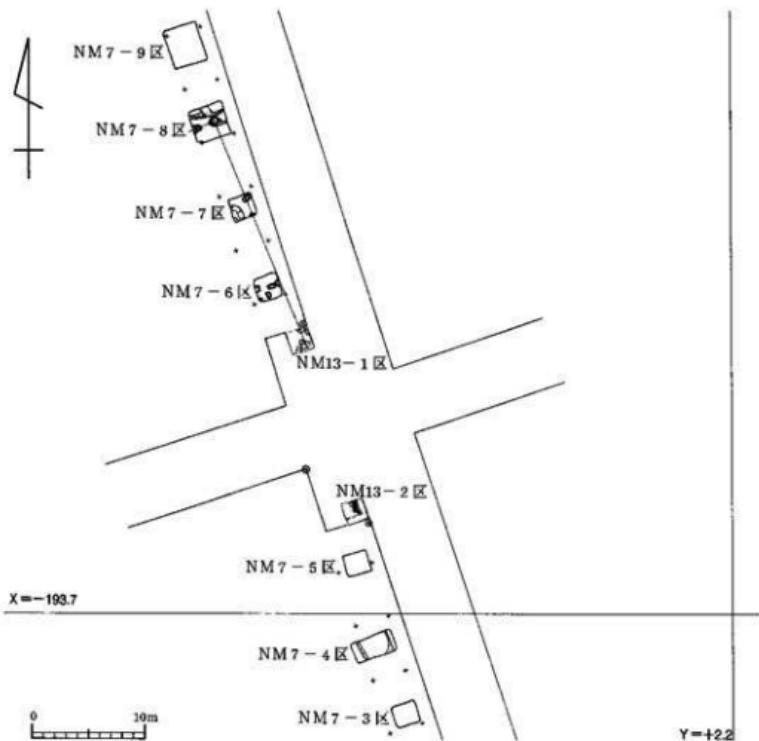


図15 仙台城二の丸跡第7地点と第13地点の関係

Fig. 15 Distribution of features at NM7 and NM13

では、二の丸造営に伴う大規模な整地層の下層から、伊達宗泰の屋敷に関わると考えられる遺構群が検出されているが、これらの遺構の方向は、北から30度前後西偏する（年報8）。2号溝・3号溝の方向は、これとは若干ずれ、N-24~25度-Wの方向で占められる二の丸期の遺構群の方向に、むしろ近い。ただし、伊達宗泰の屋敷の範囲が不明で、今回の調査地点が宗泰の屋敷の内側か、それより外側かも判らない。また、伊達宗泰の屋敷内であったとしても、諸施設の全てが同じ方向であったとは限らない。そのため、第9地点の宗泰の屋敷と推定される遺構群と方向が合わないことが、2号溝・3号溝が二の丸造営以前に遡る可能性を否定することにはならない。ここでは、1号溝の段階と大きく土地利用方法が変わることを重視して、2号溝・3号溝は、二の丸造営以前に遡る可能性が高いと考えておきたい。

次に、今回の第13地点の検出遺構と、隣接する第7地点の検出遺構を合わせて検討したい。

図15に、同地点で検出された二の丸期の可能性のある遺構を示した。第13地点1区から北側の、第7地点6区～8区では、ピットが発見されており、柱穴になる可能性の高いものが含まれている。確実に組み合う柱穴を示すことは困難であるが、これらが一連の柱穴であったと仮定した場合の一つの案が、図15に示したものである。この案では、各ピットが、1間（6尺5寸=197cm）の倍数の間隔で、ほぼ並ぶこととなる。第13地点1区のピット1を基準とすると、第7地点の6区のピットは北に3間、7区のピットは北に7間、8区のピットは北に11間のところにはほぼ相当する。柱列の方向は、N-22.5度-Wとなる。これまでの調査で検出された二の丸内の遺構の方向は、N-24～25度-Wの方向をとることがほとんどで、二の丸建物群は、この方向を基準に造営されたと考えられる。したがって、図15に復元案を示した建物跡は、二の丸の造営基準より、東に振れることとなる。この場所に置かれていたと推定される「七十間御兵具蔵」の方向については、「詰之門」より西側の、狭義の二の丸の範囲内と、この「七十間御兵具蔵」の両方を描いた絵図で検討することができる。この両方を描いた絵図は、「背山公造制仙台城郭木写之略図」（図16、17世紀末頃、宮城県図書館蔵、以下「木写之略図」と省略）と「享和二年之内御作御絵図」（図17-4、1802年、宮城県図書館蔵、以下「享和二年図」と省略）の2枚だけである。「木写之略図」では、「七十間御兵具蔵」は、二の丸建物群より、さらに西に偏して描かれている。「享和二年図」では、建物が全て方眼の上に描かれており、「七十間御兵具蔵」は、二の丸内の建物群と同じ方向で描かれている。したがって、今回検出した遺構に基づく復元案とは、いずれも方向が合わないこととなる。



図16 仙台城二の丸跡第13地点周辺の絵図(1)
（「背山公造制仙台城郭木写之略図」宮城県図書館蔵）

Fig. 16 A picture map around the area of NM13(1)

「七十間御兵具蔵」を描いた絵図としては、上述の「木写之略図」と「享和二年図」の他には、明確な成立年代は不明であるが、「仙台藩内神社仏閣等作事方役所修繕に属スル場所圖」の中に2枚と、「御修覆帳」の中に見られる（図17-1・2・3、いずれも宮城県図書館蔵）。蔵の内部の間仕切りなどの細かな所を見比べると、これらの絵図では、少しづつ異なる点が認められ、建て替え、あるいは改修が加えられている可能性が高い。「七十間御兵具蔵」は、17世紀末頃の「木写之略図」から見られ、その後幕末まで存在したと考えられることから、その間に全く建て替えや改修が無かったことは考え難い。したがって、図15に復元案を示したが、

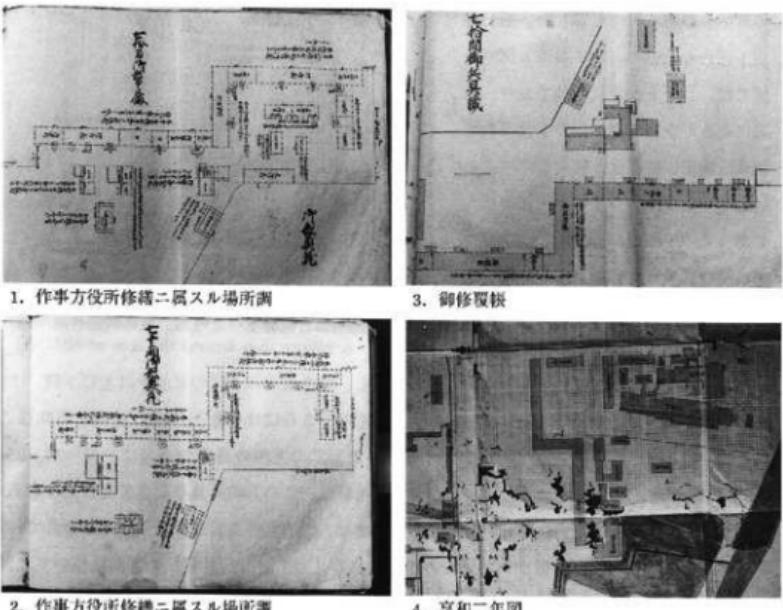


図17 仙台城二の丸跡第13地点周辺の絵図(2)(全て宮城県図書館所蔵)

Fig. 17 Picture maps around the area of NM13(2)

これらの柱穴には複数時期のもののが存在し、別の組み合わせが成立する可能性も考えられる。

このように、絵図との対比については問題が残るが、位置関係から見ると、「七十間御兵具藏」以外に相当する建物は考え難い。そのため、これらの掘立柱柱穴には、「七十間御兵具藏」を構成する柱穴が含まれているものと考えておきたい。2区の1号溝は、絵図では対応する記載は認められないが、位置関係から見て「七十間御兵具藏」に関係する溝であろう。

6.まとめ

仙台城二の丸跡第13地点の調査は、極めて狭い調査区であったため、検出された遺構は少ないが、ピットや溝が検出された。ピットについては、隣接する第7地点検出のピットと組み合いで、掘立柱建物を構成する可能性がある。その場合、二の丸正門である「詰之門」の東外側に置かれた「七十間御兵具藏」に相当する可能性が高いが、方向などの点で問題が残っている。

2区で検出された東西方向の2号溝・3号溝については、二の丸造営以前に遡る可能性がある。出土遺物は極めて少ないが、その中でも瓦が多数を占めている。このことは、調査地点が、蔵などが置かれた場所であることを反映している可能性がある。

第7地点の調査の際に判明していたことでもあるが、今回の調査地点の周辺は、明治時代以降の盛土が薄く、現地表から二の丸の遺構面までがきわめて浅い。それにもかかわらず、二の丸期の遺構の保存状態は良好であることが、あらためて確認された。周辺での工事に際しては、十分に慎重に対処する必要がある。

第Ⅲ章 青葉山地区分布調査

1. 調査経緯

(1) 調査に至る経緯

青葉山地区に旧石器時代の遺跡が存在することが明らかになったのは1968年以降のことである。1984年までに、青葉山遺跡A～D地点が知られていた(図1)。1984年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が理学部構内で調査を実施した、B地点・E地点・B地点第2次調査地点(旧称F地点)の3ヶ所の調査では、いずれにおいても旧石器時代の遺構・遺物が発見され、それまで知られていた以上に、遺跡が広く分布することが明らかとなつた(年報2、図4)。なお、青葉山遺跡B地点第2次調査地点については、報告では青葉山遺跡F地点と呼称されている。しかし、周知の遺跡の範囲としては、青葉山遺跡B地点の範囲を拡大する措置が取られ、その中にこの地点も含まれている。その結果、報告での遺跡名称と、遺跡地図に登載された周知の遺跡の名称が異なることとなっている。また将来、異なる地点で遺跡が発見された場合、現在のA～E地点の名称を引き継いで遺跡名称を付けるとなると、この地点名が遺跡地図登載の遺跡名称と重複し混乱する可能性がある。そこで、報告で青葉山遺跡F地点としたものを、青葉山遺跡B地点の第2次調査地点と改称した。

その後、青葉山構内での施設整備は、南側の工学部構内での事業が相次ぐこととなった。1984年度の理学部での調査成果を受け、同じ段丘面上に立地する工学部構内でも、旧石器時代の遺跡が存在する可能性が高いと考え、学内関係機関のご理解を得ながら、試掘調査をその度に実施してきた。しかしながら、1986年から1991年の間に、工学部構内で実施した5ヶ所の試掘調査では、遺構・遺物は全く発見されなかつた(年報4・5・7・8・9)。これらの調査の



結果、青葉山構内での遺跡の分布状況が、必ずしも密では無いことが明らかとなるとともに、場所によって火山灰層の保存状態が大きく異なっていることも明確となってきた。そこで、あらためて、青葉山構内における分布調査を実施し、遺跡の有無や火山灰層の保存状況を把握し、今後の開発行為に対する対応を確定することとなつた。

図18 青葉山地区分布調査風景

Fig. 18 The view of distribution survey at
Aobayama campus

(2) 調査の方法

野外調査は、まず地表・露頭観察における遺物の有無を確認するとともに、構内の現況を図面(図22・23)・写真に記録した。さらに主要な露頭における地層の堆積状況(図25・26)と、火山灰のおおまかな平面的な残存状況を記録した(図24)。また、主要な露頭を、理学部地理学教室の博士課程の大月義徳氏(現理学研究科環境地理学講座助手)に観察していただき、コメントを頂いた。なお野外調査にあたっては、本部事務局から、関係部局に調査協力依頼を提出し、関係部局の御協力を得て調査を実施した。

これらの調査において、新たに遺物が発見された地点は無かったが、上記の記録を、今後の基礎資料として、整理して以下に報告する。

2. 基本層序

青葉山キャンパスは、青葉山段丘のⅢ面に位置する(図19)。青葉山段丘は高位よりI～IV面に分けられており、各面を覆う火山灰層の関係から、I・II面とIII・IV面は形成時期の異なる段丘とされる(大月義徳1987)。すなわち、より低位のIII・IV面には坪沼第1～4軽石層が見られず、愛島軽石層より上位の指標テフラのみが見られる(図20)。

今回の調査においても、こうした従来の知見を大きく変えるような発見は無かった。しかし、川崎スコリア層と愛島軽石層の間の赤色風化帯が、青葉山Ⅲ面全体に広く分布することが確認された。

青葉山Ⅲ面における基本層序を図21に示す。層の番号は、1984年度に調査を行った、青葉山遺跡B地点の調査報告(年報2)に、既に準じている。

1層は表面の腐植土層。

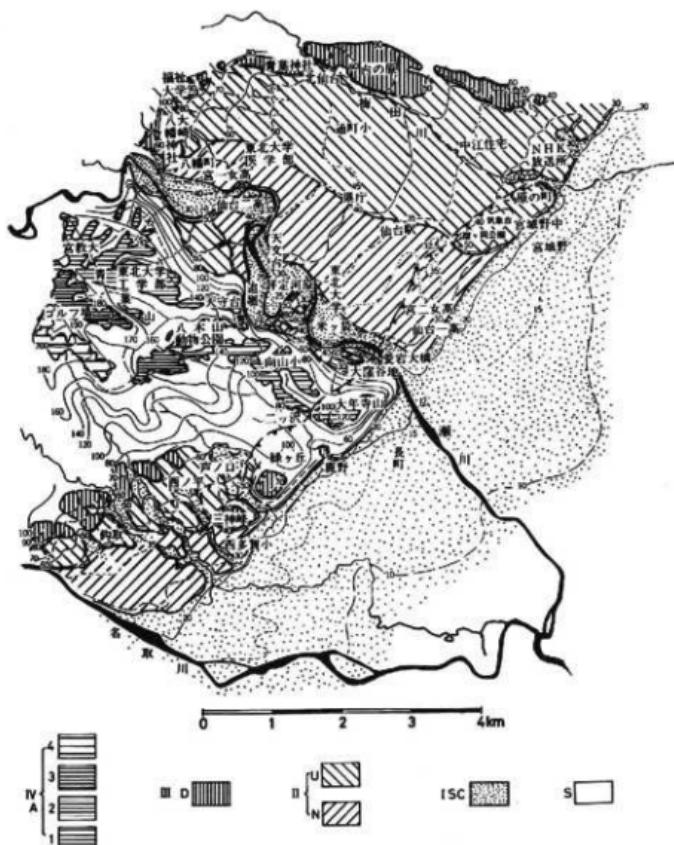
2層は3層との漸移層である。

3・4層は黄褐色火山灰層で、いわゆるローム層。3層がより軟質、4層がより硬質だが、地層の堆積の薄い所、風化の進んだ所では、両者の区別は判然としない。

5層の上に川崎スコリア層が、径50mm程のブロックとして入る。川崎スコリア層は、藏王起源の指標テフラで、段丘との関係から、その年代は26,000～32,000年前とされる(板垣直俊ほか1981)。青葉山遺跡B地点の調査では5層上面に堆積していたが、工学部管理棟前地点(1990年度調査、年報8)および工学部生物工学科地点(1989年度調査、年報7)の試掘調査においては、3～4層の中にレベル差を持って見られた。

5層はくすんだ色の火山灰層で、6a層とともに標識になる。工学部管理棟前地点では、色調は10YR5/6、径1mm程の石英粒を多く含む。

6a層は弱い赤色風化帯(7.5YR4/6)で、径1mm以下のマンガン粒と石英を少量含む。赤み

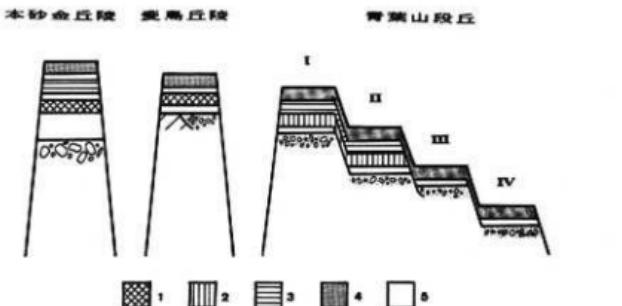


S—斜面・山地, IV A—青葉山段丘, III D—一台の原段丘, II U—上町段丘, II N—中町段丘, I SC—下町段丘・河岸・海岸平野

—50— 等高線 ————— 段丘の境界 ▼▼▼▼ 断層

図19 仙台市域の地形区分図 (『新編仙台の地学』より)

Fig. 19 Topographical map of Sendai city area



1 : 坪沼第1軽石層 (TbP1) 2 : 坪沼岩片層 (Tbf) 3 : 坪沼第2～4軽石 (TbP2～TbP4)
4 : 新期テフラ (~愛島軽石層) 5 : 粘土質火山灰・火山灰質粘土

図20 青葉山各面とテフラの関係 (大月義徳1987より)

Fig. 20 Relation of Aobayama terrace surfaces and tephra

の薄い粘土質の6b層に漸移的に移行する。6c層は岩片を多く含む黄褐色の火山灰層で、7層の風化層と見るべきかもしれない。6a層の赤色風化帯は、年代的には川崎スコリア層と愛島軽石層の中間にあるので、26,000～80,000年の間になる。宮城県の中部～北部では、岩出山町座敷乱木遺跡、大和町中峰C遺跡、多賀城市志引遺跡等で、約4万年前に古赤色土壤が見られることが指摘されている（山田一郎ほか1986）。青葉山の赤色風化帯は、これらに比べると赤みが薄いが、年代的に対比できる可能性がある。

7層は愛島軽石層に伴う青砂で、所により成層が認められる。

8層は愛島軽石層で、4枚程に細分可能である。熱ルミネッセンス法、ESR法、フィッショング・トラック法により、54,000～80,000年前の年代が得られている（年報2）。

9層以下は地点により異なるが、概ね段丘縁に続く粘土層である。愛島軽石層の直下、9

1	表土
2	漸移層
3	黄褐色ローム層(軟質)
4	黄褐色ローム層(硬質) 川崎スコリア
5a	くすんだ褐色の火山灰層
5b	弱い赤色風化帶
6a	6a層より赤味が薄む粘土質 岩片を多く含む黄褐色火山灰層
6b	青砂
6c	愛島バミス(風化)
7	
8a	愛島バミス
8b	褐鐵鉻もしくはマンガンの沈殿
9	褐色粘土層
10	躍者な赤色風化帶
11	

図21 青葉山Ⅲ面での地層柱状模式図

Fig. 21 Schematic profile at the 3rd terrace of Aobayama terrace

層の上面には鉄鉱ないしマンガンが沈殿している。理学部付近では、9層は褐色粘土層で、10層が顕著な赤色風化帯となる。なお、青葉山遺跡B地点の報告では、この赤色風化帯は11層となっている（年報2）。

11層より下、段丘礫への移行部は、地点により異なる。

3. 各地点の現況と地層

谷を隔てて、大きく理学部側と工学部側に分けることが可能である。概して理学部側の方が大学施設による地層の削平が進んでおり、工学部側の管理棟付近から機械工学科、金属工学科、原子核工学科付近が、最も旧地形が保存されている。火山灰の保存状況も、工学部側が良好である。全体に、斜面に近い台地の縁部は、堆積が乱れている場合が多い。

地目はアスファルト敷や芝地の部分が多く、地表での遺物の散布の有無を確認できるところはほとんど無い。荒地の多くはササ等が繁茂し、冬期でも地而が露出しない。地面が露出している部分も、造成時に盛上を行っている部分が多い。したがって、地表での遺物の確認調査は、有効に行えない状況にある。

露頭は、予想より多く確認することができた。しかし、ほとんどの露頭は、その下に排水溝などが設置されており、土砂の流出の懼れ等を考慮すると、あまり大規模に削って調査することは不可能であった。そのため、今回新たな遺物包含地点が確認できなかったものの、遺跡が全く無いことを意味するものではない。次に、地区ごとに現況を記述する。なお、露頭の番号は、図22～26の図中に示した番号と一致する。

【薬学部】

薬学部本館前にある薬用植物園の畑地は、旧地形が保存されているが、遺物の散布は認められなかった。客土を行っていることも影響しているかもしれない。東側の一段低い栽培区は、旧地形を大きく削って平坦面を造成しており、遺跡が保存されている状況では無い。

【理学部数学科～図書館北青葉山分館（露頭1～8）】

図書館北青葉山分館の建設に伴い1985年に発掘調査が行われたB地点とB地点の第2次調査地点（旧称F地点）が位置する。B地点では5層と11層から、B地点2次調査地点では3a・4・5層上面から旧石器時代の石器が発見されている（年報2）。B地点では縄文時代と弥生時代の遺物も出土している。B地点南側は、調査後に図書館の建設によって大部分が失われたが、道路北側の山林の部分は良好に保存されている。ここでは露頭3から旧石器時代の石器が採集されている。

理学部付近は、工学部側に比べると、全体に火山灰の風化が進み、保存が良くない。5層・6a層は色調が弱く、愛鳥軽石層の風化も進んでいる。11層の赤色風化層は、非常に顕著である。

【理学部生物棟付近】

地表からは観察困難であるが、1986年度の発掘調査（E地点）により、旧地形が比較的良好に保存されていることが判明し、5・6a層上面において、旧石器時代の陥れ穴状の土坑が4基検出されている（年報2）。

【理学部物理棟北側（露頭9～13）】

トンネル北側の露頭10～13付近は、愛島軽石層から上にあたる層群の保存が良くなく、風化が進み、他地点との対比が困難である。

【理学部地学棟南側（露頭14～16・19・20）】

全体に火山灰の風化が進み、愛島軽石層も保存が良くない。しかし、露頭から縄文土器が採集されている（年報2、p.83）。理学部前バス停付近（露頭19・20）では、より斜面性の堆積となり、3・4層相当部分が厚くなっている。

【工学部応用物理学科・体育館付近（露頭17・18・21・22）】

体育館西側（露頭21・22）では標準的な堆積だが、体育館東側からテニスコートにかけての一部は、旧地形が保存され平坦であるにもかかわらず、火山灰の堆積は全体で1m程と悪く、愛島軽石層も見られない（露頭18）。他地点との細かい層の対比も困難である。しかし、テニスコート南側の露頭（露頭17付近）では、以前に、時期不明ながら石器が採集されている。

【工学部グランド付近（露頭23～25）】

グランドは、大部分が段丘疊まで削平されている。東側の露頭で見ると、非常に高位置にあるにもかかわらず、上位の火山灰の堆積は悪い。段丘疊直上の粘土層が発達している。

【工学部応用化学科付近】

地表からの観察では良くわからないが、1989年の生物工学科の試掘調査では、3・4層から下では、非常に良好に火山灰が保存されていることが判明している。なお、この地区の平坦面の東側は、かなり盛土をしている。本来は緩やかな斜面で、電気工学科のある平坦面へ続いていると見られる。

【工学部土木工学科付近（露頭26）】

建物北西側では、地形・火山灰の保存とも良好である。台地の南縁では、大規模な盛りで平坦面を造成している部分がある。

【工学部管理棟～機械工学科・金属工学科・原子核工学科付近（露頭28・29・31・32）】

前述の通り、地形・火山灰ともに良好に保存されている。

【工学部機械工学科北側山林（露頭30）】

斜面に近いためか、火山灰は約50cmと薄く、すぐに段丘疊へと続く。10層相当の赤色風化帶が見られる。

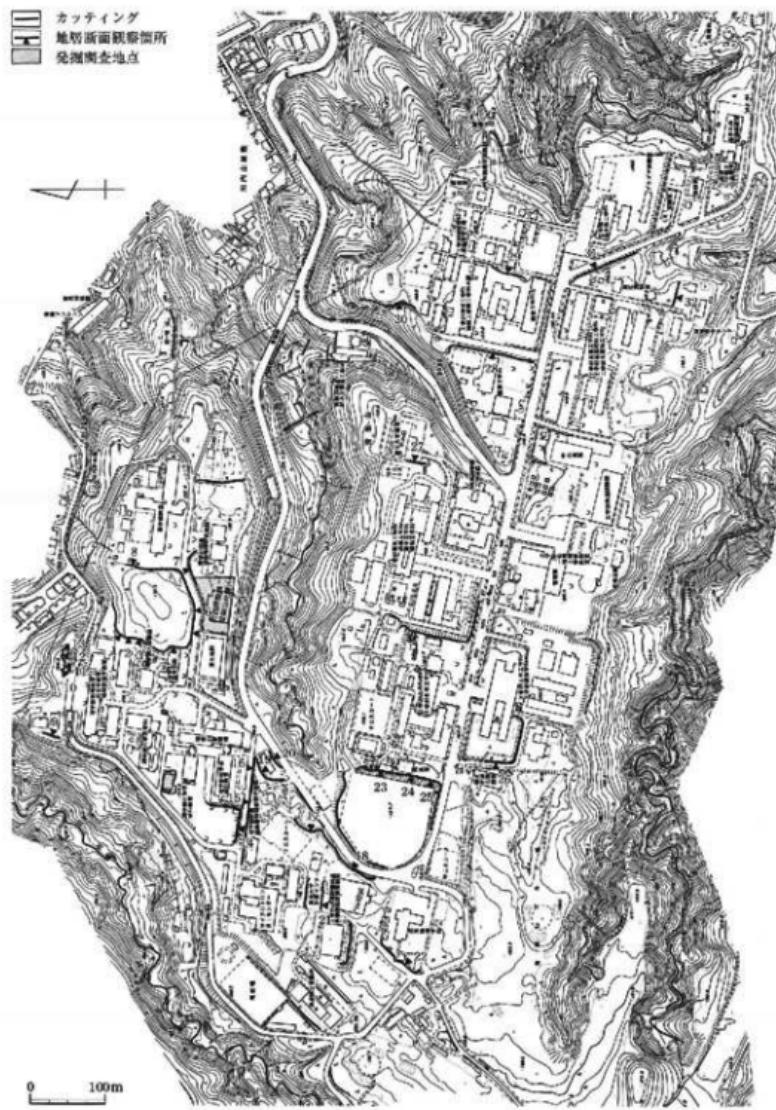


図22 青葉山地区での調査地点と露頭の位置

Fig. 22 Location of excavations and outcrops at Aobayama campus

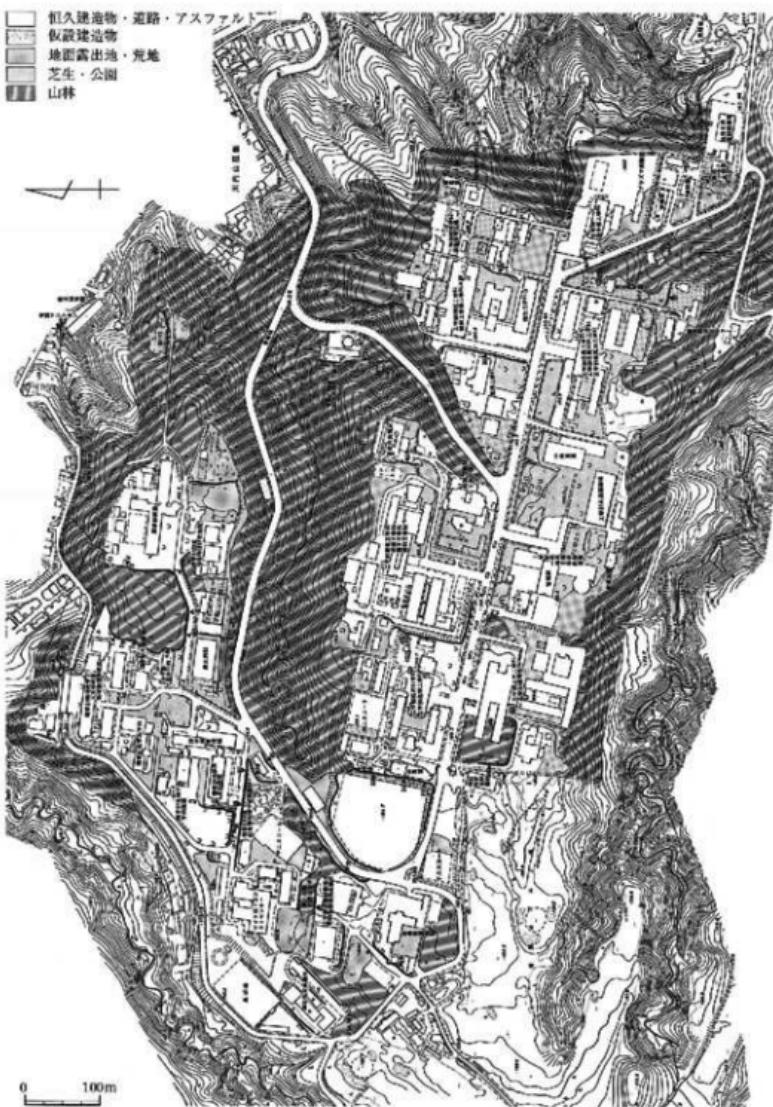


図23 青葉山地区地目図

Fig. 23 Distribution of the classification of land category at Aobayama campus

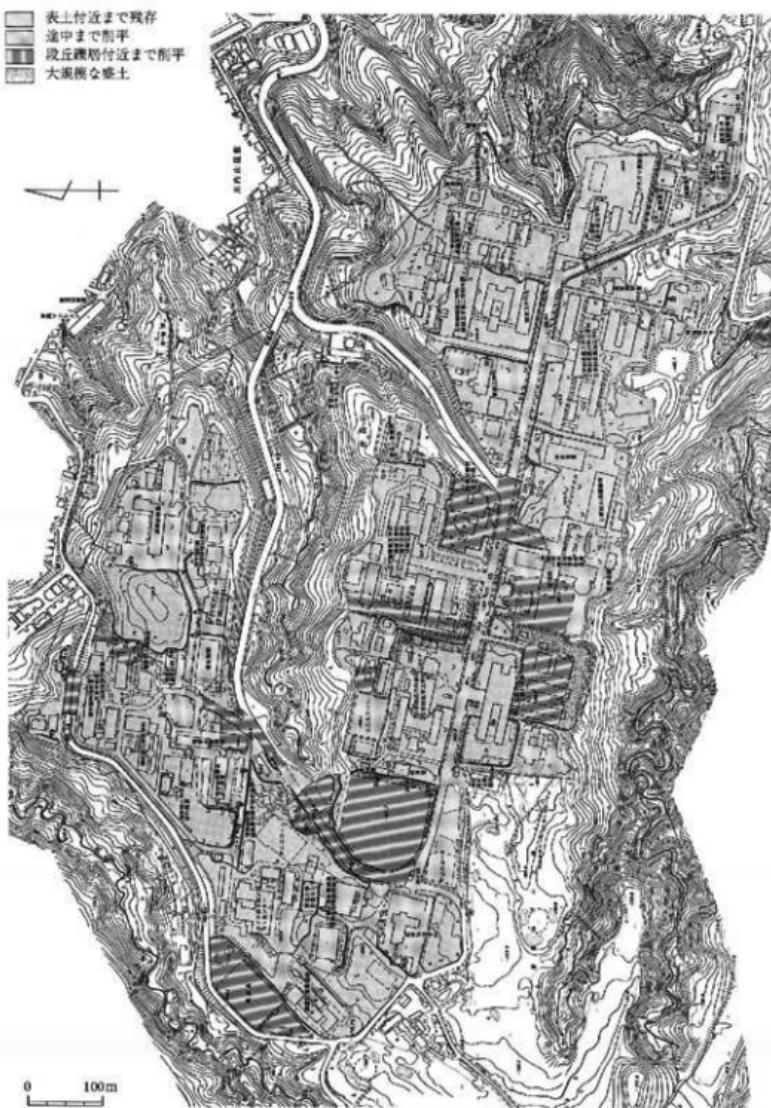


図24 青葉山地区火山灰残存状況図

Fig. 24 Distribution of volcanic ash soil at Aobayama campus

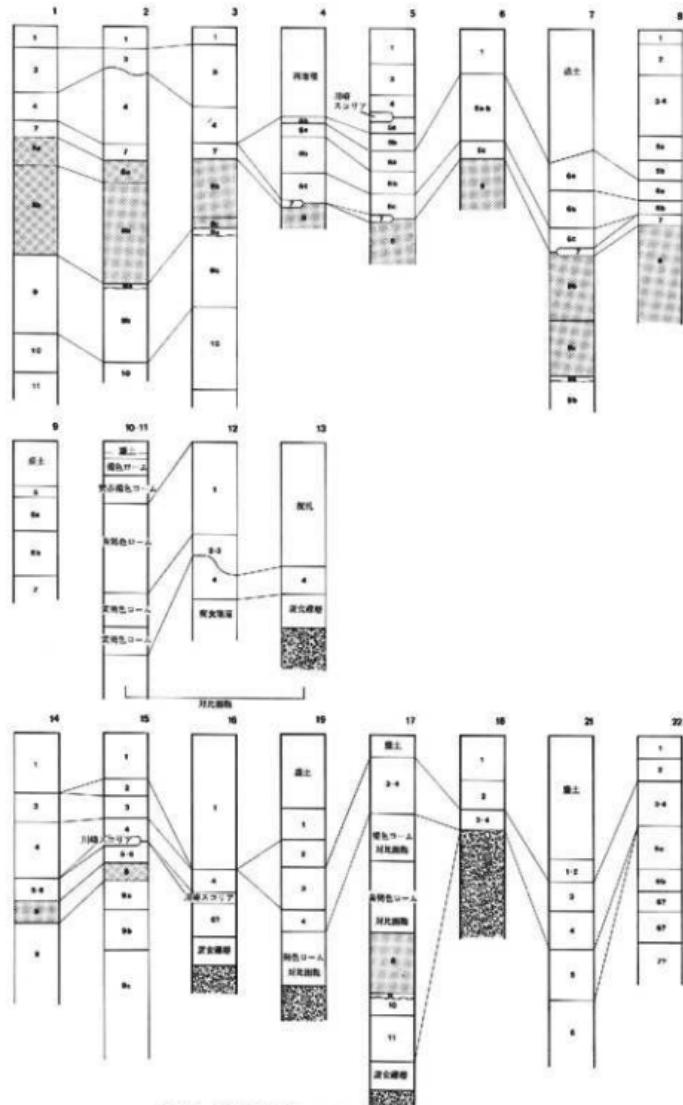


図25 青葉山地区の露頭での地層堆積状況(1)

Fig. 25 Schematic profiles of outcrops at Aobayama campus(1)

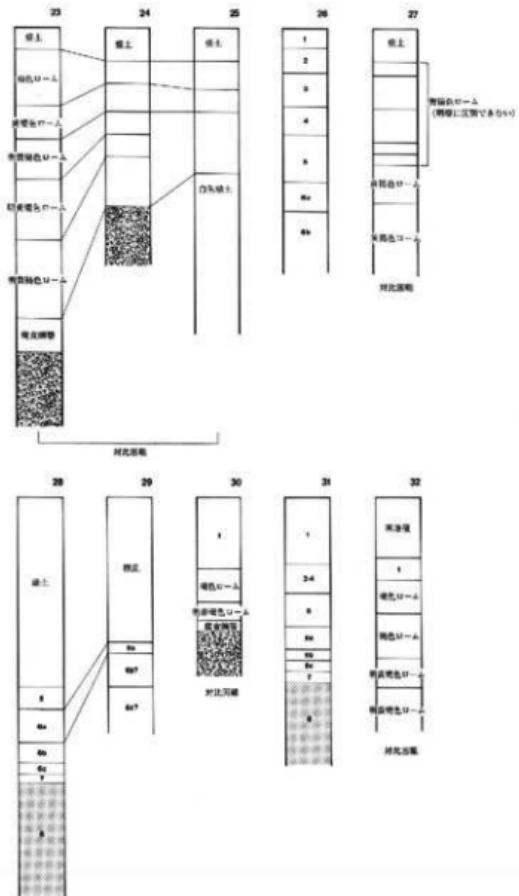


図26 青葉山地区の露頭での地層堆積状況(2)

Fig. 26 Schematic profiles of outcrops at Aobayama campus(2)

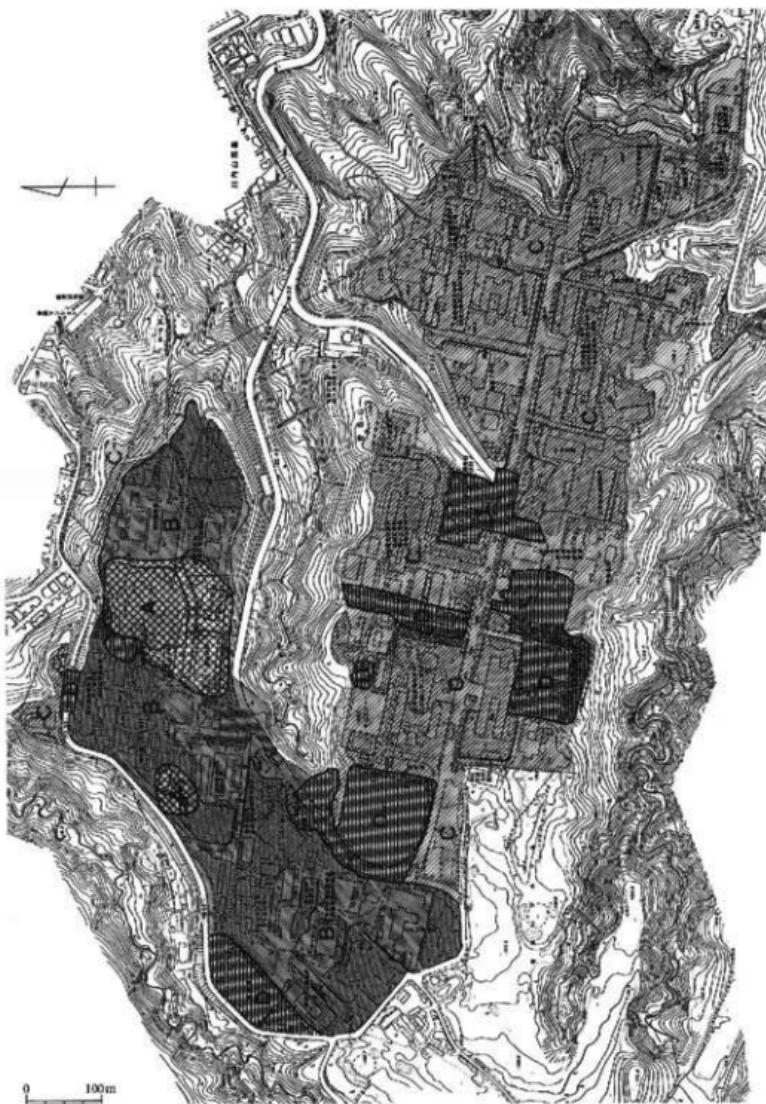


図27 青葉山地区での開発行為への対応方法区分図

Fig. 27 A sectional map of area A-D classified by required method of research
at Aobayama campus

4.まとめ

調査の結果をまとめると以下の通りとなる。

- ① 新たな遺物包含地点は発見されなかった。
- ② 青葉山Ⅲ面上の火山灰の分布が概ね把握された。火山灰の堆積状況について、従来の知見は大きく変わらなかった。
- ③ 5層および6層（赤色風化帯）が、青葉山Ⅲ面上に広く認められることが確認された。
- ④ 理学部側では、概して旧地形・火山灰とも保存が悪く、工学部側で保存が良いことが確認された。しかし、これまで遺跡は主に理学部側で発見されており、必ずしも地層の保存の良さが遺跡の分布に結びつくわけではない。

以上の結果をもとに、青葉山構内での工事にあたっては、以下の4区域に区分して、対応することとした（図27）。

A. 遺跡地図に登載されている周知の遺跡の範囲。

本調査を実施する。

B. 周知の遺跡の隣接地で、火山灰層が保存されている区域。

遺構・遺物の発見される可能性が高いため、試掘調査を実施する。

C. 周知の遺跡からは離れるが、火山灰層が保存されている区域。

これまでの調査では、遺跡が発見される可能性は低いが、遺跡が存在する可能性が全く無いわけではないため、工事実施時に立会調査を行う。

D. 既に段丘疊層付近まで削平され、火山灰層が保存されていない区域。

調査は行わない。

但し、B・C区域であっても、試掘調査もしくは立会調査の際に遺構・遺物が発見された場合には、その段階から周知の遺跡として取り扱い、本調査を実施する。そのため、この区域分けは、今後の調査の進展によって変更を加えていく必要がある。

《引用・参考文献》

- 板垣(俊・巖島正幸・寺戸恒夫 1981 「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」『東北地理』第33巻第1号 pp.48~53
- 大月義徳 1987 「宮城県中南部の中期更新世示標テフラ」『東北地理』第39巻第4号 pp.268~282
- 仙台市教育委員会 1967 「仙台城」
- 仙台市教育委員会 1985 「仙台城三の丸跡」仙台市文化財調査報告書第76集
- 地学団体研究会仙台支部編 1980 「新編仙台の地学」きた出版
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 「東北大学埋蔵文化財調査年報」1
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1986 「東北大学埋蔵文化財調査年報」2
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 「東北大学埋蔵文化財調査年報」3
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 「東北大学埋蔵文化財調査年報」4・5
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 「東北大学埋蔵文化財調査年報」6
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 「東北大学埋蔵文化財調査年報」7
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 「東北大学埋蔵文化財調査年報」8
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大学埋蔵文化財調査年報」9
- 宮城県教育委員会 1993 「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第152集
- 山田一郎・庄子貞雄・阿部隆 1986 「馬場塙A遺跡を中心とする旧石器時代遺跡土壤の土壤学的検討」『馬場塙A遺跡 I』pp.118~122 東北歴史資料館・石器文化談話会

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF
TOHOKU UNIVERSITY

vol.10 March 1998

The Archaeological Research Center
on the Campus, Tohoku University
Katahiracho, Aoba ward, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University, a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. Aobayama campus includes remarkable paleolithic sites, some are dated to more than 100,000 years ago.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out.

According to legal procedures, the commission for research, which was organized in 1983, carried out many salvage excavations for 11 years. It was reorganized into the Center in 1994 to improve conditions of research. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus, analyzes those records and remains and publishes excavation reports. Conservation and exhibition of archaeological heritage, studies about structure of sites, artifacts, techniques of excavation and preservation are also important duties.

This volume carries reports of an excavation of NM13 on Kawauchi campus and a distribution survey on Aobayama campus, which were carried out by the Commission of Buried Cultural Properties on Campus in 1992.

NM13 site (Loc.13 of *Ninomaru*, i.e. the secondary citadel of Sendai Castle)

The main citadel of Sendai Castle was built in A.D.1600 by *Masamune DATE*. In A.D. 1638 his son, *Tadumune DATE* built the secondary citadel on a lower terrace. *Ninomaru* had practically been the center of the government of *Sendai-han* for some 250 years until Meiji Restoration.

NM13 area corresponds to the area of a warehouse of arms which belongs to *Kanjosyo*, eastern outside of *Ninomaru* in a narrow sense. This site is located near NM7 site excavated in 1986.

Two trenches were excavated. At trench 1, 4 pits were found. Pit 1 is a post hole. Except pit 4 they are considered to belong to *Edo* period. There is a possibility that pit 1 and some of post holes found at NM7 were components of a warehouse of arms which is supposed to be there.

Three ditches which belong to *Edo* period were found at trench 2. The newest ditch 1 has stone wall. Ditch 3 was remade to ditch 2. From the difference of direction, ditch 2 and 3 are considered to have been used before the construction of *Ninomaru*.

Most of artifacts are roof tiles, which show that there were structures such as warehouse.

Distribution survey on Aobayama campus

Aobayama area, including Aobayama campus of Tohoku University, is located on the 3rd terrace surface of Aobayama terrace. Until 1984 several paleolithic sites were known (Aobayama site loc.A ~ D). In the area of Faculty of Science, the Commission of Buried Cultural Properties on Campus excavated 3 sites in 1984 (Aobayama site loc. B, E, F, i.e. B2). At all localities, paleolithic features or artifacts were found. Then it was supposed that there exist paleolithic sites in wider area.

In 1986~1991, the Commission carried out 5 trial excavations in the area of Faculty of Engineering, which is located southern ridge of Faculty of Science. However, no cultural remains were found there.

These results show that density of paleolithic features or artifacts is not equal in the whole area of Aobayama campus. It also became clear that the preservation of volcanic ash soil is different by the place.

For preservation of sites and efficient research, it was recognized essential to grasp the distribution of sites and volcanic ash soil from the evidence on the surface of ground or outcrops, covering the whole area of Aobayama campus. So in 1992, the Commission carried out a survey of ground surface and outcrops on Aobayama campus.

The detail of the survey can be summed up as follows.

- ① There found no new place containing cultural remains.
- ② We can understand the distribution of volcanic ash soil on the 3rd terrace of Aobayama

terrace. Deposit condition of them is what we recognized.

③ It is certain that there are distributions of red soil layer (stratum 5 and 6) widely on the 3rd terrace of Aobayama terrace.

④ Preservation of original topography and volcanic ash soil is better in the area of Faculty of Engineering than the area of Faculty of Science. However, cultural remains were mainly found in the area of Faculty of Science. Therefore, it seems that good preservation of volcanic ash soil not always indicate existence of sites.

Based on these knowledge, we devided the entire Aobayama campus to 4 areas as follows.

- A Inside of known site area.
- B The area where volcanic ash soil is preserved, and adjoining known site area.
- C The area where volcanic ash soil is preserved, but not so close to known site area.
- D The area where volcanic ash soil is not preserved.

It is necessary to carry out excavation or trial excavation in A and B area, in case any change of existing circumstances is planned.

This division naturally requires modification, when any cultural remain is found in the area B or C.

写 真 図 版



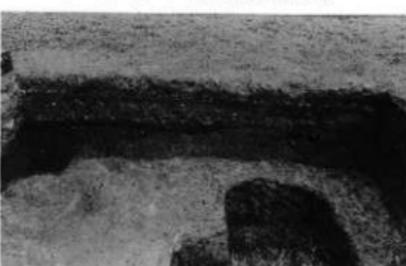
1. 1区2c層検出状況(西から)



2. 1区3層上面ピット検出状況(北から)



3. 1区最終状況(西から)



4. 1区東壁セクション(西から)



5. 1区南壁セクション(北から)



6. 1区ピット1a半截状況(南から)



7. 1区ピット1b半截状況(西から)



8. 1区ピット2・3(南から)

図版1 仙台城二の丸跡第13地点1区遺構

Pl. 1 Views, features and cross sections of Grid 1 at NM13



1. 2区1号溝(北から)



2. 2区1号溝掘り方検出状況(東から)



3. 2区北壁セクション(南から)



4. 2区西壁セクション(東から)



5. 2区2号溝内縫検出状況(東から)



6. 2区2号溝(東から)



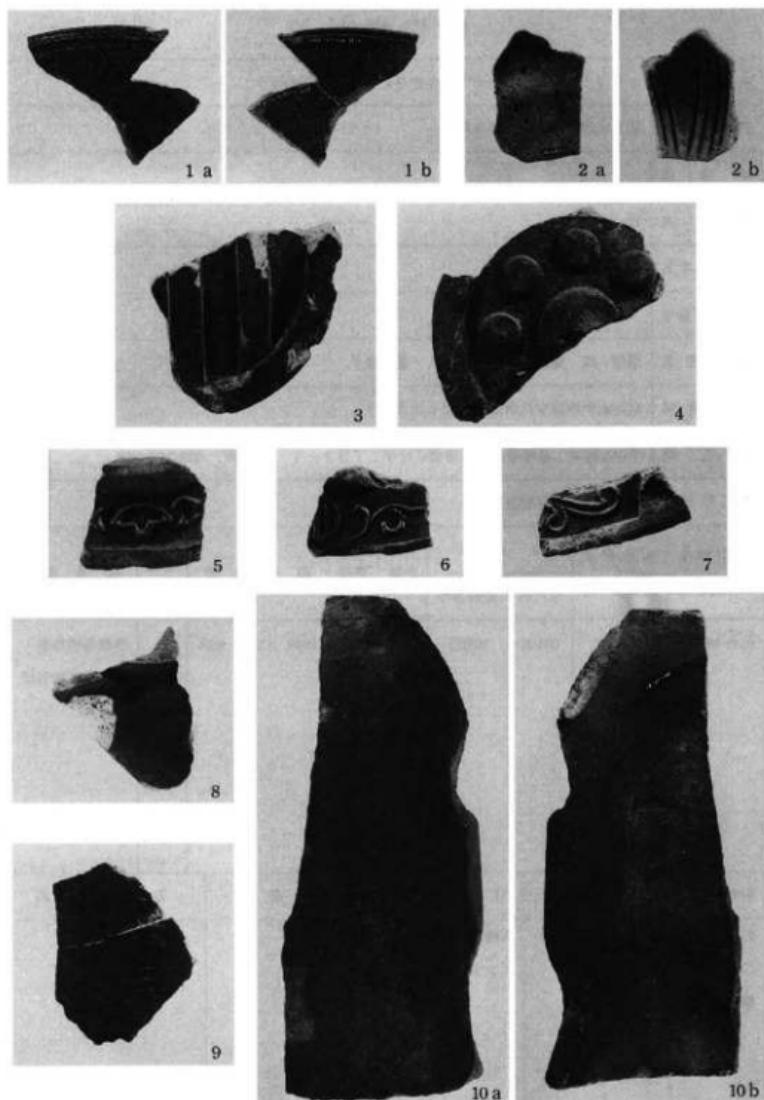
7. 2区3号溝(東から)



8. 調査風景(南から)

図版2 仙台城二の丸跡第13地点 2区遺構

Pl. 2 Views, features and cross sections of Grid 2 at NM13



図版3 仙台城二の丸跡第13地点出土遺物

Pl. 3 Various implements from NMI3

S = 1 : 3

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくmaiぞうぶんかざいちょうsaねんpoう							
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報							
副書名								
巻次	10							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	須藤 隆・藤沢 敦・岡根達人・菊池佳子							
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1 TEL 022-217-4995							
発行年月日	西暦1998年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	市町村	遺跡番号						
仙台城跡	宮城県 仙台市 青葉区片内	04100	01033	38° 15' 18"	140° 51' 23"	1993.3.15~3.24	8	学校施設整備 雨水浸透拠新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
仙台城跡 二の丸跡 第13地点	城館	近世	溝跡 ピット	3条 4基	陶磁器 土師質土器 瓦質土器 瓦			

研究編

相馬藩における近世窯業生産の展開

関根達人

- 1.はじめに
 - 2.相馬藩領内における近世陶器生産遺跡
 - (1) 窯跡の分布の概要と調査の方法
 - (2) 相馬市内の窯跡
 - (3) 浪江町内の窯跡
 - 3.相馬陶器の編年と製作技術の検討
 - (1) 大堀相馬焼の編年
 - (2) 小野相馬焼の編年
 - (3) 相馬陶器生産の技術系譜
 - 4.大堀相馬焼の経営形態と相馬藩の窯業政策
 - (1) 大堀相馬焼の経営形態
 - (2) 相馬藩の窯業政策
 - 5.結び
- 謝辞
引用・参考文献
付表(1)～(4)

Summary

There were two glazed ceramic-producing centers in Souma domain. In Shineha district situated at south part of Souma domain, Ohbori-souma ware had been made since the end of the 17th century. The chief shapes of Ohbori-souma ware belonging to the 18th century were cheap rice bowls copied from Seto-mino ware, they were distributed over the wide area of Tohoku district with Ono-souma ware which were made in the suburbs of Nakamura castle.

It was revealed that firing technique of Ohbori-souma ware was very different from that of Seto-mino ware by investigation of the structure of kilns, the ways of pile ceramics in firing chambers and kinds of tools used inside the kilns. Though there were many kilns in Souma domain, the kiln was a small scale and low productivity.

It was confirmed that kilns had increased and spread after the famine occurred in the late 18th century in Shineha district by both distribution survey and investigation of ancient documents. The government of Souma domain tightened the protection and administration of ceramic producers from the late 18th century to the early 19th century.

In the 19th century, two glazed ceramic-producing centers in Souma domain went the different way to meet the needs of times when life styles of consumers diversified. Ohbori-souma ware protected by government began to be exported to the ceramic market in Edo. Ono-souma ware were degenerated by newly-rising center of ceramic-production. Glazed ceramics called Tatenoshita ware which rooted upon Souma district began to be produced instead of Ono-souma ware at kilns situated in the suburbs of Nakamura castle.

1. はじめに

幕末の安政3年（1856年）の江戸入津物資の調査によれば、この年、江戸に入荷した相馬産の焼物は4,697俵で、産地別に見た場合、瀬戸・美濃、紀州、信楽、肥前、常滑、京都、筑前、堺、大村について10位、比率では全体の約1.5%にあたる（「重宝録」『東京市史稿港湾編』3）。実際、江戸遺跡から出土する相馬産の陶器は、量的にも少なく、19世紀代の土瓶と德利がほとんどである。江戸市場ではさほど重要な位置を占めることのなかった相馬陶器も、西高東低型の近世陶磁器の生産状況にあって、東日本では瀬戸・美濃に次ぐ生産量を有しており、相馬藩にとって藩経済を潤す重要な国産統制品であった。

従来、相馬藩領内で作られた近世陶器としては、中村城下の相馬駒焼と館ノ下焼、南北標準郷の大堀相馬焼の三種類の焼物が知られていた。相馬駒焼は、藩の御用窯である田代窯で作られた御留物であり、一般に流通する民窯の製品としては、大堀相馬焼と館ノ下焼の名前が挙げられていた。従来の研究は、主として、僅かに残る伝世品と、一部の古文書類を手がかりとして行われてきたため、生産や流通の問題はおろか、製品の実態もよく判らない状況にあった。伊万里焼等と異なり、大堀相馬焼の多くは通常ならば伝世されることのない日常雑器であったこと、僅かに残る伝世品が19世紀以降の德利・土瓶類といったもので、年代的にも器種の点でも非常に偏りを有していたこと等、伝世品に依拠した研究は多くの問題点を抱えていた。

一方、東北地方においても近年、城館を中心に近世遺跡の調査が進み、大堀相馬焼や、それに類似する產地不明の近世陶器が蓄積されるようになった。そのような状況下、筆者は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターによる仙台城二の丸跡の総合的な調査により、近世陶磁器の変遷を専門的に検討する機会を得た。仙台城二の丸跡から出土した多量の大堀相馬焼（あるいはその可能性のある陶器）を正しく評価するため、それらを基軸に、他の消費地遺跡出土の・括資料や一部の窯跡採集資料を検討した結果、これまでに、相馬藩で生産された焼物に関して、次のような知見を得ることができた（東北大学埋蔵文化財調査年報7・8・9）。

・相馬藩領内で作られた近世陶器には、相馬駒焼、大堀相馬焼、館ノ下焼の他、それらとは胎土や型式の異なる、相馬市小野周辺で焼かれた製品（「小野相馬焼」と命名）が存在する。

・消費地から出土する大堀相馬焼と小野相馬焼を見る限り、両者は遅くとも18世紀の後半には器種別分類あるいは器種内分類とでも呼ぶべき生産体制を探っていた可能性が高い。

・大堀相馬焼の創業は17世紀末（元禄年間）まで遡る。消費地での出土状況からみて、大堀相馬焼は創業直後、18世紀前葉までの短期間に、急速に生産規模を拡大した可能性が高い。

・18世紀代の大堀相馬焼は、一貫して、瀬戸・美濃窯陶器を寫した、廉価な大衆消費製品の生産を行っており、その窯跡は、現在の浪江町大堀地区と小丸地区で確認できる。

・創業直後から大堀相馬焼の流通圏は、相馬藩の領国を超える広がりを有しており、18世紀

には東北地方中部から南部の太平洋側の地域に広く分布する。

・18世紀代には、主な市場である相馬藩と仙台藩の領内では、大堀相馬焼が瀬戸・美濃を完全に凌駕しており、その外側に位置する盛岡藩や奥藩では、両者が競合する状況にあった。

・仙台城では、19世紀初頭頃、小野相馬焼は競合関係にある城下の堤焼にとって代わられる。

その後、消費地遺跡出土資料が蓄積され、18世紀代の大堀相馬焼の流通圏は東北北部の八戸藩領にも及んでいたことや、18世紀代の大堀相馬焼を出土する遺跡では、ほぼ例外なく小野相馬焼も出土し、両者の販売・流通経路が同じであった可能性の高いこと等が新たに判明した。

このように、消費地遺跡での相馬陶器の実態が明らかになるにつれ、考古学的資料としての相馬陶器の重要性は認識されつつあるが、それらが生産された窯跡遺跡については、これまで基本的な分布調査も行われておらず、そのことが相馬陶器の研究を深化する上で、重大な支障となっているのも事実である。また実際、遺跡として登録されている窯跡は数基に過ぎず、多くの窯跡が調査を経ずして失われてきた。近年は相馬地方の窯跡でも、一部の好事家による遺物目当ての盗掘が行われており、窯跡を遺跡登録し、保護することが緊急の課題となっている。

筆者は、平成9・10年度の2か年、「東北地方における近世窯業生産の基礎的研究」という課題で科学研修費の交付を受け（奨励研究A課題番号09710276）、現在、相馬地方において窯跡の分布調査、採集遺物の資料化、古文書史料の検討等を行っている。本論では、これまでの調査成果に基づき、相馬陶器の実態を明らかにするとともに、近世村落における産業の一形態として見た場合、相馬藩領内の陶業に対してどのような評価を与えるのか検討する。

2. 相馬藩領内における近世陶器生産遺跡

(1) 窯跡の分布の概要と調査の方法

相馬藩の領域は、現在の福島県北部浜通り地方であり、宇多郷・北郷・中郷・小高郷・北標葉郷・南標葉郷・山中郷の七郷、計226の村々から構成されていた。藩命により安政4年（1857年）から編纂が開始された『奥相志』（岩崎敏夫編1969所収）に拠れば、宇多郷の小野村・富沢村や北標葉郷の井手村・小丸村からは、良質の陶土や釉薬の原料となる鉱物が産出され、周辺の村々では、江戸中期以降、陶器生産が盛んに行われるようになったという。

窯跡は、現在の相馬市内と双葉郡の浪江・大熊・双葉の3町内の二地域に集中している（図1）。このうち、相馬市内に関しては窯数も比較的少なく、それぞれの窯の操業も短期間と考えられるものが多いため、全体の様相を把握しやすい状況にある。一方、双葉郡内では窯数も多く、多くの村で明治以降も陶器の生産が引き続き行われていたため、窯跡の数を十分に把握することは困難な状況にある。したがって本論では、変則的ではあるが、これまでに行ってきた分布調査の進捗状況に応じ、相馬市内について、19世紀以降の窯跡を含めて全体を網羅し、

双葉郡内については、窯が拡散すると考えられる以前、即ち18世紀代の窯跡を中心に取り上げる。なお、双葉郡内の窯では大堀相馬焼が生産されており、採集遺物を、大堀相馬焼の消費地編年案（『東北大學埋蔵文化財調査年報7』所収）に照らし合わせて、18世紀代の窯跡を抽出した。

(2) 相馬市内の窯跡

福島県相馬市は、県北東部、浜通り北部に位置する。東は太平洋に面し、西には、靈山、手倉山、天明山等の阿武隈山地が迫る。天文18年（1590年）、相馬氏は、奥州仕置により、宇多・行方・標葉の3郡、4万8700石（後に6万石）を安堵され、慶長16年（1611年）、市内に中村城を築き、小高城からここに移った。市内では、中村城下田町に所在する藩の御留窯田代窯の他、城に隣接する本町や小野、市街地南方の坪田、馬場野に窯跡が分布する（図2・表1）。

小野地区は、市の中央部、阿武隈山系天明



図1 相馬藩領内における近世窯業生産遺跡の分布
Fig. 1 Distribution of sites of kilns belonging to Pre-modern period in Souma domain

山の東麓緩傾斜地に位置し、中村城から北西に約1kmの距離にある。窯跡は、右支小泉川を挟んで、北小野丘陵に8基、南小野丘陵に1基分布する。小野地区に次いで窯跡の多い中村本町地区では、敗戦直後まで館ノ下焼と呼ばれる壺類・鉢類を主体とする施釉陶器の生産が行われており、近年まで土管・焼瓦・瓦壺等が焼かれていた。窯跡は、館ノ下焼の名称の由来ともなった重臣岡田氏の居館跡周辺の丘陵斜面に7基分布する。坪田地区は、良質の陶土を産する富沢地区の北に隣接し、戦前には瓦戦人が多く見られた。陶器を焼いた窯跡は3箇所確認できた。馬場野地区では、陸前浜街道の調査の際に、相馬藩の家老熊川氏の居宅の裏山で窯跡が1箇所

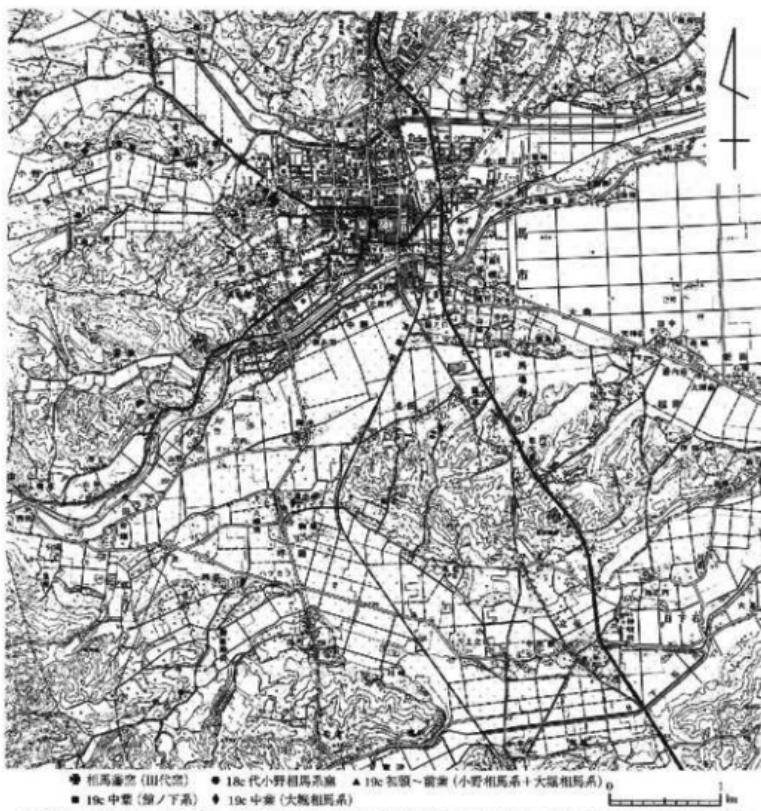


図2 福島県相馬市内の近世・近代窯跡分布

Fig. 2 Distribution of sites of kilns belonging to Modern and Pre-modern periods in Souma city, Fukushima prefecture

表1 福島県相馬市内の近世・近代窯跡一覧

Tab. 1 List of kilns at Souma city, Fukushima prefecture

地図番号	地名(地図番号)	所 在 地	立 地	性 質 と び 観 察	上 古 代	中 古 代	近 代	古文化研究小委員会	備 注
国2-1	人原(一ノ原)	相馬市人原町人原字人原	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	人原の窯跡は、相馬系の陶器が出土する。
国2-2	金牛の山(人馬山)228	相馬市人馬山字人馬山228	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	金牛の山(人馬山)228は、相馬系の陶器が出土する。
国2-3	金牛の山(人馬山)229	相馬市人馬山字人馬山229	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	金牛の山(人馬山)229は、相馬系の陶器が出土する。
国2-4	金牛の山(人馬山)230	相馬市人馬山字人馬山230	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	金牛の山(人馬山)230は、相馬系の陶器が出土する。
国2-5	金牛の山(人馬山)231	相馬市人馬山字人馬山231	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	金牛の山(人馬山)231は、相馬系の陶器が出土する。
国2-6	金牛の山(人馬山)232	相馬市人馬山字人馬山232	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	金牛の山(人馬山)232は、相馬系の陶器が出土する。
国2-7	金牛の山(人馬山)233	相馬市人馬山字人馬山233	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	金牛の山(人馬山)233は、相馬系の陶器が出土する。
国2-8	金牛の山(人馬山)234	相馬市人馬山字人馬山234	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	金牛の山(人馬山)234は、相馬系の陶器が出土する。
国2-9	金牛の山(人馬山)235	相馬市人馬山字人馬山235	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	金牛の山(人馬山)235は、相馬系の陶器が出土する。
国2-10	中平田(中平田山)	相馬市中平田字中平田	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	中平田(中平田山)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-11	中平田(中平田山)	相馬市中平田字中平田	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	中平田(中平田山)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-12	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-13	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-14	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-15	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-16	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-17	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-18	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-19	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-20	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。
国2-21	大澤口(大澤口)	相馬市大澤口字大澤口	山地	相馬系の陶器が出土する。土器は、小野相馬系のものと見られる。	新石器時代	新石器時代から縄文時代	18世紀後葉	平安時代後葉から江戸時代後葉まで	大澤口(大澤口)は、相馬系の陶器が出土する。

確認されている（福島県教育委員会1985）。

これら相馬市内に存在する窯跡を、その主要生産器種の種類と組合せによって、A～Eの5群にグルーピングした（表2）。大堀相馬焼の消費地縦年に照らして、C群に見られる大堀相馬系鉄絵碗皿類・大堀相馬系土瓶については19世紀初頭～前葉、E群の大堀相馬系土瓶については19世紀中葉にそれぞれ年代比定できる。また、後に詳述する小野相馬焼の型式変化から、小野相馬焼の窯としてはA群が古く、B群がそれに次ぎ、C群は最も後出であることが判る。一方、館ノ下焼のみの生産を行っていたD群には、先述の通り敗戦直後まで実際に稼動していた窯が含まれており、これらのなかでは相対的に最も新しく位置づけられる。D群の年代的な上限については、館ノ下焼以外に小野相馬焼や大堀相馬系陶器を生産していたC群との関係からいって、19世紀の前葉より古く過ることは考えにくい。以上を整理すれば、相馬市内の窯跡に関しては、A群→B群→C群（19世紀初頭～前葉）→E群（19世紀中葉）・D群（19世紀前葉？～20世紀中葉）の推移が想定される。

次にA群・B群・C群に関して個別の窯毎に、窯の立地と採集遺物の検討を行う。

[A群]

A群に分類される窯は、大沢口窯跡のみである。市内の他の窯が低丘陵の裾部あるいは平坦

面に染かれているのに対して、本窯跡は標高100m程の比較的高い丘陵の中腹に位置する。山林のため、製品、窯道具、焼土等の分布が確認できる範囲は狭いが、地形的には複数の窯が存在していた可能性も考えられる。

採集遺物には、小野柏馬系灰釉製品、擂鉢、瓦がある（図3）。擂鉢には二つのタイプが認められるが、全て無釉である。これらが製品なのか、施釉以前の素焼きの未製品なのかは不明である。比較的堅く焼き締められたものも認められ、それらについては、このままの状態でも擂鉢の機能を果たしうる。本窯跡からは軒平瓦、丸瓦、平瓦が採集されているが、生焼け状態のものも含まれることから、

瓦が陶器とともに本窯で焼かれたことは明らかである。軒平瓦の瓦当文様は、三枝の各枝にそれぞれ3つの点粒が付く中央飾りと、それを左右から挟む2対の唐草から構成されている。このような文様は「東海式」と呼ばれ、尾張・三河という瓦の大生産地を抱える東海地方の文様と言われている（金子智1996）。金子氏によれば、「東海式」は、名古屋城三の丸遺跡（服部哲也ほか1994）で多量に出土しているほか、関東地方では、小田原城三の丸箱根口門跡、江戸遺跡、高崎城三ノ丸遺跡で出土しており、江戸遺跡から出土するものについては、三州あたりから海路もたらされたとの見解が示されている。管見によれば、これまでのところ、東北地方では消費地遺跡からも「東海式」の近世瓦の出土報告例はなく、今回それを生産した窯跡が確認されたことは特筆される。金子氏や服部氏の編年観に従えば、本窯跡で焼かれた「東海式」軒平瓦の年代は、瓦当文様の特徴から、18世紀前半とするのが適当であろう。それらの瓦の供給先は不明であるが、候補地としては、相馬氏の居城である中村城が挙げられよう。

[B群]

B群に属する窯跡は、全て北小野丘陵に位置する。保存状況のよい小野金谷台A窯跡・同B

表2 福島県相馬市内の近世・近代窯の主要生産品目

Tab. 2 List of staple products of kilns at Souma city, Fukushima prefecture

生 産 器 種 に よ る 分 類	窯 跡 名 称	擂 鉢	瓦	小野柏馬系灰釉製品				人堀相馬系鐵絵碗皿		館ノ下系青・鉢類		大堀相馬系土瓶・坏	
				擂 鉢	瓦	人堀相馬系灰釉製品	館ノ下系青・鉢類	大堀相馬系土瓶・坏					
A	大沢A窯跡	○	○	○									
	金谷台A窯跡	○	○										
	金谷台B窯跡	○	○										
B	金谷台C窯跡	?	○										
	下栗御堂A窯跡	?	○										
	栗原堂窯跡	○	○										
C	中平横田窯跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	本町A窯跡	?	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	本町B窯跡												
	本町C窯跡												
D	本町D窯跡												
	本町E窯跡												
	本町F窯跡												
	本町G窯跡												
E	坪田八幡小学校内窯跡											○	
	坪出近藤窯跡											○	
	馬場野窯跡											○	

窯跡では、踏査の際に多くの遺物を採集することができた(図4・5)。

どちらの窯でも、小野相馬系灰釉製品としては、見込み部分の釉薬を蛇の目状に剥いだ各種の皿・鉢類や、片口鉢、香炉(火入)が主体的である。小野相馬系灰釉製品以外に、鉄釉を下地に暗緑褐色の灰釉を口縁部に掛け分けた檜鉢や、同じく鉄釉を下地に暗緑褐色の灰釉を重ね掛けした灯明皿が多く生産されている点でも、この二つの窯跡は共通する。金谷台A窯跡では、18世紀後半と考えられる肥前産染付皿(図5-22)や、同じく18世紀後葉~19世紀初頭と考えられる大堀相馬焼の布袋徳利(図5-21)が採集されている。小野相馬焼の編年のところで詳

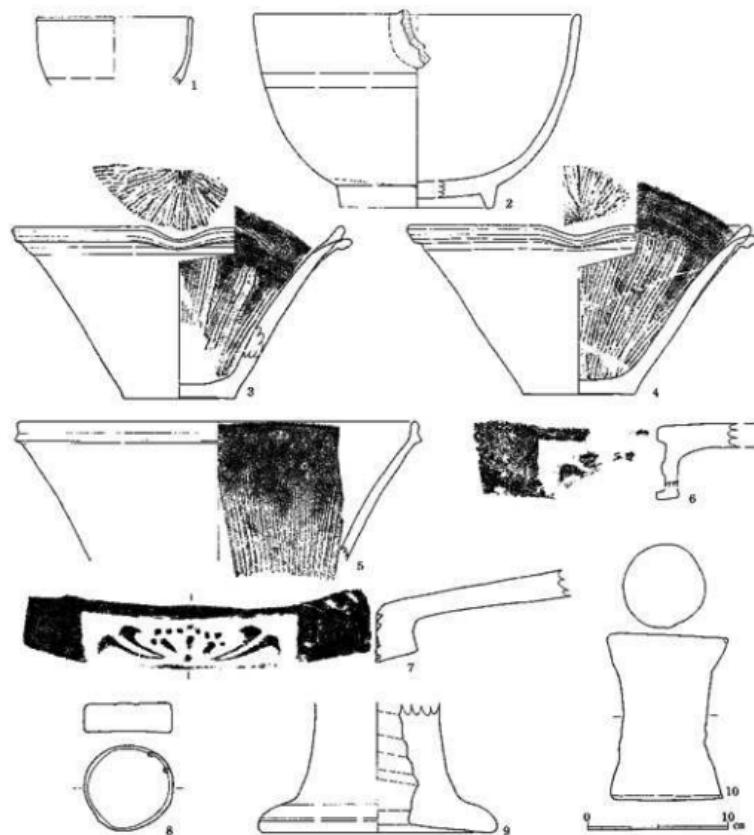


図3 相馬市坪田大沢口窯跡採集遺物

Fig. 3 Surface finds from Ohsawaguchi site of kiln at Souma city, Fukushima prefecture

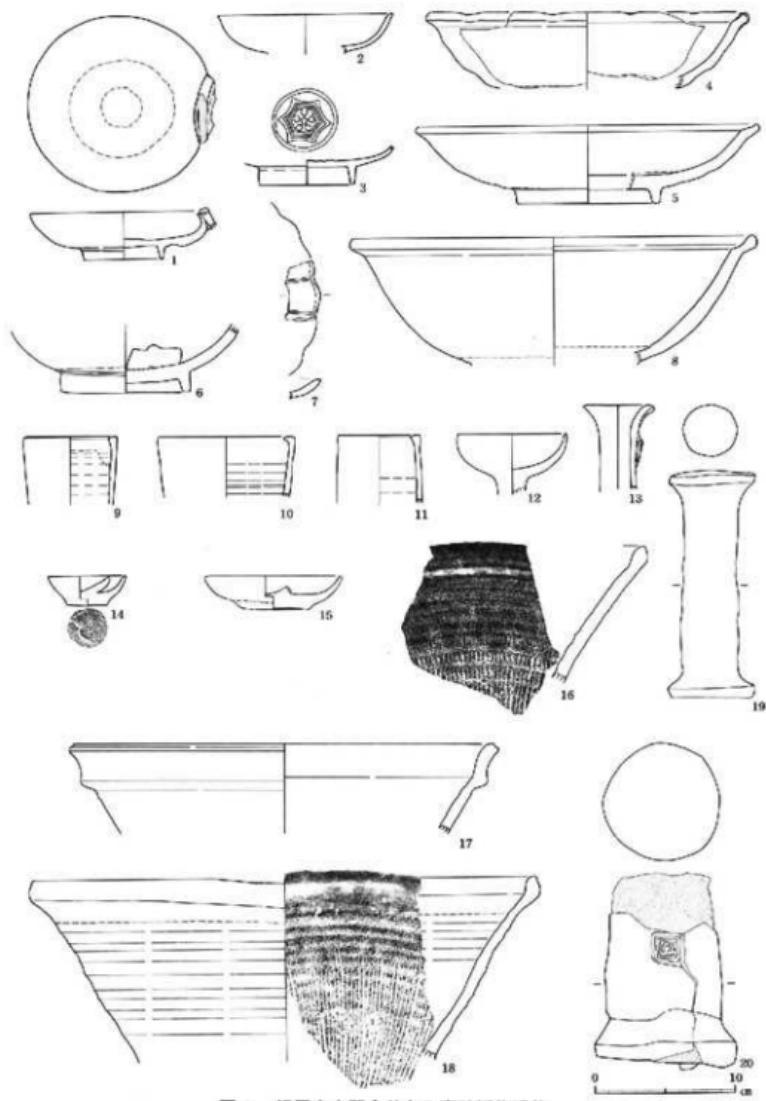


図4 相馬市小野金谷台B窯跡探集遺物

Fig. 4 Surface finds from Kanayadai B site of kiln at Souma city, Fukushima prefecture

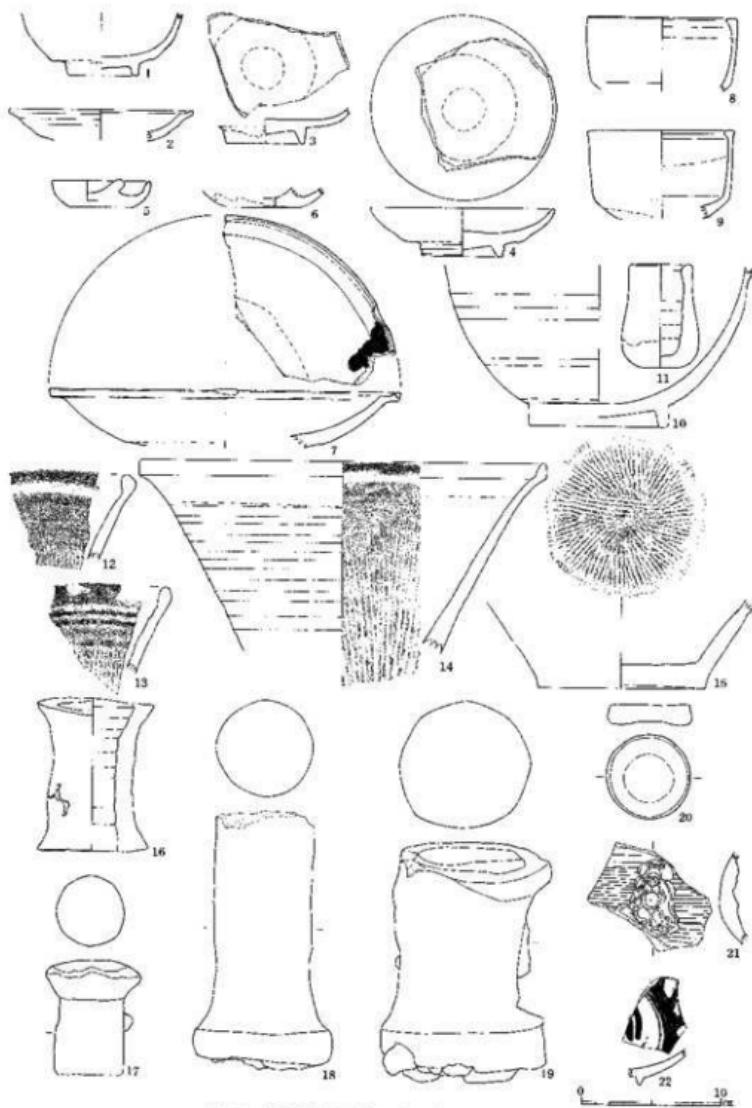


図5 相馬市小野金谷台A窯跡採集遺物

Fig. 5 Surface finds from Kanayadai A site of kiln at Souma city, Fukushima prefecture

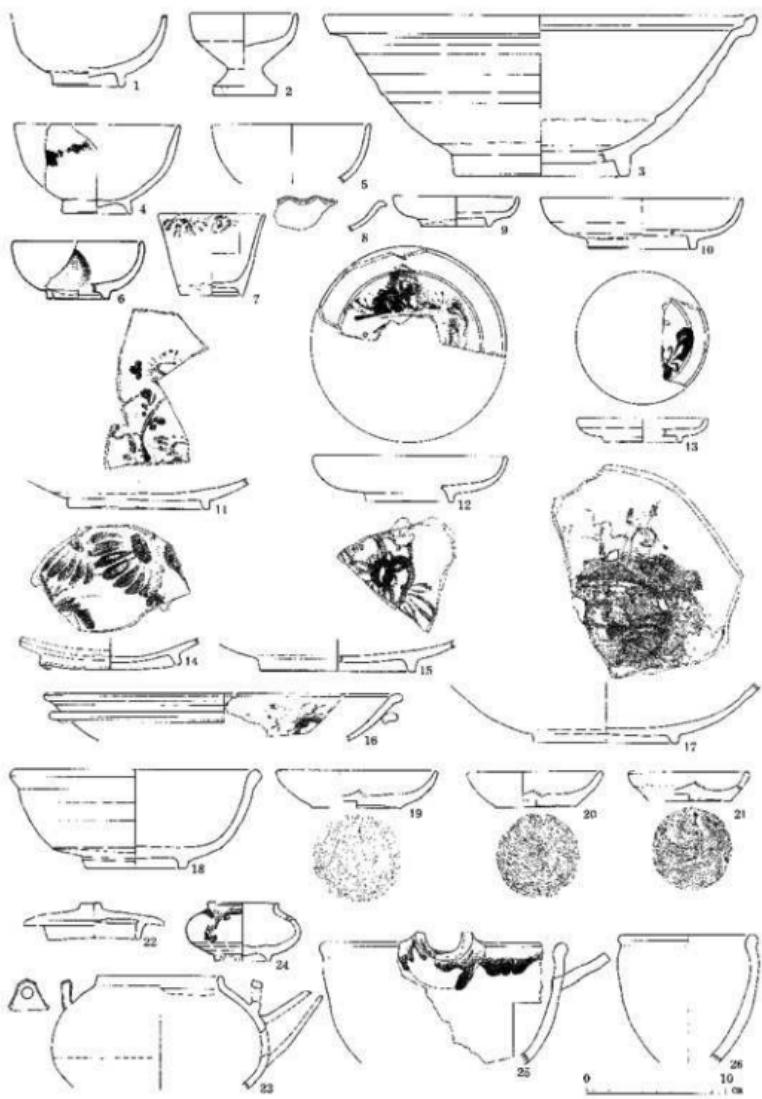


図6 相馬市小野中平横田窯跡採集遺物(1)

Fig. 6 Surface finds from Nakadaira-Yokota site of kiln at Souma city, Fukushima prefecture(1)



図7 相馬市小野中平横田窯跡採集遺物(2)

Fig. 7 Surface finds from Nakadaira-Yokota site of kiln at Souma city, Fukushima prefecture(2)

述するが、製品の型式学的特徴から、金谷台B窯跡が同A窯跡に先行すると考えられる。

〔C群〕

C群に属する窯としては、南小野丘陵に位置する中平横田窯跡と、本町丘陵の本町A窯跡がある。前者については、「瀬戸屋」の屋号を持つ、所有者の横田家が瀬戸物を焼いていたとの伝承がある。中平横田窯跡は保存状態も良好で、遺物の散布量も多く、原町市立野馬追の里資料館所蔵の故竹島國基氏のコレクションには、本窯跡採集の陶片が多数含まれている。

C群の窯では、19世紀初頭～前業に比定される大堀相馬系陶器、なかでも鉄絵を持った碗皿類と描鉢が主体的であるが、小野相馬系の灰釉を施した碗や仏教器、暗緑褐色の灰釉が施釉された灯明皿、さらには鉢ノ下焼の特徴を有する壺・鉢等も少量生産されている（図6・7）。C群は、小野相馬焼のみを生産していたB群と、館ノ下焼の窯であるD群の両方の様相を部分的にあわせ持つており、両者をつなぐ過渡的段階と位置づけられる。

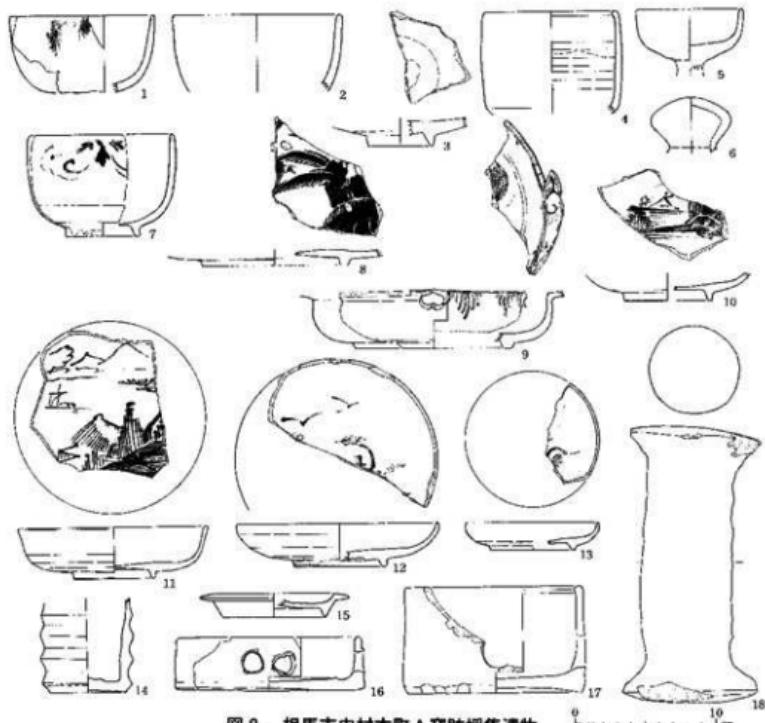


図8 相馬市中村本町A窯跡採集遺物

Fig. 8 Surface finds from Motomachi A site of kiln at Soma city, Fukushima prefecture

以上、相馬市内の近世から近代の窯業生産を整理すると次のような推移をたどると推定される。

18世紀前半に大沢丘窯跡で、尾張・三河地方の瓦生産技術に基づく瓦が焼かれ、併せて小野相馬焼の陶器生産が開始される。18世紀中葉には、小野相馬焼の生産は北小野丘陵上の窯に移り、そこで擂鉢・片口鉢・香炉等、大堀相馬焼とは競合しない器種が主に焼かれる。19世紀初頭から前葉には、南小野丘陵と本町丘陵の窯で、伝統的な小野相馬焼に加え、大堀相馬焼の技法を用いた鉄絵碗・皿類と、後の館ノ下焼に繋がる壺・鉢類の生産が行われる。19世紀中葉には、市街地の南方に位置するいくつかの窯でも大堀相馬焼が焼かれるが、坪田の近藤窯を除いて、いづれも短期間の操業に終わる。一方、本町丘陵の窯は、壺・鉢等の大型器種に限定した生産を行うようになり、いわゆる館ノ下焼と呼ばれる焼物が、今世紀の中頃まで作られ続ける。

(3) 浪江町内の窯跡

現在の収集部で、18世紀代の窯跡が確認できたのは、浪江町内だけであり、南に隣接する双葉・大熊の両町内に分布する窯跡は、いずれも18世紀末以降の可能性が高いと考えられる。浪江町内では、江戸時代、小丸、大堀、井手、小野田、田尻、末の森、酒井、室原等、多くの村々で焼物が作られていたが、このうち18世紀代以前にまで陶器生産が遷ることを確認できたのは、小丸、大堀、井手の三ヶ村のみで（図9・表3）、他は双葉・大熊両町の窯同様、19世紀以降の可能性が高い。以下では、窯跡探査資料に基づき、18世紀代の大堀相馬焼の生産状況を村毎に概観する。なお、井手村については、19世紀初頭～前葉の資料についても一部紹介する。

〔川小丸村〕

西は手倉山（標高631m）を隔てて葛尾村、南西は田村郡都路村、南は十萬山（標高448m）を隔てて大熊町、東は旧大堀村に接する。高瀬川に沿って集落が形成され、江戸時代には田村落領古道に到る街道が通っていた。耕地面積の狭い山間部の村落で、天明の飢饉の被害は著しく、その前後で家数は激減（福島県1965）、街道に設置されていた駅舎も廃止されたという。地元には、天明の飢饉を境に、村の窯屋が全て廃業したとの伝承も残っている。開田等で尖わた窯もあるが、大堀、井手に比べて全体に窯跡の残り具合は良好である。

小丸地区では鉄絵製品を生産したと考えられる窯跡は確認されず、採集された遺物（図10）は、全て18世紀代に位置づけられるものばかりである。灰釉の碗・皿類が多く、他に鉢・小壺・壺・水指・灯明皿・仏壇器等の灰釉製品や、擂鉢・灯明皿等の鉄釉製品が少量伴う。大堀や井手と比べた場合、見込みに押印文を有する皿類が量的にも、種類の点でも豊富に見られる。小丸下平南窯跡採集の皿に見られる「菊に流水」文（図10-1～3）は、類似する文様が美濃の18世紀前半代の摺絵皿に使われており、それを表現技法を変えて写したものと思われる。



図9 福島県双葉郡浪江町の近世窯跡の分布（18世紀代の窯跡のみ）

Fig. 9 Distribution of sites of kilns belonging to the 18th century at Namie town, Fukushima prefecture

表3 福島県双葉郡浪江町の近世窯跡一覧（18世紀代の窯跡のみ）

Tab. 3 List of kilns belonging to the 18th century at Namie town, Fukushima prefecture

現地名	地名	地主	地主姓	地主姓	主な生産品	主な生産品	主な生産品	主な生産品	主な生産品
現9-1	日向山	新田家	新田	新田	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-2	高1・高2・高3	高橋家	高橋	高橋	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-3	木久野村	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-4	木久野村	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-5	平本通路	平本家	平本	平本	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-6	平本通路	平本家	平本	平本	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-7	木久野村	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-8	山田入人宅	山田家	山田	山田	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-9	木久野村	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-10	浪江大船屋横	浪江大船屋	浪江大船屋	浪江大船屋	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-11	山田通路	山田家	山田	山田	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-12	木久野村	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-13	木久野村	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-14	木久野村	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-15	山田通路	山田家	山田	山田	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-16	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-17	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-18	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-19	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-20	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-21	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-22	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-23	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
現9-24	木久野通路	木久野家	木久野	木久野	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦

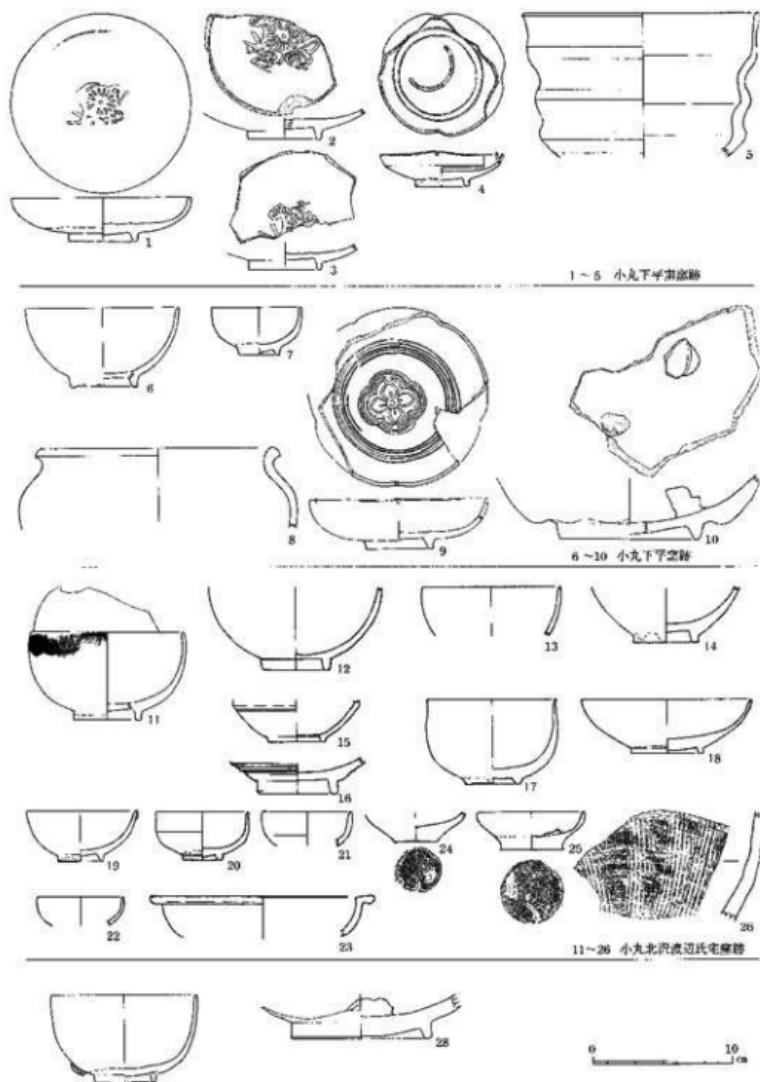


図10 相馬藩領旧小丸村の窯跡探集遺物（18世紀代）

Fig. 10 Surface finds belonging to the 18th century from sites of kilns at Omari area, Namie town, Fukushima prefecture

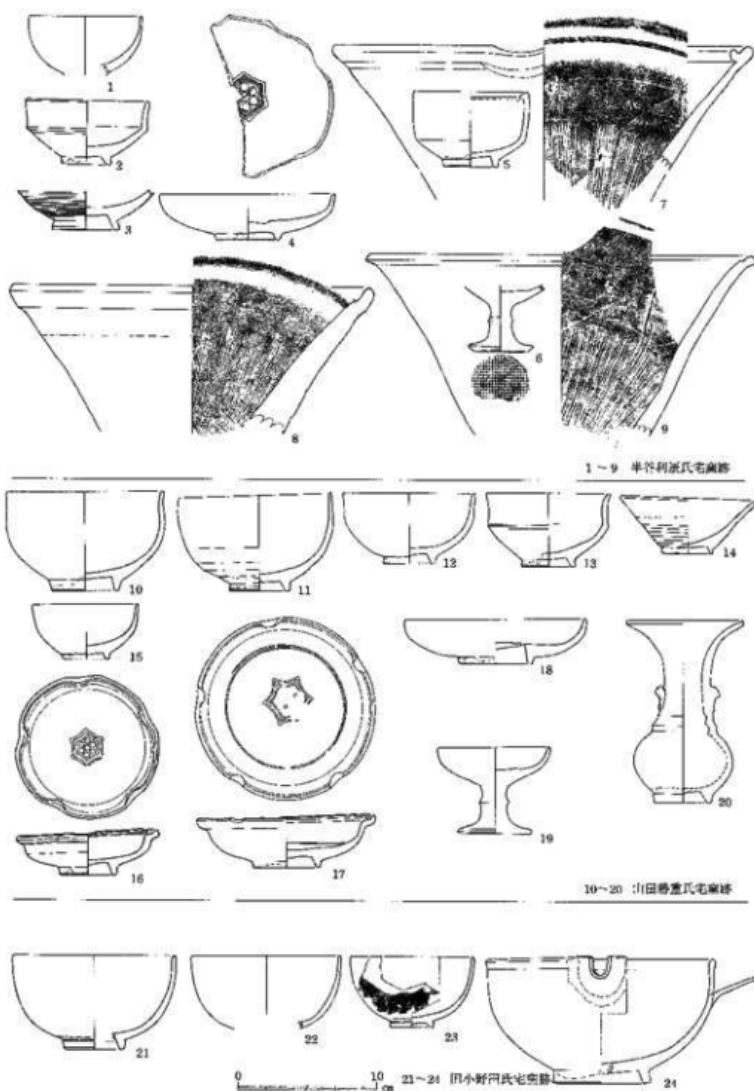
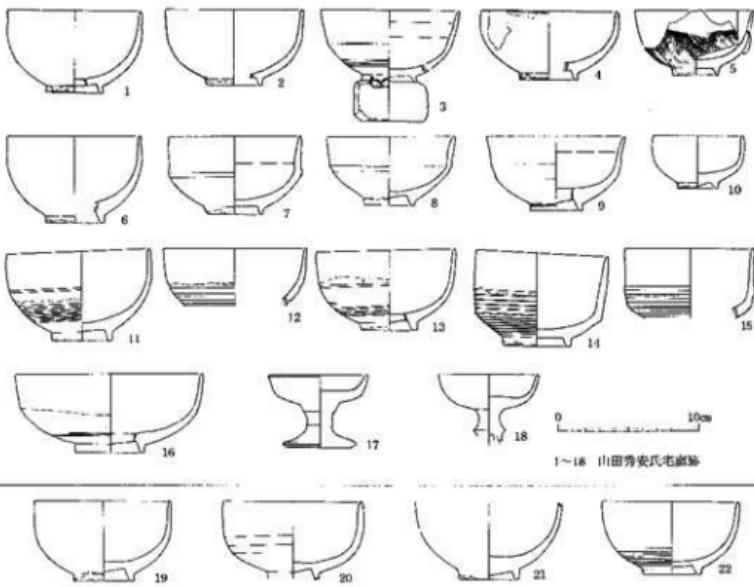


図11 相馬藩領旧大堀村後畠地区の窯跡採集遺物（18世紀代）

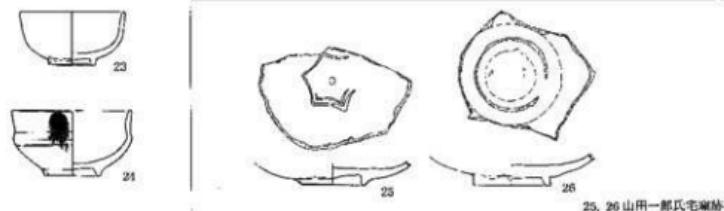
Fig. 11 Surface finds belonging to the 18th century from sites of kilns at Ohbori-Ushirohata arca, Namie town, Fukushima prefecture

[III 大堀村]

高瀬川の中流域に位置し、高瀬川によって形成された扇状地の扇尖部に集落が展開する。東は小野田、西は小丸、南は高瀬川を挟んで井手、北は田尻に接する。大堀相馬焼の伝説上の開窯の祖である半谷（休閑）家をはじめ、「七人衆」・「十五人衆」の伝承を持つ窯元の多くが集中する。現在も窯元が二十数軒あり、大堀相馬焼の里として有名である。明治3年（1870年）の人別改帳では、全戸数62戸（476人）中、瀬戸方に属するもの34戸（271人）とある（福島県前掲）。宅地化が著しい上、明治以降も現在に到るまで窯業生産が継続しているため、小丸、



19-24 旧渡辺正嗣氏宅窯跡



25, 26 山田一郎氏宅窯跡

図12 相馬藩領旧大堀村漆畠地区の窯跡採集遺物（18世紀代）

Fig. 12 Surface finds belonging to the 18th century from sites of kilns at Ohbori-Urushihata arca, Namic town, Fukushima prefecture

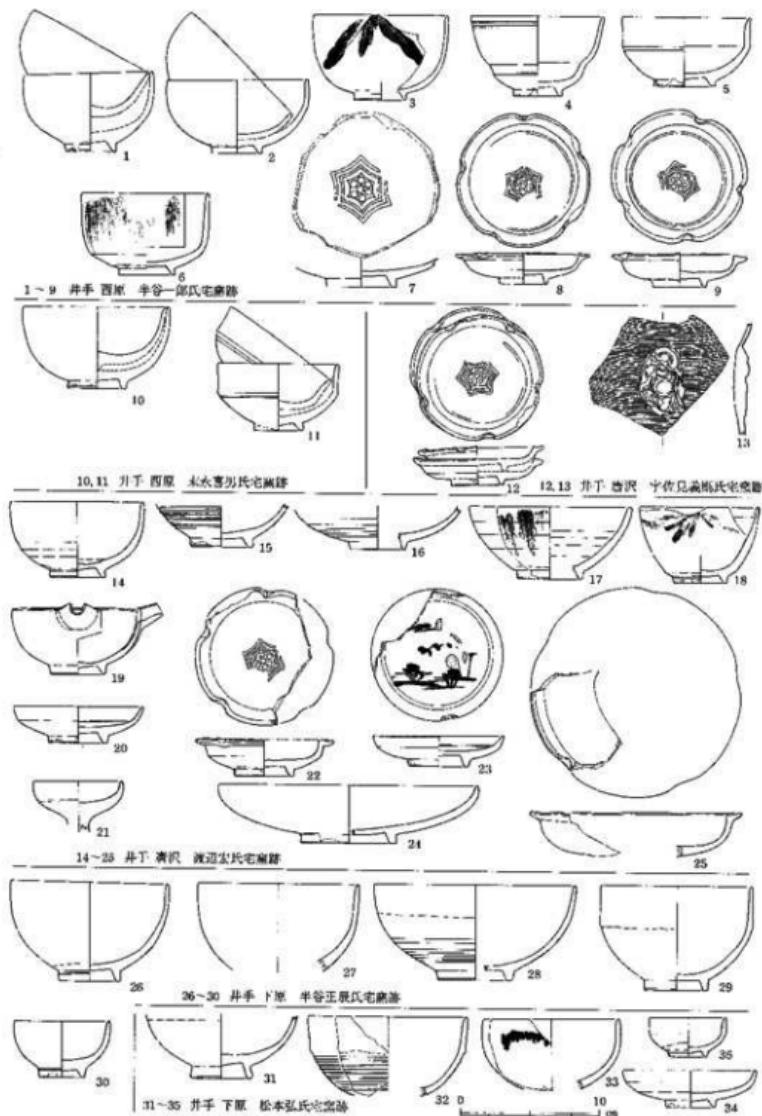


図13 相馬藩領旧井手村の窯跡採集遺物（18世紀～19世紀前葉）

Fig. 13 Surface finds belonging to the 18th century-the early 19th century from sites of kilns at Ida area, Namie town, Fukushima prefecture

井手地区に比べ、踏査により江戸時代の様相を窺い知ることは困難な状況にある。

旧大堀村では、後畠地区の南斜面と漆畠地区的東斜面に窯が多く存在する。採集遺物により18世紀代の操業を確認し得た窯跡は9箇所に過ぎないが、上記の理由で、実際にはこの数を大きく上回る可能性が高い。

採集遺物（図11・12）を見る限り、器種的には圧倒的に碗が多く、皿と仏壇器がこれに次ぐ。片口鉢、仏花器、擂鉢等も見られるが、量的には少ない。碗は種類も豊富で、灰釉丸碗、灰釉腰折碗、灰釉・鉄釉掛け分け碗、鉄釉流し掛け灰釉碗の4種を主体に、各々の種類のなかにも大きさ、施釉方法、形状に多くの変異を有する。皿には丸形に加えて折線の輪花皿も存在し、両者に見込まれ印文が認められる。押印文は、多角形の区画内に七曜文を配したワンポイント的なものに限られ、後述する旧井手村の製品に共通し、旧小丸村の製品とは様相を異にする。

〔旧井手村〕

高瀬川を挟んで旧大堀村に対面する。南側には双葉町との境をなす丘陵地が広がり、丘陵と高瀬川に挟まれた傾斜地に集落が形成されている。南の丘陵地には、美森山、陣ヶ沢といった陶土産出地が存在する。明治3年（1870年）の人別改帳では、全戸数50戸（356人）中、瀬戸方に属するもの37戸（268人）とある（福島県前掲）。大堀と異なり、大正期の不況の際、菱賀業に転業する者が多く、最後まで残っていた井手猿田の井手窯も昭和16年（1941年）の戦時統制企業整備令により廃業に及んだため、今日、井手において窯業を営む家はない。

18世紀代に遡る窯跡は、猿田、西原、唐沢、下原に分布する。採集遺物は、19世紀代のものが大半を占めるが、今回は18世紀代のものを中心紹介する（図13）。生産器種は、旧大堀村

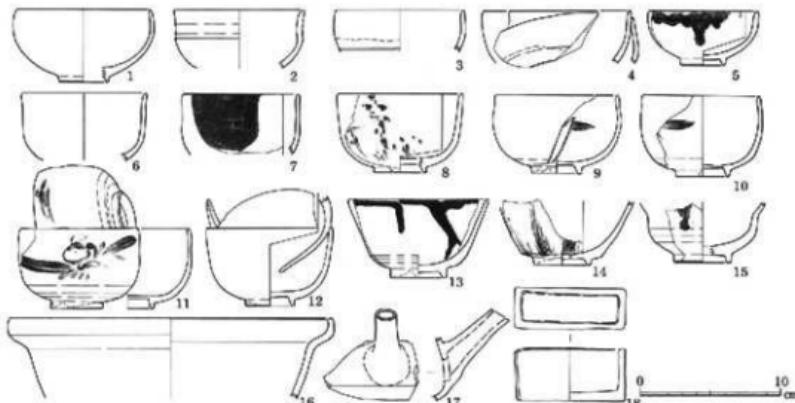


図14 相馬藩領旧井手村高倉地区荒木氏宅窯跡採集遺物（19世紀初頭～前葉）
Fig. 14 Surface finds belonging to the early 19th century from Araki site of kiln at
Ide-Takakura area, Namie town, Fukushima prefecture

同様、碗が主体であり、碗の種類も共通するものが多い。しかし各種の碗や折縁輪花皿は、大堀に比べ全体に新しい様相を示すものが多く、18世紀代前半にまで遡る資料は確認できない。

荒木氏宅窓跡の採集遺物（図14）は、19世紀初頭から前葉のまとまった資料と考えられるところから、今回取り上げた。器種的には碗が多く、他に土鍋、土瓶、線香立て等がみられる。碗には、前代からの伝統を引く種類（灰釉丸碗、灰釉腰折碗、灰釉・鉄釉掛け分け碗、鉄釉流一掛け灰釉碗）に加えて、鉄絵灰釉腰張碗が多く認められる。尖透性の様白色の灰釉がみられる。

3. 相馬陶器の編年と製作技術の検討

(1) 大堀相馬焼の編年

大堀相馬焼の編年作業は、主として消費地遺跡出土の一括資料を中心に行った（図15）。

17世紀末の最も古い灰釉丸碗は、18世紀代に一般的なものに比べ、体部の丸みが強く、高台は小振りで、全体の形としては京・信楽系陶器の丸碗に近い印象を与える。

18世紀には、飯碗として用いられたであろう中碗を主体とする生産体制が確立している。この時期の灰釉丸碗は、口径に対して器高の低いものが多く、口縁部直下が僅かに括れた「すっぽん口」を呈するものが後半期に多くみられる。以前指摘したように、灰釉・鉄釉掛け分け碗と鉄釉流し掛け灰釉碗は、それぞれ瀬戸・美濃の腰錦碗と尾呂茶碗を寫したものであり、その出現の時期は、大堀相馬と瀬戸・美濃で一致する。腰錦碗写しのうち、後出のD類は、瀬戸・美濃に直接本歌となるものなく、大堀相馬焼が腰錦碗を独自に消化し、新たに生み出した製品と言える。大堀相馬焼の灰釉碗は高台脇まで釉が垂れる特徴があり、露胎部分が一般的に広い瀬戸・美濃や、釉切部分の処理が丁寧な京・信楽とは異なる。18世紀後葉には、中碗を主体としつつも、猪口、小杯、灰吹といった、酒・煙草等の嗜好品に対応した器種の生産が始まる。

18世紀末から19世紀初頭の段階には、伝統的な灰釉碗・皿類に鉄絵製品が新しく加わる過渡的な様相がみられる。中碗の変化としては、灰釉丸碗は大振りになり、腰錦碗写しや腰折碗は口径が広がる。初期の鉄絵皿は、18世紀代の皿の形状を受け継ぎ、体部は丸みを帯びて立ち上がる。嗜好品に対応した器種としては、小型の端反碗や腰張碗、土瓶といった煎茶器の生産が、この時期に開始される。初期の土瓶は、撫で肩で口頭部が短く、全体につぶれ気味である。

19世紀前葉以降、鉄絵の皿類や、土瓶と小型碗からなる煎茶器、徳利と小壺からなる酒器、行平鍋や土鍋といった調理具、灯明皿やその受け皿・カンテラ等の灯火具が主力製品となり、飯碗を主体とする18世紀的様相は払拭される。19世紀中葉には、餌猪口や植木鉢といった消費者の趣味・娯楽に対応した製品も作られるようになる。鉄絵皿は、中皿は体部の立ち上がりが緩やかで外に開き、小皿は体部下半に屈曲点を持って急に立ち上がる。土瓶は次第に肩が張るようになり、当初型作りであった耳は、粘土紐によるリング状のものが主流となる。19世紀中

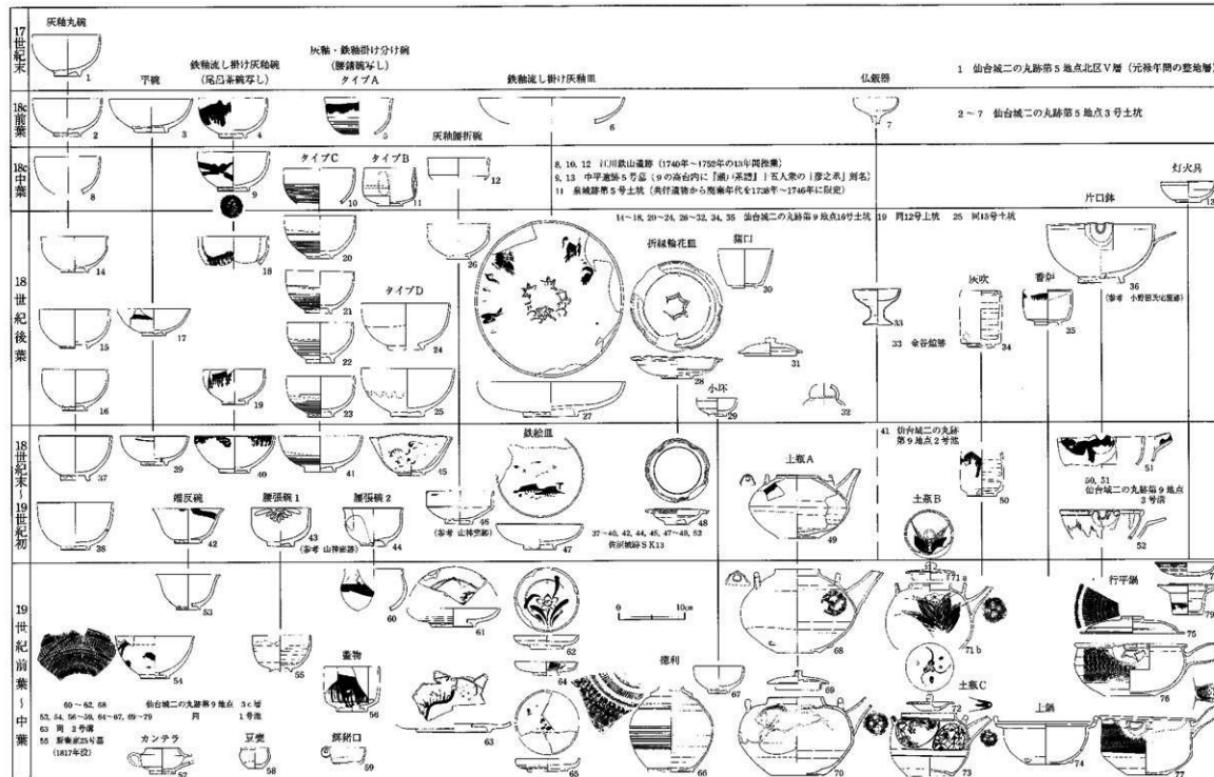


図15 消費地調査一括資料に基づく太堀相馬焼の属年

Fig. 15 Chronological sequence of Ohbori-souma ware

	小野相馬系陶器（灰釉製品）	小野相馬系陶器（鉄釉製品）	瓦
18世紀前葉	<p>1 片口鉢 花込松ノ目刷剥落小皿 花込松ノ目刷剥落剥離大皿</p> <p>2 灰吹</p>	<p>3 進鉢小型 鉄釉小鉢 鉄釉中鉢 (口縁部灰墨剥け)</p> <p>4 進鉢大型</p>	<p>5 瓦</p>
18世紀中葉	<p>6 見込印花文鉢</p> <p>7 見込松ノ目刷剥落剥離大鉢</p> <p>8 見込松ノ目刷剥落小鉢</p> <p>9 香炉・火入</p> <p>10 乳頭形</p> <p>11 瓶</p> <p>12 蓋</p> <p>13 蓋水入</p> <p>14 蓋水入</p> <p>15 蓋水入</p> <p>16 蓋水入</p> <p>17 蓋水入</p> <p>18 蓋水入</p> <p>19 蓋水入</p> <p>20 蓋水入</p> <p>21 蓋水入</p>	<p>22 光明屋</p> <p>23 光明屋</p> <p>24 光明屋</p> <p>25 光明屋</p> <p>26 光明屋</p> <p>27 光明屋</p> <p>28 光明屋</p> <p>29 光明屋</p> <p>30 光明屋</p> <p>31 光明屋</p> <p>32 光明屋</p> <p>33 光明屋</p> <p>34 光明屋</p> <p>35 光明屋</p> <p>36 光明屋</p> <p>37 光明屋</p> <p>38 光明屋</p> <p>39 光明屋</p> <p>40 光明屋</p> <p>41 光明屋</p> <p>42 光明屋</p> <p>43 光明屋</p> <p>44 光明屋</p> <p>45 光明屋</p> <p>46 光明屋</p> <p>47 光明屋</p> <p>48 光明屋</p> <p>49 光明屋</p> <p>50 光明屋</p> <p>51 光明屋</p> <p>52 光明屋</p> <p>53 光明屋</p> <p>54 光明屋</p> <p>55 光明屋</p> <p>56 光明屋</p> <p>57 光明屋</p> <p>58 光明屋</p> <p>59 光明屋</p> <p>60 光明屋</p> <p>61 光明屋</p> <p>62 光明屋</p> <p>63 光明屋</p> <p>64 光明屋</p> <p>65 光明屋</p> <p>66 光明屋</p> <p>67 光明屋</p> <p>68 光明屋</p>	<p>7~10, 12~21 金谷台古窯跡 11 着手執岩鬼町江川山遺跡</p>
18世紀後葉	<p>22 光明屋</p> <p>23 光明屋</p> <p>24 光明屋</p> <p>25 光明屋</p> <p>26 光明屋</p> <p>27 光明屋</p> <p>28 光明屋</p> <p>29 光明屋</p> <p>30 光明屋</p> <p>31 光明屋</p> <p>32 光明屋</p> <p>33 光明屋</p> <p>34 光明屋</p> <p>35 光明屋</p> <p>36 光明屋</p> <p>37 光明屋</p> <p>38 光明屋</p> <p>39 光明屋</p> <p>40 光明屋</p> <p>41 光明屋</p> <p>42 光明屋</p> <p>43 光明屋</p> <p>44 光明屋</p> <p>45 光明屋</p> <p>46 光明屋</p> <p>47 光明屋</p> <p>48 光明屋</p> <p>49 光明屋</p> <p>50 光明屋</p> <p>51 光明屋</p> <p>52 光明屋</p> <p>53 光明屋</p> <p>54 光明屋</p> <p>55 光明屋</p> <p>56 光明屋</p> <p>57 光明屋</p> <p>58 光明屋</p> <p>59 光明屋</p> <p>60 光明屋</p> <p>61 光明屋</p> <p>62 光明屋</p> <p>63 光明屋</p> <p>64 光明屋</p> <p>65 光明屋</p> <p>66 光明屋</p> <p>67 光明屋</p> <p>68 光明屋</p>	<p>22, 24~25, 35~38 金谷台古窯跡 32, 33~34 松合城二の丸跡裏手地点15、16号土坑</p>	
19世紀初頭～前葉	<p>39 光明屋</p> <p>40 光明屋</p> <p>41 光明屋</p> <p>42 光明屋</p> <p>43 光明屋</p> <p>44 光明屋</p> <p>45 光明屋</p> <p>46 光明屋</p> <p>47 光明屋</p> <p>48 光明屋</p> <p>49 光明屋</p> <p>50 光明屋</p> <p>51 光明屋</p> <p>52 光明屋</p> <p>53 光明屋</p> <p>54 光明屋</p> <p>55 光明屋</p> <p>56 光明屋</p> <p>57 光明屋</p> <p>58 光明屋</p> <p>59 光明屋</p> <p>60 光明屋</p> <p>61 光明屋</p> <p>62 光明屋</p> <p>63 光明屋</p> <p>64 光明屋</p> <p>65 光明屋</p> <p>66 光明屋</p> <p>67 光明屋</p> <p>68 光明屋</p> <p>69 光明屋</p> <p>70 光明屋</p> <p>71 光明屋</p>	<p>51~55 本町A窯跡</p> <p>56~60 平橋用窯跡</p>	

図16 小野相馬焼の編年

Fig. 16 Chronological sequence of Ono-souma ware

葉には山水土瓶が作られるようになり、土瓶の蓋に落し蓋が登場する。

(2) 小野相馬焼の編年

消費地での確認作業が十分でないため、窯跡採集資料を主体に編年案を示す (図16)。

小野相馬焼は、碗、皿、鉢、香炉・火入、仏壇器、蟹水入といった、淡青灰色ないし淡青灰白色を基調とする灰釉製品と、擂鉢、灯明皿等の鉄釉・暗緑褐色系の灰釉を用いた製品から構成される。初期の製品は18世紀前葉まで遡ることが確認できるが、今後の調査の進展によって、大堀相馬焼同様、生産の開始時期を17世紀末まで繰り上げる必要が生じる可能性が高い。18世紀中葉～後葉の時期に最も生産規模が拡大したと考えられるが、19世紀に入ると、大堀相馬系鉄釉製品や館ノ下系の堀類へ生産方針の転換が図られた結果、急速に衰退する。主体となるのは、見込の釉を蛇の目状に剥いだ小皿や折縁大鉢、香炉・火入、片口鉢、擂鉢、灯明皿であり、18世紀代の碗を主体とする大堀相馬焼と競合する部分は少なかった。消費地でのあり方でいえば、新地町十二所A遺跡 (図17) のような生産地に近い遺跡からは、生産されている器種が一通り出土するが、仙台城のように生産地から離れた遺跡では、小型の器種に出土が偏る傾向がみられる。次に主な器種に関して、その変遷を述べる。

見込蛇の目釉剥ぎ小皿は、全体に作りが丁寧でシャープなものから、次第に底部の厚みが増し、粗雑なものへと変化する。折縁の大皿や大鉢は、口縁部が斜めに外傾する形態から、外傾したのち上方に短く直立する形態へと変化する。香炉・火入は、直線的な体部が僅かに外傾する形態から、体部が緩やかにカーブして口縁部が僅かに内傾する形態へと変化する。擂鉢には、口縁部が玉縁状に肥厚するもの (A類)、口縁部直下に稜線を持ち、口縁部に灰釉が上掛けされるもの (B類)、外間に突帯が1条巡るもの (C類) がみられる。擂鉢の一部に関しては、釉薬の用い方や、ロクロの整面から起こす際の繩紐の使用など、福島市飯坂に所在する岸屋 (鈴木・堀江1996) の擂鉢との共通性が認められ、両者の技術的関連性を指摘できる。

(3) 相馬陶器生産の技術系譜

これまで述べてきたように、18世紀代の相馬陶器には、瀬戸・美濃産陶器を模倣した大堀相馬焼の碗皿類や、岸窯製品との技術的関連が考えられる小野相馬焼の擂鉢などが存在する。小野相馬系灰釉製品については、製品自体の特徴から、モデルとなった製品の產地や技術的系譜を追うことは困難である。大堀相馬焼、小野相馬焼ともに素焼きを行った後、本焼きを行っており、素焼きの段階を経ない瀬戸・美濃産陶器とは、製作工程上大きな違いがある。また一方で、小野相馬焼については、初源期の窯跡で陶器と共に「東海式」軒半瓦が生産されている点で、瀬戸・美濃を含む東海地方の窯業技術との関係が想定できる。以下では、これらの相馬陶器を生産した窯の構造と窯詰技法を検討し、改めて相馬陶器の技術系譜を考える。

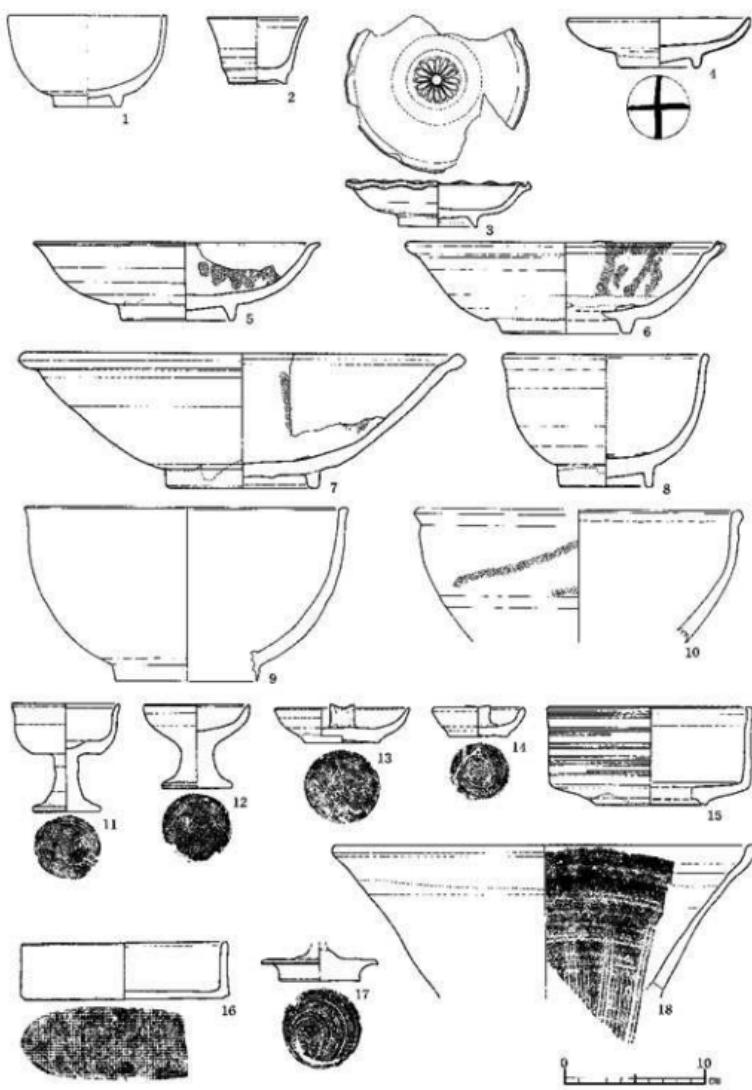


図17 福島県相馬郡新地町十二所A遺跡出土の小野相馬焼（2～8, 11～18は飯村1984原図に加筆）
Fig. 17 Ono-souma ware from Junisho A site at Shinchi town, Fukushima prefecture

① 窯の構造

相馬陶器の窯跡で、発掘調査により窯の構造が明らかにされた例としては、大堀相馬焼を生産していた長井屋窯跡(大竹憲治他1989)と山神窯跡(大竹憲治他1982)の二例が挙げられるのみである。また、江戸時代の窯が現存する例としては、相馬市中村の相馬駒焼田代窯がある。他に近代に属するが、館ノ下焼に関しては、本町B窯跡(長沢古窯跡)や本町C窯跡(今野窯跡)をもとに、窯の構造の概要が判る(図18・19、表4)。これらはいずれも連房式登窯であり、焼成時に炎が通炎孔を通り横に走る「横狭間」の構造を持つという共通点が見られる(田代窯については「斜狭間」に近い可能性もある)。天井部の残

る田代窯、本町C窯では、かまぼこ型の天井が確認できる。焚口および燃焼室の構造の判る長井屋窯跡の場合、焚口は幅約35cm、奥行約30cmあり、そこから急に開き、三角形の燃焼室(胴木間)になる。いずれも窯尻に「捨門」と呼ばれる部屋が付き、この部分では通常、製品の焼成が行われない。焼成室の間数は、7から8室の窯(田代窯・長井屋窯跡・本町B窯跡)と、3室の窯(山神窯跡・本町C窯跡)の大小二つのタイプが認められる。未調査の窯跡に関しては、現況から考へて焼成室が10室を超えるような大規模な例は認めがたい。焼成室の規模は、部屋数の近い田代窯、長井屋窯、本町C窯の3者を比較する限り、時代が下るにつれ大型化する傾向が看取される。窯体の傾斜は、田代窯、大堀相馬系窯、小野相馬系窯が13度~15度と比較的緩やかなのに対し、館ノ下系窯では35度前後の急傾斜をとる。それと関連するが、田代窯・大堀相馬系窯・小野相馬系窯には人工のマウンドにより傾斜を確保する例が多く認められるのに対して、館ノ下系窯は全て丘陵の急な斜面を利用し、完全に人工のマウンドの上に窯を構築する例は皆無である。

次に上述した相馬陶器の窯構造に関して、瀬戸・美濃地方の連房式登窯と比較検討する。両者の根本的な相違点は、その狭間構造にあるといえる。すなわち、瀬戸・美濃地方の連房式登窯では、唐津系に属する最古段階の元屋敷窯とその系譜を引く清安寺窯(横狭間)、定林寺東窯・大川東3号窯(斜め狭間)等の少数の例を除き、縱狭間構造が一般的である。瀬戸・美濃地方の連房式登窯の焼成室の間数は12室から24室程度のものが一般的であり(安藤勝昭1981・

表4 相馬陶器生産窯の構造と規模

Tab. 4 List showing the structure and scale of kilns of Souma ware

地名	代	窯室	片	室	土	待	壁	本	C	高
新宿	代	17C前~現代	14C~明治	19C後~現代	19C後~現代	明治~昭和	昭和26~昭和27			
品	代	相馬系窯	大堀相馬系窯	大堀相馬系窯	大堀相馬系窯	大堀相馬系窯	大堀相馬系窯	大堀相馬系窯	大堀相馬系窯	大堀相馬系窯
原	代	通房式登窯	連房式登窯	連房式登窯	連房式登窯	連房式登窯	連房式登窯	連房式登窯	連房式登窯	連房式登窯
田代	代	7室	8室	8室	8室	8室	8室	8室	8室	8室
新宿	代	11度~15度	13度~15度	15度	15度	15度	15度	15度	15度	15度
品	代	7室	8室	8室	8室	8室	8室	8室	8室	8室
新宿	代	1.8m	2.3m	2.05m	2.3m	2.3m	2.3m	2.3m	2.3m	2.3m
品	代	1.7m	1.7m	1.5m	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m
新宿	代	2.1m	2.3m	2.05m	2.3m	2.3m	2.3m	2.3m	2.3m	2.3m
品	代	1.4m	1.7m	1.5m	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m
新宿	代	2.2m	2.5m	2.05m	2.5m	2.5m	2.5m	2.5m	2.5m	2.5m
品	代	1.3m	1.8m	1.5m	1.8m	1.8m	1.8m	1.8m	1.8m	1.8m
新宿	代	2.3m	2.8m	(待)	2.8m	2.8m	2.8m	2.8m	2.8m	2.8m
品	代	1.3m	1.8m	(待)	1.8m	1.8m	1.8m	1.8m	1.8m	1.8m
新宿	代	2.3m	3.0m	(待)	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m
品	代	1.3m	1.7m	(待)	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m	1.7m
新宿	代	2.4m	3.0m	(待)	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m
品	代	1.3m	1.6m	(待)	1.6m	1.6m	1.6m	1.6m	1.6m	1.6m
新宿	代	2.6m	2.9m	(待)	2.9m	2.9m	2.9m	2.9m	2.9m	2.9m
品	代	1.8m	1.6m	(待)	1.6m	1.6m	1.6m	1.6m	1.6m	1.6m
新宿	代	(待)	(待)	(待)	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m	3.0m
品	代	(待)	(待)	(待)	2.2m	2.2m	2.2m	2.2m	2.2m	2.2m
新宿	代	(待)	(待)	(待)	(待)	(待)	(待)	(待)	(待)	(待)

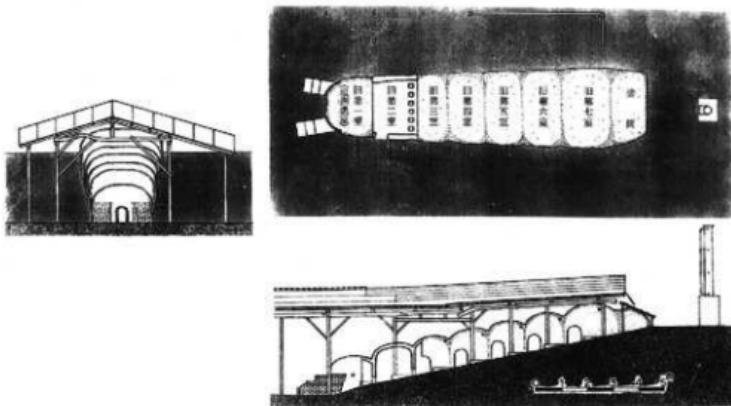


図18 福島県相馬市中村田町相馬駒焼田代窯現況（飯淵康一他1991原図に加筆）
 Fig. 18 Tashiro kiln that have produced Souma-koma ware at Souma city, Fukushima prefecture

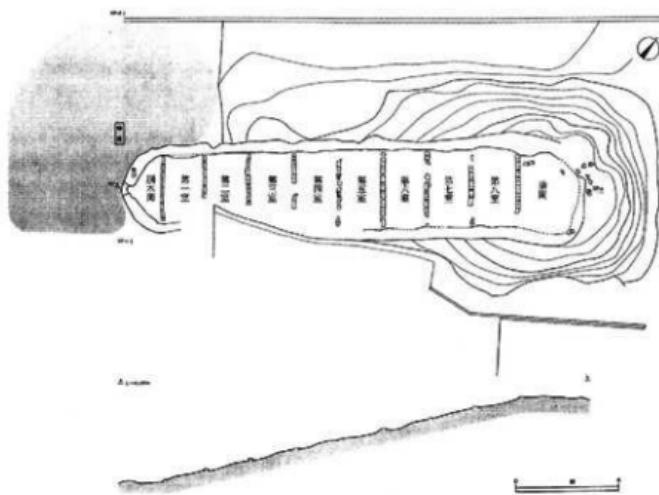


図19 福島県双葉郡浪江町大堀漆畠長井屋窯跡（大竹憲治他1989より）
 Fig. 19 Nagaiya site of kiln at Ohbori-Urushihata area, Namie town, Fukushimas prefecture

82)、相馬の窯に比べ格段に部屋数が多い。また、18世紀以降の窯に限れば、焼成室1室当たりの規模も相馬の窯の及ぶところではない。程度の差はあるものの、焼成技術の向上に伴って、焼成室の規模が時代が下るにつれ大型化するという点に関しては、肥前地方の窯（大橋康二1993）や瀬戸・美濃地方の窯（藤沢良祐1987）と共通する。しかし、瀬戸・美濃地方の窯の場合、焼成室は床面積だけでなく高さの点でも大型化が顕著であるが、相馬陶器の窯では床面積が拡大するだけで、高さの伸びはあまり認められない。これは、焼成室内での炎のあり方を規定する狭間構造と、後述する窯詰技法の差異に人いに関連すると考えられる。

② 窯詰技法

大堀相馬焼の場合、18世紀代には、片口鉢等の大器品のなかに小型品を入れ子にすることはあっても、同種の製品の重ね積みは基本的に行わない。この時期の主力製品である碗は、通常1つの焼台に対して1点づつ置かれた状態で焼成されたと考えられ、皿についても同様である。焼台には、断面形がI字を呈する柱状のものと、立方体形のものがみられる。19世紀に入ると、鉄絵灰釉皿等一部の製品は、三角状の小さな胎土目を用いて重ね焼きされるようになり、製品の内面に小さな目跡が3箇所認められるものも存在する。桔梗台の使用は19世紀中葉以降であろう。また上手の製品は、匣に入れて焼成する場合もあったと考えられるが、匣そのものが確存であることからみて、あまり一般的な手法であったとは思われない。なお、重ね焼きされる製品の多くが鉄絵のある皿である点からみて、重ね焼きには、単に効率化を図るだけでなく、焼成時に灰等のフリモノから文様のある器面を保護する意図があったと考えられる。

小野相馬焼では、碗は3箇所、片口鉢は3～4箇所、目跡を有する場合が多く、小型の製品を入れ子にして焼成するのが一般的である。目には砂粒を多く含む粗い土が用いられる。皿や折縁鉢の内面の輪は蛇の目状にはぎ取られており、同種のものを直接重ね焼きしていたことが判る。擂鉢は、粉殻を多量に含む棒状の粘土を5箇所程度、目として挟み、重ね焼きしている。

相馬陶焼の田代窯では、現在、製品を匣にいれて焼成しているが、匣を用いるようになったのは明治以降という。館ノ下焼の場合、甕・鉢・擂鉢等の大器品が多く、匣は使われない。

このように、19世紀代の人堀相馬焼で稀に匣が用いられることはあっても、相馬地方では、匣を窯の天井近くにまで重ねるといった窯詰めは、江戸時代を通じて行われなかった。時代が下るにつれ窯が大型化する際、相馬地方の窯が、焼成室の床が広がるだけで、天井はさほど高くはならなかったのは、瀬戸・美濃地方の窯と違って、その必要がなかったからであろう。

4. 大堀相馬焼の経営形態と相馬藩の窯業政策

(1) 大堀相馬焼の経営形態

大堀相馬焼の生産構造に関しては、在郷給人の副業という側面を視軸にした研究がある（山

形方里子1987)。山形氏は、陶業生産者である「瀬戸方」が、自家営業者である「窯元」と、それに従属する「雇人」・「下働き」に階層分化し、さらに「雇人」は職官制による分業生産を行っていたとする。使われた史料は幕末期のものであり、藩による陶業保護・管理政策が本格化する前の段階、すなわち18世紀代の生産構造に関しては明らかにされていない。また、生産基盤である窯の形態・基数・所有関係も、史料上の割約からほとんど言及されていない。

分布調査で18世紀代の操業が確認できた大堀相馬焼の窯跡は24箇所あり、このうち旧大堀村と旧井手村の窯に関しては、大部分が在郷給人により経営されている点、寛政5年(1793年)に写された「瀬戸系譜」(大堀相馬焼協同組合1988)に由緒を持つ窯元が多く含まれる点を指摘できる。換言するなら、「瀬戸系譜」に由来を持つ窯元の多くは在郷給人層であり、彼らは18世紀の段階で個々に窯を保有する自家営業者であったといえよう。瀬戸・美濃地方では、独立した小経営の主体である「窯屋」が複数集まり、一つの長大な窯を、部屋を単位に共同使用していた(安藤前掲)。大堀相馬焼の場合、小規模な窯が在郷給人層を主体とする窯元により個別経営されている点に生産構造上の特徴がある。また、職官制による分業に関しては、絵付けをした製品が生産されていなかった18世紀後葉以前には、絵師や絵付けに必要な原材料の調達部門が不需要であったと考えられることから、19世紀以降に発達したと思われる。

瀬戸方の在郷給人の持高は一般に低く、陶業はそれを補う副業であったとされる(山形前掲)。一例として示した山田家の持高の推移(表5)から、17世紀末には同家の持高の伸びが頭打ちになっていたことが判り、そのことが同家が陶業を副業とするにいたる要因と考えられる。

18世紀後葉以前の窯跡が集中する旧小丸村には、「瀬戸系譜」に由来を持つ窯元が見あたらないことから、「瀬戸系譜」の成立時期は18世紀後葉から末葉と見るのが適当であろう。瀬戸・美濃地方では、窯屋集団が「由緒」や「筋目」を楯に新規参入者を排除し、職能集団としての特権を維持しようとする動きがみられる(篠宮雄二1996)。後述するように、天明の飢饉以後、18世紀末葉から19世紀初頭にかけて、相馬藩における陶業従事者は急増しており、瀬戸・美濃

表5 相馬藩領旧大堀村漆畠在住山田家(山田秀安氏宅窯の窯主)の持高の変化

Table 5 The transition of income from rice fields of the Yamada family who were shizoku and master of a kiln

年次	耕地面積	大堀村	小堀庄村	井手村	井手村	板谷村	合計	備考
慶永3年(1603)	山田地主名帳	367.6石6斗5升	354.6石6斗5升	119.7石2斗5升	35.1石2斗4升	145.5石7斗6升	972.4石3斗2升	「和田朝日記」(山田秀安文書)
寛文11年(1671)	山田地主名帳	+37.3石6斗5升	+169.4石4斗3升5升				112.3石4斗6升5升	「和田朝日記」(山田秀安文書)
宝永5年(1697)	山田地主名帳	+164.9石6斗4升					13.5石4斗6升2升	「和田朝日記」(山田秀安文書)
宝永5年(1697)	山田地主名帳						13.5石2斗4升7升	「和田朝日記」(山田秀安文書)
宝永6年(1703)	山田地主名帳		+64.8石2斗				13.5石2斗4升7升	「和田朝日記」(山田秀安文書)
安永6年(1777)	山田地主名帳						14.6石	「和田朝日記」(山田秀安文書)
文久3年(1863)	山田地主名帳						14.6石	「和田朝日記」(山田秀安文書)
明治5年(1872)	山田地主名帳						76.8石3斗3升6升	「和田朝日記」(山田秀安文書)

地方と同様の現象が生じたと考えられ、「瀬戸系譜」は、そうした現象の産物であろう。

(2) 相馬藩の窯業政策

相馬藩の窯業政策に関しては、これまで、相馬藩が国産方の出先機関として大堀に瀬戸役所を開設し、国産仕法により陶業を保護・管理するようになった文化元年（1804年）以降について語られる場合が多く、それ以前の状況は、元禄10年（1697年）の「瀬戸物士他領江不可出事」や、享保18年（1733年）の「下り瀬戸物以來仕入商売御留被成候付、御所焼之瀬戸物ヲ重ニ用可申事」等がわずかに知られる程度であった。

「窯掛役半減相当ニ候事」模紙文書は、人堀相馬焼の祖と伝えられる半谷休閑の子孫で、大堀で代々窯業を営む半谷利辰家が所蔵する。文書は後半部分が失われており、年代や性格は必ずしも明確とは言えないが、年代的には、文書にある年号のなかで最も新しい「巳ノ年」即ち寛政9年（1797年）よりは新しく、瀬戸役所が開設された文化元年（1804年）よりは古いと考えられる。本文書は、18世紀代の大堀相馬焼の生産と流通の実態を知る上で重要であり、発見者の山田秀安氏の御厚意で今回取り上げることができた。以下、その内容を年代順に示す。

・[安永二年（1773年）から]、寛政三年（1791年）までの18年間、人堀相馬焼は相馬藩が括して買い上げ、販売することになっていた。

・天明六年（1786年）、燃料の薪の不足により生産コストが上昇し、それが瀬戸物の値段を引き上げた結果、瀬戸物を扱う商人の出入りが少なくなったため、半谷小左衛門が、10パーセントの税を納めるかわりに瀬戸物を自分たちで販売したいとの願い出を行い、それが認められて、同年以降、毎年、百貫程度の税を藩に納めることになった。

・寛政五年（1793年）12月、再び、瀬戸物は藩が括して買い上げるとの命令が出された。

・寛政六年（1794年）4月、瀬戸物に関する税法が、生産者側からの願い出により、窯単位（「窯掛」）に変化した。その際、これまでに納めていた税の実績（年間百四十貫文）に基づいて、1「釜」当たりの標準的な税額（A）が次のような算式により決められた。

$$A = 140 \text{ 貢文} \div 400 \left(\left[\frac{\text{釜}}{\text{品}} \right] \times 0.5 \left(\frac{\text{製品の歩留まり}}{\text{品}} \right) \right) = 700 \text{ 文}$$

また実際には、「釜」が上・中・下の3段階に分けられ、各々、八百文、七百文、六百文の税の負担が求められた。

・寛政九年（1797年）、不足気味の燃料を遠方から輸送する際にかかる費用などが考慮され、税額が1「釜」につき百文軽減され、上釜七百文、中釜六百文、下釜五百文に改められた。

一般に買い上げ商品の藩の販売は、その手工業製品の商品化が著しく進んだ結果、本来の貢納的形態が崩れ、たとえ低価格とはいえ買い上げざるを得ない状況において行われるとされる。人堀相馬焼に関しても、遅くとも18世紀後葉には、商品化された手工業製品として、この地域の農民経済の中に大きな比重を占めていたことが裏付けられる。また、生産者と藩との間には、

卷之三

天明年年半々小人奉門港戸御賣ニケ之

買上ヶ相成り可候所ニ、占額不足二付並段
追々引上ヶ候ニ、商人出入不定ニ相成候ニ付、頃

東洋文庫叢書

公治元年丙午正月廿二日
同上

御正二種御御二付
御正二種御御二付
御正二種御御二付

卷之三

卷之三

卷之三

初版出来仕様而後、半減二冊ヶ続刊行ニテ中止廃所ハ
再版より又ノミニ才有出世す

「西暦、西暦の歴史」ノ年中上ヶ、書送三付

卷之三

成りてリク名内様ニ相成り可申候
ノ御内出御、右之御ノ年を

卷八 村莊之立舍四在鄉境，則設它帳八

卷之三

両者を仲介する商人が存在したことわかる。文書にある燃料となる薪の不足は、18世紀末葉から19世紀初頭前後に生じた生産業者の急増によって生じたと考えられ、考古学的にも窯の増加と周辺地域への拡散として確認できる。

文書にある「窯」は、窯における一つの部屋（焼成室）を指すと考えられ、400「窯」は、南北標葉郷に所在した窯の焼成室の合計とみなしうる。先述の通り、大堀相馬焼の窯の大部分は、焼成室の数が8室以内と考えられることから、18世紀末には少なく見積もっても、50基以上の窯が稼働していた公算が高い。分布調査で18世紀代の操業を確認した24基の窯は、窯が急増し始める大明期以前から稼働していたものに限られ、18世紀末の窯数としては、50基は妥当な数値といえる。同時期の東濃地方の窯は6村4郷の合計で36基（安藤前掲）、瀬戸周辺の窯は3村の合計で約40基（樋崎・小島1993）であり、大堀相馬焼の窯の数は特筆されよう。

寛政期以降に集中する各種の史料から、陶業従事者の急増は、陶器の生産・販売に関する税制改革とともに、陶業従事者の保護・管理政策の整備につながったことが判る。19世紀になって江戸から出土するようになる火堀相馬焼の土瓶や德利は、そうした基による陶業保護・管理

政策が一定の成功を収め、江戸市場への参入を可能にしたことの歴史であろう。

5. 結び

本論では、相馬藩領内の二つの陶器生産地をとりあげ、それぞれの生産内容を明らかにすると共に、その産業構造の特質についても検討を行った。即ち、相馬陶器の生産は、瀬戸・美濃地方の陶器と比較した場合、窯数が多い一方で、窯一基当たりの生産規模が小さく、生産効率も低いという特徴がある。18世紀代には、北標茶壺では大堀相馬焼が、中村城下近郊では小野相馬焼が生産され、両者は、生産量や流通量こそ違うものの、器種的に競合することなく、ともに、相馬藩・仙台藩の領内を主な市場に、東北地方の広い範囲に流通していた。しかし、18世紀末以降、二つの陶器生産地は全く別の道筋を歩むことになる。即ち、大堀相馬焼が藩の保護・管理政策のもと、煎茶器や酒器を中心に江戸市場への参入を成功させたのに対して、小野相馬焼を生産していた中村城下近郊の窯は、仙台城下の堤焼をはじめ各地に成立した小規模窯のまえに流通圈を失い、館ノ下焼とよばれる壺・鉢中心の地域密着型へと生産方針を転換する。両者の違いは、「器種の多様化」と「産地の地方化」という19世紀の焼物に関する全国的な消費動向に対する適応方法の違いといえる。

謝辞

東北大学埋蔵文化財調査研究センター長の須藤路先生には、日頃から研究の指針となる御指導を頂いている。また、調査研究員の藤沢敦、菊池佳子の両氏には、本研究のきっかけとなった仙台城二の丸跡出土資料の整理・分析を通して議論に応じて頂いた。古文書の読解・解釈では、東北学院大学の岩本由輝教授と東北大学日本史研究室の伊藤大介氏に御世話になった。資料の実測には、白石浩子さんと小山久美子さんに御協力頂いた。窯跡の分布調査や資料の見学等では、次の方々や、現地の多くの皆様の御協力を得ている。

福島県教育委員会、福島県文化センター、いわき市考古資料館、相馬市教育委員会、浪江町教育委員会、鹿島町教育委員会、追町教育委員会、原町市立野馬追の里歴史民俗資料館、双葉町歴史民俗資料館、中新川町立東北陶磁文化館、相馬郷土研究会

飯淵康一、飯村均、石原敬彦、大谷五郎、大迫徳行、大谷基、大本麻美、小丸哲也、木本元治、齐藤美穂、佐久間清登、佐藤玲子、志賀顯龍、鈴木功、川代清治右衛門、田原由男、寺島文隆、仲野泰裕、中山雅彦、西徹雄、羽柴直人、橋本博幸、牛谷利辰、藤沢良祐、木田泰貴、山田秀人、山田秀安、吉野高光

末筆ではあるが、これらの方々に感謝申し上げるとともに、相馬の陶業が地場産業として今後とも地域社会のなかで重要な位置を占め、さらに発展をすることを願う次第である。

〈引用・参考文献〉

- 青山國丸 1979 焼き物の破片と語る
- 安藤勝昭 1981・82 近世後期における窯業の展開－美濃・多治見地方における「窯跡」の実態
岐阜史学74号(45~63頁)・75号(22~37頁)
- 飯淵康一ほか 1991 切込焼工房・登窯場の復元案 東北大大学建築学報30号 43~51頁
- 飯村均 1987 福島県新地町十二所A遺跡出土の近世陶磁器 福島考古28号 75~88頁
- 伊藤止義ほか 1990 東北の陶磁史 福島県立博物館
- 岩崎敏大編 1969 相馬市史4 資料編1(奥松志)
- 岩本由輝 1980 さき書き六万石の歴人衆－相馬の社会史－ 刃水社
- 大竹憲治・長瀬州伸ほか 1982 近世・山神空跡の研究 福島県大郷町史三巻別冊
- 大竹憲治・志賀敏行ほか 1989 大畠・長井屋空跡 福島県浪江町教育委員会
- 大橋康二 1993 肥前陶磁 考古学ライブライアリ-55 ニューサイエンス社
- 大堀相馬焼協同組合 1988 大堀相馬焼創業三百年記念誌
- 金子智 1996 江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棟瓦の地方色 古代101号 144~160頁
- 佐久間光平・小村川達也 1995 佐沼城跡 追町文化財調査報告書第2集 追町教育委員会
- 佐藤洋 1986 新発田盆地改築調査報告 年報7 仙台市文化財調査報告書94集 37~54頁
- 篠宮雄二 1996 歴人集団と百姓 新しい近世史④ 213~247頁 新人物往来社
- 鈴木功・堀江格 1996 福島市飯坂町岸空跡について 福島考古37号 87~110頁
- 鈴木功 1997 相馬鉢ノ下焼今野空跡について 福島考古38号 127~132頁
- 高橋良一郎 1975 相馬のやきもの ふくしま文庫40
- 竹島周基 1974 相馬の民窯 行方文化2集 37~49頁 はらまち史談会
- 寺島文陞ほか 1980 金谷跡 伊達西部地区遺跡 福島県文化財調査報告書82集 109~149頁
- 東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1993・94 東北大大学埋蔵文化財調査年報6・7
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 東北大大学埋蔵文化財調査年報8
- 中山雅弘 1992 亂城跡 いわき市埋蔵文化財調査報告書31冊
- 横崎彰一・小島廣次 1993 鹿戸の本業焼 鹿戸市史 陶磁史篇5
- 羽柴直人 1996 江川鉄山跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団県立文化財調査報告書237集
- 福島県教育委員会 1985 歴史の道調査報告書 浜街道(勿来閘-新地) 福島県文化財調査
報告書155集
- 福島県 1965 福島県史9卷 近世資料2
- 藤澤良祐 1987~89 本業焼の研究(1)~(3) 鹿戸市歴史民俗資料館研究紀要11~13
- 服部哲也ほか 1994 名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査 遺物編 名古屋市教育委員会
- 本田泰貴 1993 聞き書き船ノ下焼今野齊さん 陶磁館ニュース17・18 東北陶磁文化館
- 山内幹夫 1992 中平遺跡 国営猪戸川農業水利事業遺跡調査報告 福島県文化財調査報告書208集
- 山形万里子 1987 奥州相馬藩における陶業生産の展開 日本歴史468号 63~79頁

付表 环境探集遗物觀察表(1)

Attached tab. Notes on surface finds at kilns(1)

付表 窑跡採集遺物觀察表(2)

Attached tab. Notes on surface finds at kilns(2)

付表 痕跡探集遺物観察表(3)

Attached tab. Notes on surface finds at kilns(3)

付表 犯跡採集遺物觀察表(4)

Attached tab. Notes on surface finds at kilns(4)

東北大学埋蔵文化財調査年報10

平成10年3月27日

発行 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1
東北大字遺伝生態研究センター内
TEL 022(217)4995

印刷 株式会社ホクトコーポレーション
